

織斑一夏はIS学園の セックスシンボルだ

桃次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏は『インフィニット・ストラトス』の中で一番魅力的なキャラクターだ（追記）

追記

このままダラダラと外伝を続けても埒が明かないので思い切って連載を再開する事にしました、またよろしくね。

目次

45

織斑一夏は I S 学園のセックスシンボルだ (加筆修正版)	1	虹色少年と危ない水着	54
一夏の I S スーツをデザインした奴って	6	太陽の下の暴徒たち	63
変態だと思ふ	6	肌と、汗と	70
I S 学園って元は女子校だし、学食の量	6	織斑くんはみんなの：	76
も男子には少し物足りないんじゃないか	6	くい込む視線	87
なあ	12	魅惑のオトコ	94
一夏はエロいよ	20	妹の心、姉知らず。	109
マスター布仏	26	恋の霸道	117
インフィニット・マタニテイー (前編)	38	天使の羽音	125
インフィニット・マタニテイー (後編)	38	既に勝敗は決している	131
		C o m e o n B i t c h	137
		愛のカタチ	148

たかが無人機ひとつ紅椿で押し出してやる！	156
想いの力	168
織斑一夏は世界のセックスシンボルだ	184
お菓子をくれてもイタズラするぞ	195
プロジェクトO (前編)	206
プロジェクトO (後編)	216
番外編 ノムリツシユ織斑一夏はIS学	226
園のセックスシンボルだ	236
変態たちの沈黙	244
アブナイ一夏 (前編)	244

アブナイ一夏 (中編)	255
アブナイ一夏 (後編)	265
マタニテイ・オブ・アビス	279
チフユにおまかせ! (前編)	288
チフユにおまかせ! (後編)	301
このおっぱいでIS乗るのは無理でしょ	311

織斑一夏はIS学園のセックスシンボルだ(加筆修正版)

女性にしか操縦できないパワードスーツ『インフィニット・ストラトス』を世界でただ一人ISを起動することが出来る男性『織斑一夏』そんな彼は影でこう呼ばれている事を彼自身は知っているだろうか。

『IS学園のセックスシンボル』

これはそんな彼のIS学園における暮らしの一部を切り取った物語だ。

「ヤバイ遅刻遅刻っ!」

織斑一夏は今ISスーツをその身に纏い校庭まで全力でダッシュをしていた、不本意ながら一年一組のクラス代表を務める一夏はその立場上クラス担任や副担任から手伝いを頼まれる事が多々あった。

今日も手伝いという名の雑用に追われ時計を見ると次の授業開始時間まで既に5分を切っていた。

「急がないとー！」

急いでロッカールームに飛び込み制服を脱ぎ捨て世界唯一の男性I S操縦者の為に作られたオーダーメイドのI Sスーツに着替え、その姿のまま校舎の廊下を走る。

「きゃああ!」

「あー!ゴメン!!」

廊下は走らないという全国共通の校則はこのI S学園にもあったが背に腹は変えられない。

「お、織斑くん…」

途中何人かの生徒や先生とすれ違う、一夏は急ぐあまり彼女たちの表情が朱に染まっている事に気が付かなかった。

「私が受け持つ授業に遅刻をするとは良い度胸をしているな、織斑」

クラス担任であり、一夏の実姉でもある織斑千冬は青筋を立てながらそう言った。校庭には既に千冬とクラスメイト達が集まっていた。

「はあ……はあっ………(っ)……(っ)……(っ)めんっ千冬姉!」

息を切らしながら一夏は謝罪する、千冬はその姿をまじまじと見る。

広大な学校内を長時間走ったのだろう、全身の毛穴から滝のように汗を滲ませ、身に纏うI Sスーツが汗を吸い、一夏の躰のラインをよりしつかりと衆目に晒していた。

流れる汗が露出した腹部の中央、臍へと流れ落ちる。顔は紅潮し乱れた吐息はまるで性交の最中を見る者に連想させるには充分なものだった。その艶姿は多感な時期を過ごす少女達には今の一夏の姿は少し刺激が強かった。

(なんだ……この歩く猥褻物は……)

千冬は実弟から醸し出される強烈な色香にたじろぐ、千冬の困惑はもつともだろう。これまでひとつ屋根の下で寝食を共にしてきた弟が少し目を離れた隙にこのような性を遂げていたとは。

男子三日会わざれば刮目して見よ。とは言いが、このような性徴は千冬にとっては衝撃だった。

顔を一夏の方に向けながら千冬は集まっていた他の生徒達を横目で見る。逃げ場が欲しかったのだ、校庭に突如現れた猥褻物から少しでも目を離れたかった。

「うっ……!?!」

生徒達は一夏の姿に釘付けになっていた、初めて性的ポルノを見た子供のような目で一夏の姿を脳裏に焼き付けようと。

千冬の衝撃は生徒達にとっても同じだったようだ。エロい、エロいのだ。今の一夏は。は。

その異様な光景に吞まれかけるも千冬はゴクリと生唾を飲みながら首を振るう、初代

ブリュンヒルデとしての矜持が千冬の意識を正気へ引き戻した。

「……………開始1分前だ、次からは気をつけるように」

「は…はいっ」

「それと汗はちゃんと拭け！はしたないぞ！」

「は、はい…」

千冬は一夏の紅潮した顔に私物のタオルを押し付ける、顔を隠せば一夏から発せられる色香を軽減出来ると思った千冬。

「はアあ…ん…」

（変な声を出すな…！）

逆効果だった、息切れを起こしていた一夏の呼吸器官は外部から少しでも空気を吸収しようとその機能を發揮しており、そこに千冬のタオルが顔という呼吸器官が密集する場所を押さえ込んだ為に一夏は呼吸が阻害され、苦しんだ。

「んっ…ふっ…ア」

「さ、さっさと拭け…！」

一夏の痴態に釘付けとなる生徒達、無理もない。学校生活というのは校則に基いた持ち物や行動にある程度の制限が課せられる。

そこに突如このようなエロ本から飛び出して来たような男が現れたのだから彼女た

ちに今の一夏を無視しろなど無理な話である。

「ふあ……ん……拭き、ましたあ……」

「さ……さつさと列に並べ、それとタオルを返せ！」

「あ、洗って返すよ千冬姉」

「すぐに返せっ！」

一夏の手握られたタオルをぶんどる千冬、千冬の掌にタオルから一夏の汗が染み
た。その生々しい感触に千冬は一瞬硬直するも裂帛の意思でそれを振り切る。

「さあお前達！授業を始めるぞ!!」

「は、はい!!」

千冬の号令で正気を取り戻した生徒達、しかし先程の一夏の艶姿を忘れ去ることは出
来ず、生徒達は皆訓練に集中する事が出来なかった。

織斑一夏、彼の受難は続く……

一夏の I S スーツをデザインした奴って変態だと思っ

「おりむーって、エッチだよね」

I S 学園一年一組の教室に爆弾が投下されたのは昼休みも中頃に差し掛かった頃だった。

クラスメイトの談笑で賑わっていた教室の温度は突如絶対零度まで急降下し、生徒達の視線はその爆弾を放ったテロリストに集中した。

「ちよつと本音!」

爆弾を放ったテロリスト、布仏本音はクラスメイトの視線を一身に浴びるもそれも何処吹く風といった様子だ。

本音は友人達の静止も聴かず、爆撃機の如く爆弾を投下し続ける。

「だって昨日おりむーが実習で遅刻寸前になった時の姿…みんな見たでしょ」

本音の言葉を聞いた瞬間、クラスメイト達は時が止まったかのように静止する。

クラスメイト達の脳裏に刻みつけられた一夏のあられもない姿。誰かの生唾を飲む音が、無音の教室に響いた。

「確かに…私もそう思う」

「清香!」

谷本癒子は友人、相川清香がこの爆撃機の編隊に突如加わった事に驚愕しつつも、友人2人の凶行を諫めようとする。

しかし…

「…実は私も、そう思ってた」

夜竹さゆかの援護射撃が癒子を阻む、お前もか。

「だってへそ出してるんだよ? 皆の目の前で」

確かに高校1年生男子が同年代の女子の目前でする格好にしては些か露出度の高いだろう、しかし癒子は反論する。

「いやっ…あれは倉持技研から支給された特注品だから! 一夏くんが自分で選んだわけじゃないから!」

「けどあんな身体のラインが出る服着て皆の前に汗だくで出てきたんだよ? もう…アレだよ」

「アレって何?!」

「アレはアレだよ、谷本さんもわかるでしょ?」

「わかんないよ!!」

癒子は孤立無援の戦いを突如強いられながらも、孤軍奮闘を続ける。がんばれ癒子、一年一組の秩序はお前にかかっている。

「はあ…癒子もさあ…強情張らないで素直になっちゃいなよ」

「え、私がおかしいの!？」

清香はやれやれと首をふりながら、懐からスマホを取り出した。電源を入れるとスマホの液晶に、昨日の一夏グラウンドでの痴態が写し出されていた。

「ちよっ…アンタそれどこで…ッ」

癒子は赤面しつつもその出処を清香に問いたです。

「I Sスーツに隠しカメラを仕込んでたんだ、おかげでバッチリと…」

「し、仕舞いなさいよそれ!」

「ほらズームよ」

清香は液晶画面に写っている一夏のへその部分に人差し指と中指を添えると、ねつとりとした手つきで指を左右に離した。

一夏のへそが、スマホの画面いっぱいに拡大表示される。

「やめっ…」

癒子は、口では静止の言葉を発するも、その眼はズームアップされる一夏のへそを凝視していた。

「やっぱり癒子も織斑くんを性的な目で見てたんだね」

「み…見てない!」

「素直じゃないなあ」

癒子と清香のやり取りを横目に、爆弾魔、布仏本音は教壇に立ち、手を挙げると特大の爆弾を放った。

「みんなーおりむーの何処がエッチだと思うー?」

普段ののほほんとした彼女からは想像もつかないゲスい発言にクラスメイトたちは驚愕する、コイツは何を言っているんだ。ギョツとするクラスメイトを尻目に、本音は大声で叫ぶ。

「私はうなじー!」

暫し、教室に沈黙が流れる。それを打破したのは清香だった。

「私は…:やっぱりおへそかな、形も良くてかわいいし」

「わ、私はおしり!」

「アタシは背中かなあ」

「おっぱいでしょ!!あの胸筋揉みしだきたい!!」

一年一組の教室は狂気へと飲まれていった、癒子は己の無力を憂いながら、ただ目前で繰り広げられる狂騒を見つめる事しか出来なかった。

「癒子は!? 癒子は何処なの!？」

「へ……?」

「癒子は! 織斑くんの何処が好きなの!？」

清香がハイライトの消えた目で癒子を問いただす。この女は、私にこの狂宴へ加われ
と言うのか。

「わ、私は……」

ああ清香、私の親友。吞まれてしまったのね、あの男。織斑一夏が発する魔性のフエ
ロモンに。

もう正気に戻ることに無い親友を憂いながら、癒子は眼前の狂気を受け入れた。

「……わ」

「わ?」

「わき……」

「んー聞こえないなあもつと大きな声で!」

「腋! 織斑くんの腋が好き!!」

「ひゅーマニアックう!!」

谷本癒子、陥落。

織斑一夏の学園生活は、一夏が知らないところで取り返しのつかない所へ舵を切ろう
としていた：

I S 学園って元は女子校だし、学食の量も男子には少し物足りないんじゃないかなあ

「それで、何か申し開きはあるか？」

出席簿を肩に背負いながら、一年一組担任織斑千冬は並んで正座する三人を見下ろす。

I S 学園一年一組の教室で起こった昼下がりの狂った宴は、騒ぎを聞きつけ、教室へと突入した千冬によって鎮圧された。

騒ぎの中心となった本音、清香、そして不本意ながら巻き込まれた癒子の三人は肩を震わせながら千冬の沙汰を待つ。

仁王立ちで額に青筋を立てながら三人の前に立つ姿は正に初代戦乙女（ブリュンヒルデ）の名に相応しい。しかし、本音と清香は命知らずにも千冬へ反論する。

「だっておりむーがエツチなのがいけないんですよー！」
「そうですねー！織斑くんがスケベ過ぎるのが悪いんですー！」

ぎやあぎやあと千冬へ反論する二人を横目に癒子は俯きながら、教室を席卷したあの熱狂に一瞬でも吞まれた事を一人恥じていた。

(けど…)

一夏のあられもない姿を脳裏に妄想する事だけはやめられなかった、今も癒子の脳内で一夏は腋を払げて癒子を誘惑する。

(ああ織斑くんダメだよお…そんなに払げちゃ…)

そうこうしている内に本音と清香の頭頂部に千冬が手に持った出席簿を縦に振り落とす。

「いったーい！」

「うぎゃー！」

二人仲良く地に伏す本音と清香、これで正気に戻ってくればいいのだがと癒子は二人を見つめる。

「ああ、そういえばお前もだったな」

(雑っ！)

もののついでに千冬の制裁を受ける癒子、三人仲良く突つ伏す姿は滑稽極まりなかった。

「しかし困ったことになったな…」

馬鹿三人に制裁を加え、ひと段落着いた千冬は、今後の一夏の周囲で起こり得る事を

考える。

あの男は、我が弟一夏は、もはや何か行動するだけでこの学園の女達の性的興奮を煽るだろう。

「いつそ一夏ひとりを別の教室に移してみるか…?」

方法としてはアリだろうが、それでは一夏が余りに可哀想だ、一夏自身も不服だろう。何せ悪いことなど何もしていないのだから。

ただそこに居るだけで、学園の秩序を崩壊させ得る存在。全く頭が痛くなる。千冬が一人教室で悶々していると、誰かが教室に飛び込んで来る。

「お、織斑先生!」

一年一組副担任、山田真耶は小柄な身体には不釣り合いなほど大きな胸を揺らしながら、血相を変えてやって来た。

「…どうした山田先生」

「織斑くんが…:食堂で、複数の生徒達に取り囲まれています!」

ああ、我が弟よ。何故おまえは呼吸するが如く問題を起こしていくのか。

「い、一夏!これでも食べるか!」

「一夏さん！私も分けて差し上げますわっ」

「一夏！アタシの酢豚もあげるわ！」

「一夏っ！」

「嫁ッ!!」

「「「「織斑くーん!!」」」」」

織斑一夏は今、代表候補生を含めた大勢の生徒達からごはんを分けてもらっていた。時間は少し遡る、きっかけは一夏の一言だった。

「学園の学食って美味いけど量がなあー……」

「一夏さん？もしかして足りないのですか？」

英国代表候補、セシリア・オルコットが眉を八の字に曲げながら一夏に尋ねた。

「ほら、IS学園って元は女子校だろ？だから学食のメニューもさ、女子に適した量になってるんだよ」

「確かにな、この学園の食事は質が良いが量がおざなりだ」

ドイツ連邦共和国代表候補、ラウラ・ボーデヴィツヒが一夏の言葉に同意を示した。

「それでアンタいっつもおかず無くなってもご飯お代わりしてるわけか」

中華人民共和国代表候補、凰鈴音がそれに続く。

「二夏っ！よかったらボクのおかず少し分けてあげよっか？」

フランス共和国代表候補、シャルロット・デュノアが一夏におかずを分けてあげようとする。

「いいののか？」

「ダイエット中なんだ」

「い、一夏！私のもやるぞー！」

一夏の幼馴染の篠ノ之箒がズイツとそのやり取りに割って入る。

「お、織斑くん！私のも…」

話を聞きつけた周囲の生徒達がやがて一夏の周りに集まり、おかずを分けまくる。中にはほぼ大半のおかずをあげる者もいた。一夏は満足気にそれらを全て平らげる。中

「なんか皆ごめんな、俺の為に」

「いいよいいよ！織斑くん6限目になるといつもお腹鳴ってたし」

あれ聴かれてたのかと一夏は少し顔を紅くした。その恥ずかし気な表情に、一夏を囲む少女たちの黄色い歓声が飛ぶ。

「ねえ一夏っデザートも食べる？」

「え、良いののか？」

一夏も食べ盛りの少年だ、当然甘いものも大好きだ。無邪気な表情を浮かべる一夏、微笑ましい光景だ。

「今日のデザートはー…」

「南国バナナのホイップクリーム添えだね」

微笑ましい光景が途端に淫靡なものへと変貌した。

そして現在、一夏はバナナを片手に持った女子たちに囲まれていた。南国産の熟れきった剥き身のバナナは反り上がり、その先端からホイップクリームが垂れ落ちる。

そして一人の女子が、一夏の口にバナナを突き入れた。

「んっ…んんっ」

「どう？織斑くん、美味しい？」

「お、おいひい…」

南国の暑い日差しを受けて育ったバナナは太く、長い。到底一口で食べられるサイズではない。

バナナ本来の甘味とホイップクリームのハーモニーが一夏の口内を蹂躪する。

「は、はむっ……」

堪らず一夏はバナナの3分の1の所でバナナを噛みちぎり、咀嚼する。

「ほら織斑くん、飲んで飲んで、喉に詰まっちゃうよ」

一人の女子が一夏の横から牛乳を差し出すと、一夏はそれを手に取り飲み干した。一夏の喉の動きが、彼女達に自分たちが差し出したバナナが一夏の胃へと送り込まれたことを示していた。

「はあ……は……っ」

口元を抑える一夏、唇の端から零れた牛乳が艶めかしい光を帯びていた。

「……織斑くん、まだまだ沢山あるからね」

「あっ……」

一夏は再度自分の周りを見渡す、女子達の欲望に濡れた眼がギラついた輝きを放っていた。その手には、太く長い、バナナ。

「……これは……!」

千冬が食堂へ突入すると、そこには先程彼女が鎮圧した狂気の宴に似た熱気が満ちて

いた。

その宴の中心地には、我が弟、一夏。

「ち、千冬ねえ……」

その足元にはバナナの皮が大量に落ちていた。

一夏はエロいよ

織斑一夏のフェロモンに当てられた女子達は、千冬の愛の出席簿によって鎮圧された。

食堂で起きた一連の騒動は後に『バナナ事件』と呼ばれ、IS学園の伝説として語り継がれる事となる。

「全く…飯を食うだけで何故あんな事になるんだお前は」

「ごめん千冬姉…」

騒動を鎮圧した千冬は、気絶していた一夏を抱きかかえ、学園の一角にある教員宿舎の自室まで一夏を連れて行き。バナナ塗れになっていた一夏の身体を風呂で清めた。

一夏の身体を洗っている最中、少しムラつと来たのは秘密だ。

「別に謝らなくていい、お前が悪いわけじゃないからな」

「うん、ごめん…」

敬愛する姉に迷惑をかけた事を恥じているのか、意気消沈した面持ちの一夏を、千冬は直視することが出来なかった。

顔を羞恥に染め、伏せ目がちに千冬の顔を伺う一夏の姿は、ある種の色香を漂わせていた。

生徒達が正気を失うのも分かる、分かりたくもなかったが、分かってしまった。

我が弟は、エロい。

「……………ふーっ…」

「千冬姉…?」

千冬は己の中に湧き出た雑念を払う為、目をつぶると、その場で深呼吸を行った。

「……………まあ…なんだ、その、今日はもう早退して、ゆっくり休め」

当然だ、これ以上この歩く猥褻物を、思春期真っ盛りの女子たちの前に出させる訳にはいかない。

我が校の生徒達は、今でこそ色欲に狂ってはいるが、元は真面目で性根の優しい子達ばかりだ。一日だけでも良いから一夏と距離を置けば、正気を取り戻すはず。

「うん…：そうする」

「ああ、ゆっくり休め、生徒達には面会謝絶と言って聞かせるからな」

これで学園の風紀も元に戻るだろう、よくやった千冬！今夜はビールで祝杯を挙げよう、学園の平和は護られたのだ！

「いい天気だなあ……」

そして夜は明け、爽やかな陽射しが校舎を照らす。

朝の職員会議を終えた千冬は、晴れた表情で学園の廊下を歩いていった。

会議が終わった直後に学年主任に呼び止められ、千冬は先に真耶を教室に向かわせた、学年主任の話も一夏の事とは関係の無い別件だった。

ビールを4缶を空け、焼き鳥と柿ピーをつまみに至福の夜を過ごした千冬は。今日も教鞭を振るう為、自身が受け持つクラスである一年一組へと足を運ぶ。

教室へ真耶を先に行かせる際に、真耶が「先にホームルームを済ませておきましょうか？」と尋ねたが、千冬は自分が行くまで待つていて欲しいと頼んでおいた。一夏と他の生徒の様子を見ておきたかったからだ。

「んっ」

教室まで近づくと、何やら雑談の音が廊下まで響いてくる。賑やかでいい事だ。きつと真耶も交えておしゃべりをしているのだろう。

さあ、今日もがんばるかと、千冬は教室のドアに手をかけた、その時だった。

「あー！織斑くんのおっぱい揉みたいなあー！」

我が可愛い教え子たちが待つ教室からおぞましい言葉が響いてきた、もうやだコイツ

ら。

千冬はドアに手をかけたまま硬直する、生徒達はそんな千冬の気配にすら気づかずに己の欲望を垂れ流していく。

「山田先生だつて織斑くんのおっぱい揉みたいでしょ!?!」

「そんな事ありません!」

「山ちゃんもさあ!練習中に織斑くんに向かつて突っ込んで来たじゃん、ぶっちゃけ揉んだでしょあの時!」

「ワザとではありませんし揉んでもいません!」

「揉ませて揉む、高度な技術だなあ…流石は元日本代表候補」

「そんな技術はありません!」

寄りにもよつて真耶とそんな話してるのかよ、何をしてるんだ真耶、御せよ。呑まれるなよ真耶。

「織斑くんはどうなの!?!揉まれてみたくない!?!」

ていうか一夏その場に居るのかよ、本人の目の前でこんな話してんのかよ。コイツらどんな神経してんだ。

「一夏さん、私たちはただ貴方の胸が揉みたいだけなのです、決して不純な感情はありませんわ」

この声はセシリアか、お前はここに何をしに来てるんだ、ISを学ぶ為だろうが。何がただ貴方の胸が揉みたいだ、充分不純だわ。

「一夏！そんな奴に胸を揉ませる必要はない！」

この声は箒だな？よかった、お前はまともだったか。

「お前の胸は私が揉むためにあるのだからな！さあ一夏！脱げ、私が揉んでやる！」

何が揉んでやるだ、何を上から目線で宣言してるんだ。

千冬は勢い良くドアを開けると、大腿で馬鹿共の側まで歩み寄り、その煩惱まみれの頭出席簿を叩き込む。

「一夏！大丈夫か!？」

千冬は愛する弟の安否を確認するため、一夏の席に視線を向ける。

「ち、千冬姉え……」

「ああ……最高……」

一夏は蕩けた表情で力なく椅子にもたれかかっていた、机の上には折り畳まれた制服と、シャツ。

既に一夏は何者かに背後から手を回され、胸を揉まれていた。剥き出しにされ、いやらしい手つきで嬲るように犯される、一夏の胸。

「んんっ……!」

特徴的な、袖余りの制服。そんな制服の着こなしをする者はこのIS学園では一人しか居ない。

「んんー…この汗ばんだ胸！指に吸い付いてくるよー…！」

「ああ、もうやめてくれ、のほほんさん…！」

我が教え子の一人、布仏本音が至福の表情で一夏の胸を揉んでいた。

「布仏ええええつ！！」

布仏本音の頭上に出席簿が振り下ろされるまで、あと2秒。

マスター布仏

前回の一夏胸揉み事件から早ひと月、その間我が弟一夏はおよそ考えつく限りの辱めを受け続けた。

ある時は、まるで挨拶の様な気軽さで尻を揉まれ。

ある時は、教室で授業を受ければ、後ろの席の生徒からうなじに欲望混じりの熱い吐息を吹きかけられ。

ある時は、更衣室で着替える最中に生徒達が更衣室に突入し「手伝ってあげるね」と無理やり着替えを手伝われ：

最早この学園に我が弟が安息出来る場所は存在しないと断言していいだろう、そしてその度に千冬が出席簿で騒動を鎮圧していった。

そして、騒々しい毎日が続いている内に一学期最大のイベントがもう間近に控えていた。

「臨海学校か…」

千冬は教員宿舎の自室で頭を抱えていた。臨海学校とは、一学期に毎年行われる恒例行事であり、生徒達が何時もと違った環境でＩＳの操縦を学ぶという物だか。

どちらかと言えば、毎日の厳しい訓練を受ける生徒達へのご褒美というか、所謂『ガス抜き』のようなイベントである。

それを裏付けるように、開催される場所は海辺の旅館であり、初日は自由行動となっている。丸一日生徒達が砂浜で遊ぶのが毎年恒例なのだ。

しかし今年は例年とはひと味違う。そう、我が弟、IS学園のセックスシンボルこと、世界唯一の男性IS操縦者『織斑一夏』が居るのだ。

視聴覚室において臨海学校での一夏への対策、いや。正確には、生徒達の一夏に対するセクハラ行為への対策を決める緊急会議が開かれたのは、つい2時間前のことだ。

結局、会議は結論を見出すことが出来ぬままに解散となり、千冬は項垂れながら自室へと戻った次第だ。

「結局、時間だけが過ぎただけか……」

シャワーを浴びた千冬はジャージへと着替え、壁に立て掛けてあった木刀を右手に取る。と玄関へと向かい、玄関の側にある戸棚に置いてあった懐中電灯を左手に取って自室を後にした。

「やれやれ、休む暇もないか」

千冬は学生寮へと向かっていた。消灯時間を超えた学生寮の見回りをする為だ。この見回りは教員たちが当番制で行っており、今週は千冬の番であった。

さて、消灯時間を超えた寮内において、生徒達が皆バカ正直に寝静まるかと言えば、そんな訳がない。

一部の生徒達は皆集まっておしゃべりをしたり、ゲームをしたりと、この学園寮は昼間とは違った意味で密かに賑わうのだ。

その賑わいの中において一際、異様な熱気を放つ集団が居た。その集団は寮内にある一夏の部屋の前を占拠し、皆一様に、欲望で目がギラついていた。

「えー…これより、第一回『織斑くんの寝顔写真撮影会』を始めたいと思います…」

ひそひそと狂った内容を話す女子達、勿論この大会は一夏には無許可だ。初夏の熱気は少女達から正気を失わせていた。

「や、やっぱり…これは、良くないんじゃないだろうか」

その集団の中において、一人だけ異を唱える者がいた。我らが原作メインヒロイン、篠ノ之箒その人だった。

ただ一人だけ、群集心理に流されること無く自我を保っていた我らが箒。しかし…

「おいおい何言ってるんだよデカパイ侍ちゃんよお」

「で、デカパ…!?!」

「そっすだよデカパイ侍、何ここまで来ておいてカマトトぶってるんだよお」

何とも不名誉なアダ名を付けられた箒は憤慨するも、その口を他の生徒に両手で塞がれる。

「む(っ)む(っ)…」

「騒ぐなよデカパイ侍…織斑くんが起きちまうじゃねーか」

「そうだそうだデカパイ」

「そうですね H u g e b r e a s t s S A M U R A I」

やたら良い発音でセシリアに窘められる箒、こいつも随分とクラスに馴染んだなあと思ふ。箒は口を塞がれながら思う。

「みんな静かにね、織斑くんが起きちやう」

「ゆつつつくりと歩くわよ」

「あのさ、それなんだけど…」

二組の凰鈴音が疑問を投げかけた。

「…誰が一夏の部屋の扉を開けるの…?」

そう言えばそうだと一同がザワつく、そうだ、一体誰が開けるのだ。

「大丈夫ー」

「アンタは…」

鈴の背後から声がする、鈴は振り向くと、そこには一組の本音が居た。本音の手に握

られた鍵が、薄暗い廊下の中で鈍く光沢を放っていた。

「コレはねー…生徒会執行部所属の生徒にだけ用意されたこの寮のマスターキーなんだー」

そんな物があつたのかと一同は再びザワつき始めるも、本音がそれを静止する。

「これ一つで学生寮の全部屋の鍵が開けられる便利なアイテムなのさー」

「おお…」

鈴を含めたその場に居る生徒全員が本音に対し、畏敬にも似た感情を寄せる、鈴はその場で膝をつくところへを垂れた。

「主（マスター）、アンタに一生着いてくわ…」

「主（マスター） 本音…」

「主（マスター）…」

それに続き他の生徒たちもその場で本音に跪き、本音への忠誠を誓う。

「もがもが…（なんなのだからこれは…）」

その場で跪く事がなかったのは箒と、箒の口を未だに塞いでいる生徒のただ二人だけだった。

「いいー?じゃあ開けるよー」

本音が振り返ると、箒以外の全員が一斉に頭を縦に降った。それを合図に本音は一夏の扉の鍵穴にマスターキーを差し込む、そしてそれを捻ると金属の乾いた音が響いた。

「ゆっくりね…」

本音を先頭に列を作り、集団は一夏の部屋へと歩みを進める。箒は自身の内に滾る欲望に打ち勝つことが出来なかつたようで、列の最後尾に申し訳なさげに着いて来た。

やがて集団は一分も経たずに寝室へと到着した。

「Oh My God…!!」

セシリアの眩きが部屋に響く。そこには桃源郷が広がっていた…

一夏はベッドの上にパンツ一丁の姿で寝ていたのだ。

「ヤバイよこれ…エロ過ぎるよ…!!」

突如少女達を襲う、想定を遙かに超えた暴力的な程の色香。既に何名かの生徒はそれに耐えきれず、鼻血を吹いて失神していた。

「主（マスター）！一体どうすれば…!」

「Master…!!」

取り乱す英中代表候補二人、その顔には普段の彼女たちに満ちる自信という物が失われていた。しかし、マスター本音は狼狽えることなく二人を諭す。

「二人とも落ち着いて、良い？二人ともココに何をしに来たの？」

「それは…」

「I C H I C A — S A N の S l e e p i n g f a c e を P h o t o g r a p h i n g する為ですわ…」

「そうだよ、初心を忘れないで」

マスター本音の言葉に導かれ、馬鹿二人は正気を取り戻した。まあこの場にいる時点で既に正気ではないのだが。

本音は改めて未だに何も気づかず寝息を立てている半裸の一夏をまじまじと眺める。

(いやぁー…こうやって見ると…)

ほぼ裸同然の姿で眠る一夏、寝汗をかき、悩ましがな表情でベッドに横たわる一夏の姿は、見る者の性的欲求を刺激した。

(ほんつとにエロいなぁ…)

馬鹿二人を諭した手前、自分まで醜態を晒す訳にはいかないと本音は首を横に振り。平静を装った。

「ま、主(マスター)…そろそろ…」

「あー、うん…：そうだね」

もうこの場において、滾る欲望を抑えられる程の自制心を持った者は居なかった。本音が撮影会開始の合図をしようとした、その時だった。

「お前ら何をしている…？」

皆一斉に、自分たちが入ってきた玄関の方に視線をやった。鬼が、木刀を片手に仁王立ちしていた。

「楽しそうだなあお前達…：何をしていた…？」

その場にいる全ての者が、千冬と目を合わそうとしない。怒り狂う鬼の怒りを買わぬようにしているのだ、皆。求めていた、自分たちの代弁者を。生贄を、求めていた。

「…主（マスター）」

本音は肩をビクつかせた、本音は悟った。今、自分は売られたと。

「まあすうたあ…？」

メキメキと木材が軋む音が部屋に響いた、千冬の手握る木刀から発せられた音だった。皆戦々恐々とその音を聴く。そして未だに起きることなく横たわる一夏。

「マスター…：それがこの馬鹿騒ぎの主犯か、誰だ？」

千冬は「誰だ」と言いつつも、その双眸は本音を凝視していた。千冬は既に、本音に照準を定めていた。

滝のような汗を流す本音、本音は、周りを見渡した。探していた。生贄を。

「ま、マスター!」

「な!?!」

本音はセシリアに飛びついた、本音は売ったのだ。自らをMasterと慕う馬鹿を。

「ま、Master何を?」

「お前かオルコット…!」

幽鬼の如くセシリアへと歩み寄る千冬、敬愛するmasterの裏切りに動揺するセシリア。しかしそこは英国代表候補、生来の頭の回転の速さは、セシリアにこの場を切り抜ける最適解を弾き出した。

「Master!!」

「なあ!?!」

セシリアは自分のすぐ隣で縮こまっていた鈴に抱きついた。鈴は堪らずセシリアを引き剥がそうとする。

「ちよつと!!離しなさいよ!!」

「Masterそんな殺生な!!」

「何がマスターよ! やたらいい発音すんな!!」

「master! Help me!!!」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ出す生徒達、皆主犯格になりたくない一心で主（マスター）の名を擦り付け合う馬鹿たち。

見るに堪えない醜い争いを終結させるべく、千冬の木刀が薄暗い部屋の中で唸りを上げた。

「いい加減にしろ馬鹿どもお!」

千冬の木刀は結局その場に居た一夏を除く全員に振るわれた。そして一夏は最後まで目を覚ますことはなかった。

「ほらキリキリ歩け馬鹿共」

生徒達を部屋から蹴り出す千冬、これから寮のエントランスで朝まで説教だ。頭にデカイタンコブを作った生徒達はみな死刑執行を待つ囚人のような表情だ。

「しかしコイツとうとう起きなかつたな…」

我が弟は遂に起きることなく今も寝息を立てている、これ以上弟の眠りを妨げるのも何だなど思った千冬は、静かに部屋のドアを閉めた。

一夏の部屋には再び静寂が訪れた。

「ふう……」

一夏の眠るベッドの裏から、磁器のような白い腕が伸びた。その腕はゆっくりと床を這い、その腕の主は未だ寝静まる一夏を起さぬように、物音を立てぬよう。細心の注意を払いながら上体を起こしていく。

「いきなり大勢の足音が聞こえた時は驚いて思わず隠れたが……」

ドイツ代表候補、ラウラ・ボーデヴィツヒは息を殺して一夏の眠るベッドの裏に隠れていた。所謂『夜這い』をする為だ。

常日頃から一夏を「嫁」と呼び、一夏を愛している事を公言している彼女は、「嫁」と契りを結ぶ為、こうしてピッキングを用いて一夏の部屋に侵入した次第だ。

「ヤツらには感謝をしなければな」

ラウラは先程の騒ぎをその顛末までしつかりと目に焼き付けていた。そしてその騒ぎを終結させた者の姿まで……

「教官は朝まで説教だと言っていたな……」

ラウラはその場でゆるりと衣服を脱ぐ、衣擦れの音が部屋に響く。一夏は未だ、起きる気配がない。

「嫁……」

遂に右目を覆う眼帯以外、一糸纏わぬ姿となったラウラ、その顔は劣情に染まっていた。

「もう邪魔者はいないぞ……」

ゆつくりと歩を進めるラウラ、その先には極上の、男の裸体。

一夏の部屋のカーテンに写る、二つの影、それはゆつくりと一つに重なった。

夜はまだ、長い。

インフィニット・マタニティー（前編）

主（マスター）布仏を首魁とする馬鹿共の説教を終え、自室へと帰る千冬。朝まで続いた説教は千冬の睡眠時間を削った。部屋の時計に目をやると、朝の職員会議まであと2時間程だった。

程だった。

一応1時間ほど仮眠を取り、シャワーを浴び直し。仕事の準備に取り掛かる千冬。そんな慌ただしい朝、インターホンの音が部屋に響いた。

誰だ、こんな朝早くからと。千冬は身なりを整えながら玄関まで進むと、ドアの覗き穴から早朝の来客の姿を確認する。見知った顔がそこにはあった。

「ラウラ、どうした？」

「すみません教官……実は、折り入ってお話があるのでです」

ラウラ・ポーデヴィツヒ、ドイツ代表候補生であり、千冬が受け持つクラスの生徒で、少々特殊な出自の少女だった。

かつて千冬は彼女に指導を行った経験があり、その頃の名残で彼女は今でも千冬を

『教官』と呼ぶ。

神妙な面持ちのラウラ。千冬は、これは深刻な自体かも知れんと気を引き締め、ラウラの相談に乗る。

「なんだ？言ってみろ」

「はい、話とは…嫁、織斑一夏の事なのです」

一夏…またか、相変わらずアイツはトラブルの元だな。千冬はため息をこぼすも、愛しい教え子の相談だ、聴いてやるとする。しかし時間も押している。

「ラウラ、すまんが私も時間がなくなてな、昼休みに改めて私の元に来てくれないか？」

「はいっ！」

敬礼しながら「それではまた後で！」と元気な返事をするラウラ、元気で何よりだ。

足早にその場を後にするラウラ、千冬はまたアイツ絡みの仕事の一つ増えたなとため息をついた。

「しかし…」

支度をしながら千冬は先程別れたラウラの様子を思い出す。

「アイツやけに肌艶が良かったな…」

若さとは良いものだなあと呑気な事を考える千冬、しかし千冬はまだ知らない。あの銀髪眼帯口りっ子が、千冬の教師人生において、あのマスター布仏を超える最悪の問題

児である事を、千冬はまだ知らない。

「もーみんな酷いよー！」

我らがマスター本音は朝の騒がしい教室の中で不満の声を挙げる。袖余りの腕をブンブン振って全身で怒りを再現する本音、可愛らしい姿だがやった事は性犯罪者のそれだ。

「ごめんごめんマスター」

「sorry master」

「もーマスターやめるー！」

騒々しくも楽しい朝、黄色い歓声を背に我らが主人公、織斑一夏が教室へと入って来た。

「おはようみんな」

「あ、おはよう…」

顔を朱に染めながら、慎ましく挨拶を返すクラスメイト達。その様子を不思議がる一夏、無理もない。

真夜中、パンツ一丁の魅惑的な裸体を晒し、生徒達にまた一つ消えない妄想の種を生

み出してくれた我らがIS学園のセックスシンボル一夏。

皆恥ずかしいのだ、このパリッとしたカッコいい制服の下に、あんないやらしいカラダがあると思うと。

既にクラスメイトの何人かは、あの一夏の裸体を思い出し鼻血を垂らしている。

「お、おい大丈夫か!？」

「だ、大丈夫……」

そんな様子の同級生を心配して駆け寄る一夏、鼻血の元凶が自分であるとは露程も思わない一夏。間近に迫る一夏の顔、整った容姿は思春期真っ盛りの少女を魅了するには十分過ぎた。

再び噴き出す鼻血、放物線を描き一夏の顔面に向かって放射された。

「うわっ!？」

それを寸での所で回避する一夏、「惜しい!」と誰かが呟いた。

「あー……織斑くん、私らが保健室まで連れてくから……」

「あ、ああ……任せた」

肩を抱えられながら教室を出ていく鼻血少女、その顔は血濡れながら何処か幸せそうだった。

鼻血少女と入れ替わりで教室に2人組の生徒が入って来た、ラウラ・ボーデヴィツヒ

とシャルロット・デュノアだった。

「おはよう、嫁」

「おはよ、一夏」

「おお、二人共おはよう」

ラウラは挨拶を済ませると一夏の元へと歩み寄り、一夏の背後に回ると、突如一夏の下腹部をさすり出した。

「うおっ!？」

「ちよっ…何してるのラウラ!」

突然の事に身動き出来ない一夏と、ラウラの奇行を咎めるシャルロット、そして固まるクラスメイト達。周囲の事などお構い無しにラウラは一夏のお腹をさすり続ける。

「嫁、朝は何を食べた？栄養はしっかりと取るんだぞ、もう自分だけの身体ではないのだから」

一夏のお腹をさすりながら一夏の体調を気遣い始めるラウラ、その顔はまるで慈母の様だ。

ん…？『もう自分だけの身体ではない』…？

「ちよつと待てラウラ！今の言葉はどういう意味だ!？」

騒然とするクラスメイトの中でいち早く冷静さを取り戻した箒は、先程の言葉の意味をラウラに問いたです。ラウラは周囲を見渡すと、一夏の手を取り教壇へと登った。

「本来ならば教官への報告が先だと考えていたが、同じクラスのよしみだ、お前達には報告せねばな！」

腕を組み、胸を張り、教壇で仁王立ちになるラウラと、その横で何事かとラウラを不安そうな目で見る一夏。

「皆の者！よく聞け!!」

ラウラは、まるで勝鬨のような大声で宣言する。

「我が嫁は！私の子を身籠っている!!」

IS学園1年1組の時間はその時停止した、誰も身動きが取れない。壁に掛けてある時計の針を刻む音だけが、無音と化した教室内で虚しく響いた。

室内に居るラウラ以外の全ての人間の顔から感情というものが失われていた、ラウラ

の宣言は一夏と彼女達のキャパシティーを遥かに超えていた。

勝ち誇った表情を浮かべるラウラ、その手は未だ一夏の下腹部をさすっている。

「…は」

彼女達の脳は処理不可能の感情をダムのようにせき止めていた、しかしものには限度というものがある。老朽化したダムにやがてヒビが入る様に、停止した感情は遂に脳の防衛本能という名のダムを飲み込んだ。

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
!!!!?!????」

決壊するダム、波乱の1日が始まった。

インフイニツト・マタニテイー（後編）

阿鼻叫喚。そう呼ぶに相応しい混乱が一年一組を包み込んだ。織斑千冬という統治者不在のこの教室の混乱を止められるものは誰もおらず、生徒達は混乱という名の濁流にただ吞まれるだけであつた。

織斑一夏、懐妊。

文字に起こすだけでも正気を疑うこの暴挙。教壇にて勝ち誇るかのような笑みを浮かべるラウラは、隣で呆然と立ちすくむ一夏に視線をやる。

「嫁」

一夏は、ラウラの呼びかけに反応しなかつた、いや、この場合は出来なかつたという表現が正しいだろう。

妊娠…？俺が、妊娠…？

未だ一夏の脳内は混乱の極みにあり、自身の妊娠という理解不能な事情を必死に理解しようと外界からのあらゆる接触をシャットダウンしている状態だつた。

一夏の思考は彼岸まで飛翔していた。

恒河沙まで向かったそれは

阿僧祇を突き抜け

那由多の彼方へと飛び

不可思議の先を超え

無量大数に至った辺りでブーメランの如く戻つて来た。

「あ……」

思考をようやく現実へと引き戻す事に成功した一夏、先程のラウラの言葉への反応をここでようやく示した。

「どうした嫁、言葉が出ない程嬉しいのか！」

私も嬉しいぞと無邪気に喜びを全身で表現するラウラ、一夏は無言で、そんな様子のラウラの頭頂部に手を添えた、ラウラは何事かと思いつながらこれを受け入れた。そして

：

「アホかあああああああッ

!!!!!!!

」

手をグーに変え思いつき振り下ろす一夏、ラウラは突然の一夏の攻撃に対処することが出来ず、その場で失神する。

倒れ伏すラウラ、一夏の叫びに冷静さ取り戻したクラスメイト達。

「…」

平常よりやや遅れて教室へと到着した千冬と真耶。二人は事態をうまく飲み込めず教室のドアで立ち尽くしていた。

自身の妊娠を知らされた一夏が示した反応は、喜びでも、悲しみでもなく、拒絶だった。

そりやそうだ。

「そ、それで…？ラウラが？お前が妊娠したと…？」

騒ぎの顛末を千冬に説明する一夏とクラスメイトたち。千冬は肩を震わせ笑い堪え

ていた、もう限界そうだ。既に千冬の隣で真耶はしゃがみこんで声を必死に押し殺して笑っている。

「性教育は…軍がすでに、施していると、思っていたのだが…」

千冬は息も絶え絶えになりながらも、考えを纏めていく。

「つまり、ラウラは…子供がどうやったら出来るかというのを全く知らなかったというわけか」

元から世間知らずなどころがあるとは思っていたが、まさかこれ程とはと、生徒達は未だ突つ伏して意識が戻らないラウラを見下ろしながら考えた。

「ねえ、みんな」

誰かが呟く、その声は大きくはないが不思議と教室全体に響く、通る声だった。

「折角の機会だからさ、ボーデヴィツヒさんに教えてあげようよ」

「うん」

「性教育」

一夏除いたクラスメイトたち全員が、皆一同に頷く。半ば使命感のような意思が、生徒達全員に伝わっていく。

教えてやろうではないか、性の穢れを知らずに育つたこの清らかな娘に、性の神秘を。教えてやろうではないか、戦う術しか知らぬこの哀れな娘に、性の素晴らしさを。

「織斑くん」

「ん、どうした？」

「私たちね、これからボーデヴィツヒさんに教えてあげなきゃいけない事があるの、だから少しの間だけ、教室から離れてもらいたいの」

「お、おう……？」

クラスメイトたちの何処か熱の籠った視線を一身に浴びる一夏、言いようのない圧力に押され、一夏は教室を去る。

一方千冬と真耶は……

「素晴らしい友情ですねっ」

「そうだな」

クラスメイトの絆に感動する真耶と、冷めた目で目の前の茶番を見る千冬。千冬は寝不足だった、馬鹿共への説教で睡眠時間は削られ、精神は摩耗していた。

「よし、お前達、この件に関してはお前達にまかせろぞ」

千冬はこの場から逃げる事を決めたのだ、トラブルの解決を生徒へ丸投げすることにより、精神の安定を図ったのだ。

無論これが平常の千冬ならばこんな事はしない。しかし、千冬もまた一人の血の通った人間だ。限界はすぐそこまで来ていた。

「よーし真耶！行くぞー！」

「え？あ、はい……」

真耶の手を引きながら教室を去る千冬。その目に光はない、織斑千冬、無敵の戦乙女、無敗の女が初めて背を向け後退した瞬間だった。

「O Gott!!! O Gott!!! O Gott!!!」

クラスメイトに机の上へと拘束され転がされたラウラは今、生涯で初めてアダルトビデオという物を見せられていた。

「Warum Gott!!!」

ラウラを取り囲むスマホの液晶画面、そこにはハードなプレイを交わす男女。ラウラは髪を振り乱し半狂乱になるラウラ、身体を拘束され目をつぶる事さえ許されず、スマホの液晶画面を見ることを強制されるラウラ。

「オラオラどうしたラウラちゃんよお」

「見ろやコラア！これが現実だ!!」

「Es ist eine L・gее:Es ist eine L・gее……!!!」

クラスメイトがラウラに対して行う“教育”はまさにスパルタだった。かつてドイ

一夏は教室を去った後、屋上で風景を眺めながら時間を潰していた。本日は快晴だった、初夏の爽やかな日差しがIS学園の校舎を照らす。

「織斑、ここに居たか」

「あれ？千冬姉」

一夏の後を追い、屋上までやって来た千冬と真耶。雲一つない青空が二人を出迎えた。

「ラウラはどうなったんだ？」

「ラウラは…アイツらに任せた」

「そっか…」

「風が気持ちいいですねー」

涼しい風が三人の頬を優しく撫でた、穏やかな天気は教室内に広がる地獄のことを暫し忘れさせた。

「しかしラウラもとんでもない事言うよなあ」

「ああ…でもアイツなら大丈夫さ、今頃きつちりと教えてもらっているだろうからな」

「ラウラも困ったヤツだよなあ俺が赤ちゃんなんて産める訳がないのに」

「赤ちゃんはコウノトリが運んで来るんだろ？千冬姉」

千冬の頭痛の種が、また一つ増えた瞬間だった。

虹色少年と危ない水着

「おいおい」

「…」

ラウラ性教育騒動から一夜明け、ここは学生寮の中にある

ラウラとシャルロットが暮らす部屋。シャルロットは途方に暮れた様子でベッドの上に転がるラウラを見ていた。

クラスメイトによって施された性の荒療治はラウラの精神を跡形もなく粉碎し、幼児退行を起こすまでに至っていた。

ドイツ代表就任確実とまで言われたエリート之余りに無残な姿にため息をつくシャルロット。ベッドの上を占拠したラウラは手足をばたつかせ、今も無邪気に笑っている。

「おいおいおい」

「一体どうすれば…」

同級生からラウラと同室というだけで半ば押し付けられる形でラウラの世話を任されたシャルロットは困り果てていた。そんな矢先の事だった。

「んん…まーま…」

「ま、マママ!」

ラウラは身体を翻すとシャルロットの元まで四つん這いになって近寄ってきたのだ、所謂『はいはい』というやつだ。幼児退行したラウラは理性の奥底に眠る本能の赴くまま、自分を庇護してくれる存在を、母親を求めていた。

戸惑うシャルロット、ラウラは甘えるような目付きでシャルロットに抱きついてきた。

「まんま…」

「ちよ、ちよつと…」

顔をシャルロットの発育の良い胸に沈めるラウラ、その姿にかつての勇猛果敢なドイツの代表候補生の面影はない。そこにあるのは、母親を求める赤子の姿だけだった。

「まま、まま…」

「…」

シャルロットは困ったような、それでいて満更でもないような表情でラウラを受け入れた。

胸元のラウラの頭を抱くシャルロット、その姿はまるで美術館に展示されている宗教画に描かれる聖母の様だ。

「まーま……」

「うん、よしよし……」

「ばいばい……」

「!?」

ば……!?ばいばい!?おっばい?!

驚いたシャルロットは思わずラウラを引き剥がす、ラウラは拒絶されたと思ったのか、今にも泣きそうな顔をしていた。

「ま、まま……」

シャルロットは思案した、この哀れな鉄の赤子は私がこの場で見捨ててしまえば、きつともう、元に戻ることはないだろう。

破壊された精神を再び構築するには、癒しが必要だ。

シャルロットの脳裏にチラつくのは、誇り高くもどこか愛らしい、嘗てのラウラ・ボーデヴィツヒの、笑顔。

「…ラウラ」

「まんま……」

「おいで」

胸元のリボンを緩め制服のボタンをゆつくりと外すシャルロット、その顔にもはや迷

いはない。形の良い、それでいて豊かなシャルロットの胸が、ラウラの前に露わとなつた。

「ボクが…ママだよ…」

「え、水着？」

その日の朝も、何時ものように教室へと足を踏み入れた一夏を待っていたのは。クラスメイト達からの熱烈な遊び（デート）の誘いだった。

曰く、臨海学校で着ていく水着を選んで欲しい。

曰く、織斑くんの水着を選びたい。

恐らく後者が彼女らの本気だろう。だが一夏は気にせずにクラスメイト達の誘いを受け入れた。

それが新たななる悲劇の幕開けとも知らずに…

「ここがレゾナンスかー…」

そして週末、クラスメイト達に指定された待ち合わせ場所にたどり着いた一夏、I S 学園からほど近い場所に位置する超大型ショッピングモール『レゾナンス』はここで買えない物は存在しないとまで言われる程の品揃えを誇る。

「一夏ー!」

「織斑くーん!」

「H A H A H A ! Z e c a m e I , e t a l . B i t c h B o y ! !」

既に箒やセシリア、その他クラスメイトが一夏より先に来ていた。ラウラとシャルロットは別件で来ることは出来なかったようだ。

一夏は無邪気に手を振って彼女たちが待つ場所へと駆けて行く。

「ごめんごめん遅れちゃった」

「いや、私たちも今来た所だ」

「T o d a y i s a l s o c u t e W h y I w a n t t o e a t a

B i t c h B o y ! !」

「もーセシリアいい加減にしてよー」

箒を筆頭とした彼女たちと合流した一夏、爽やかな笑顔がその場にいる者達を、そし

て遠目から彼女たちを見ていた他の客をも魅了していく。天性の魅力は学校外でも健在だった。

そして度重なる一夏のフェロモン攻撃を受け続け、遂に日本語能力を喪失してしまつたセシリア、彼女が最後に日本語を話したのは何時だったのだろうか。

この場に英語を解する者が居ないのをいいことに、品性の欠片も見当たらない程の薄汚い下卑たスラングを口にしていた。

一夏は彼女たちに手を引かれるまま、水着売り場へと向かつていった。

広い店内を歩くこと約20分、水着売り場へとたどり着いた一夏。店内でも奥まったエリアにその店は位置していた。

「い、これは…」

そしてそこで彼が見たものは、虹色の看板が目印の、良く言えば個性的、悪く言えば、悪趣味な店だった。

『RAINBOW BOY』

それがその店の名前だった。

異様な店構えに圧倒されている一夏をよそに問答無用で彼の手を引き店の中に入つて行くクラスメイトたち。

一夏の第六感が危険信号を鳴らしていた。ここに入つてはいけなないと、とんでもない事になるぞと。

「ちよ……ちよつと俺、ココ、やだ……!」

抵抗する一夏だが、彼女たちは女子とは思えない程の力で一夏を店の中へと引つ張りこんでいく。

彼女たちの目は獣欲に染まっていた、蟻地獄へ堕ちた働きアリの様に、一夏は店の中へと入つていつてしまった。

「……」

店構えの異様さに違わぬ店内の様相に一夏は圧倒されていた。確かにこの店は水着を売つてはいるようだ、品揃えは随分と偏っているようだが。

店に置いてある水着は全て男性用だった、問題はその水着のデザインだ。店に飾られているマネキンに着させられてる水着は全て極彩色が目には痛いローレグの物で、後ろをよく見てみると、そのマネキンの尻はほとんど隠れてはいなかった。

まるでラブホテルのような照明とサイケデリックなBGMのコーボレーションがそれらを照らし、妖しく彩る。

とにかく目が痛くなる光景だった。既にクラスメイトたちは店内に散り、売り物を物

色している。

「これなんかどう？」

「ブルーメランパンツしか置いてなくない？」

「それが良いんじゃない！」

聴いていて頭が痛くなる会話だ、一夏は何とかここから逃げようとするも。一夏の背後には箒がびったりと張り付き、逃げ道を塞いでいた。

「一夏どうした？折角みんながお前の水着を選んでくれているんだぞ」

「ほ、箒…たすけ…」

「一夏、お前にはコレが似合うと思うぞ？」

箒の手には店の商品が握られていた、パッケージには日の丸が描かれている。

「日本男児には褌が一番だろう」

黒々と濁った目で力説する箒、熱を帯びた視線にも関わらず目だけがまるで光を遮断したような純黒なのが店の照明と相まって怖かった。

「織斑くーん！試着してみようよ！」

What? 試着? 今、試着と言ったのかコイツら? 俺に? あの変態丸出しの水着を着ろと?!

一夏の防衛本能が、警鐘を鳴らしていた、逃げろ一夏。お前の身を守れるのはお前だけだ、この空間において正気なのはもはやお前しかない。

一夏は脱兎の如くその場から逃走した。

「あ、待て!!」

「織斑くん!」

「待って織斑くん!」

「ヒョウ柄もあるからー!!」

追う女子達。無論手には、ブーメラパンツ。

太陽の下の暴徒たち

IS学園1年生達を乗せたバスは臨海学校の開催場所である旅館へと向かっていた。
「海だー！ー！！！」

バスの窓から見えた大海原に興奮し叫ぶ生徒達、遂に始まってしまった臨海学校は、一夏へのセクハラ対策の具体案を組むことが出来ぬまま、開始されてしまった。

「夏だー！ー！」

「海だー！ー！」

「織斑だー！ー！！！」

謎のスローガンを掲げ、盛り上がっていくバス内の生徒達、熱気のボルテージは天井知らずだ。

「オイお前達静かにしろー！」

千冬の叱責も最早今日で何度目かも分からない、千冬はそう長くはない教員生活の中でも、今年の臨海学校に参加する生徒達のテンションの盛り上がりっぷりは過去最大のものだと実感していた。

まだ現地に到着してすらいなのに、まるで祭りのような浮かれっぷりだ。

そう、祭りだ。この熱気はまさに祭り。

織斑一夏を神輿とした大祭。制する声さえ賑やかしの一部として取り込む大きな濁流だ。

「ICHICA!・ICHICA!」

「一夏!一夏!」

「うおおおお!うおおおお!一夏!!一夏!!」

「WHOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」

クラスメイトの異様なテンションにドン引きする一夏、コレでまだ臨海学校が始まってもないのだから驚きだ。

みんな見たいのだ、一夏の水着姿を、一夏の裸体を。目に焼き付けたいのだ。

一夏はバスの中を見渡した、正気を保っている者を探した。ふと一夏は、自分の隣の席に視線をやった。

座っていたのはシャルロットとなぜかその膝に腰掛けるラウラのコンビだった、二人の間にはバス内の喧騒から隔離されたような静かな雰囲気漂っている。

「ほらラウラ、海がみえたよー」

「ぷぷー」

おしゃぶりを啜えたラウラが、まるで赤ちゃんのように無邪気に笑う。それを見て

シャルロットはラウラの頭を撫で、目を細めた。その姿はまるで本当の母親のようだ。

「ふふっ……ラウラったら」

「ばばー」

「…」

一夏はその二人組から視線を逸らした、見てはいけない物を見たような気がした。なんとさえ言えば良いのか、直視出来なかつた。

それと同時に一夏は悟った、この空間内に最早ともな人間は居ないということ。未だバスは目的地には着かない、このまま永遠と着かないで欲しいなと一夏は願った。

「着いたア!!」

「ヒヤツハアアアアア!!」

「祭りの始まりだアアアアアアア!!」

「I. M. F! I. M. F! I. M. F! (一夏水着フェスティバルの略)」

一夏の願いも虚しく、バスはどうとう目的地である旅館に到着してしまった。生徒達を出迎えに来た旅館の女将と女中達は引き攣った笑顔で暴徒化した生徒を迎える、大人の対応だ。

挨拶もそこそこに、生徒達はそれぞれ割り当てられた部屋へと入っていく。一夏は千冬と同じ部屋でこの臨海学校を過ごすことが事前に決まっていた。

IS学園の優秀な教師にして、学園の切り札、絶対的エース、初代戦乙女（ブリュンヒルデ）織斑千冬。

耳触りのいい単語を並べてはみたが要は面倒事を押し付けられた形だ。

「出発前にも話したと思うが…この三日間、お前は私の部屋で過ごすことになる」

「…ありがとう千冬姉」

一夏は内心ほつとしていた、千冬という百人力のセキュリティがこの三日間そばに居てくれると言うだけでもありがたい。

「このお礼はいつか必ずさせてくれ…千冬姉…」

感謝と感激、そして気恥ずかしさが入り交じり、顔を赤く染める一夏。やめろ一夏、頬を染めるな、惚れるだろ。

「さあ海に行つてこい、私も後で合流する、水着は用意したんだろう？」

「う、うん…制服の下に着てきてあるから…」

「そうか」

「制服…脱ぐからさ…」

もじもじと落ち着かない様子の一夏、千冬に裸を見られたくないようだった。弟の差

恥心に内心“そそった”が、千冬は表情に出さずに、そのまま適当に仕事が残っていると言いつてして部屋を後にした。

「いかなな…私まで正気を失うわけには…」

旅館の廊下を歩きながら、千冬は己を自制する。そもそも異常なのだ、実の弟に欲情するなどと。

「これ、やっぱり恥ずかしいな…」

一夏の着てきた水着は例の店『RAINBOW B♂Y』で買った水着だった、逃走を測った一夏はあの後女子達に拉致され、結局店まで連れ戻された後、水着を選ばされたのだ。

「織斑くんにはこつちも良いと思うけどねえ…」

「やっぱり禪だろう…一夏あ…?」

「どれが良いのお…?織斑くん…」

クラスメイトに囲まれ、欲情混じりのねつとりとした視線を浴びながら自分の水着を選ぶというのは一夏の生涯でも経験したことのない恐怖だった。

「結局自分で選んだけど…恥ずかしいな…」

制服を脱いだ一夏は私服のパーカーをファスナーをきつちり上まで上げてから海へと向かった。

「I. M. F!! I. M. F!! I. M. F!!」

「遂に見られるのね……織斑くんの水着姿が……!」

「一夏あ……何時まで待たせるのだ……!!」

「織斑くん早く来てえ……!」

既に生徒達は砂浜へと集結して、一夏を待ち構えていた。ある者は一夏の顔を描いた旗を掲げ『Raise your flag』を歌っている、またある者は『RAGE OF DUST』を歌っている。

皆一様に興奮していた、声の限り叫んできつといつか何処か勝ち取りたいモノだけは人一倍な欲深い馬鹿になっていた。

「一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!」

馬鹿たちの熱烈な一夏コールは海まで近づいて来た一夏の耳にも届いていた。

「それで君はー良いんだよー……」

生徒達が歌う歌の歌詞のワンフレーズを口ずさみながら海へとやって来てしまった

一夏。

帰りたいたい、このまま旅館に引き返そうかなと思う一夏。しかし仮に自分が砂浜へ現れなかつたらどうなってしまうのだろうか。

きつと暴徒化した馬鹿達は一夏を探し、暴れ回り、周囲へ被害を出してしまうだろう。「行くしかないのか…」

最悪の自分を想定してしまい身震いをする一夏、そんな一夏の姿を、馬鹿の一人が発見してしまった。

「あー織斑くん来た!!」

馬鹿はまるで新大陸を発見したコロンプスのように興奮して馬鹿たちに触れ回る。

「一夏ー!遅いぞー!!」

「織斑くん!!」

「おっぴつむらっ!!おっぴつむらっ!!」

もう行くしかない、覚悟を決めた一夏は、砂浜へと降り立つ。

その姿はまるで死地へと赴く兵士のようなだった。

肌と、汗と

「やつと来たか一夏あ……！」

一夏は遂に海へとやって来てしまった、ビーチは既に劣情に満たされていた。頭の中真っピンクの生徒達は、下卑た視線を容赦なく一夏へと浴びかかる。

一夏の素肌の上に着たパーカーの中は暑さと緊張で汗に濡れ、パーカーの生地が一夏の柔肌を刺激した。紅潮する一夏の表情が生徒達の欲情を更に煽る。

「織斑くうんどうしたのお……？顔真っ赤だよお……う？」

「暑いならそのパーカー脱いだらあ………？」

「恥ずかしいのお？織斑くうん」

やたら粘着質な視線が一夏の身に絡みつく、まるで視線だけで犯しているようだ。

もし彼女たちに男性器が備わっていたなら、今頃一夏の服を無理矢理剥ぎ取りマワしているだろう。そうさせるだけの色香が今の一夏にはあった。

「さあ一夏！脱げ！！男なら全てをさらけ出せ！！」

声高らかに叫ぶ筈、背筋を伸ばし、凜とした声で一夏に呼びかけるその姿は見るものに一種のカリスマ性さえ感じさせた。目が情欲で黒々としていなければの話だが。

「全てを見せろ一夏!!胸、乳首!尻、ち……………局部!!全てをさらけ出せ!!安心しろ一夏、ここには私たちだけしか居ない!だから全てを見せろ!!」

何が安心出来るのか。

「あの…脱ぐから、さ…」

「んんっ!!?どうした一夏あ…」

「どうしたどうした織斑あ」

「はあはあはあっ……………」

鼻息荒く一夏を取り囲む生徒達、彼女らは剥き出しの性欲を隠そうともせず一夏へとにじり寄り、重圧を掛けていく。その様はまさに獲物を集団で追い込む肉食獣のそれだ。

「脱ぐからっ!だからちよつと離れてくれよ…」

「ええ!?!どうしてえ」

「私たちはただ織斑くんの水着姿を間近で見たいだけなんだよ…」

「そうそう…」

手を伸ばせば触れられる程一夏に接近する彼女達、もう既に欲情で理性は溶けていた。彼女らの脳内を支配するのは己と一夏が交わる情景のみだった。

「みんな見たいんだよ!織斑くんの水着姿が!!」

熱の籠った叫びにたじろぐ一夏、もう逃げ場はない。退路を塞がれた哀れな獲物を煽り立てるかのよう、マスター布仏が号令を下す。

「おりむーの水着姿が見たい人ー！挙手ー！」

「はいー！」

「はいはい！！」

「はいはいはい！！」

まるで授業参観日の小学校低学年のように元気よく手を掲げる生徒達、その熱気はまさに狂信者のそれだ。

本音は更に生徒達に号令をかける。

「じゃあおりむーの水着姿が見たくない人ー！挙手ー！」

「……」

「……」

「……………」

先程の元気は何処へやら、まるで電源を落とされたかのように一斉に沈黙する生徒達。先程まで目に滾っていた熱狂が嘘のように目が死んでいた。

「わかるおりむー？ココに居る人みーんなおりむーの水着姿が見たいんだよー……」

両手を広げ一夏ににじり寄る本音、言葉一つで生徒達をコントロールする様は独裁者

のようだ。

もう逃げられない。一夏は悟った、気付くのが遅かった。

「…わかった…」

パーカーのジツパーを左手の指で挟む一夏、観念したかのようにゆつくりと、それを下まで下げていく。

ジリリリリリリリリ：

先程までの熱狂が嘘のように静まり返っていた。寄せる波の音と、生唾を飲む音と、ジツパーを下げる音だけが砂浜に響く。

皆釘付けだった、パーカーの隙間から露になる、汗に濡れた一夏の肌に。身悶え、羞恥に染まる一夏の表情に。

「んっ…」

既に何人かの生徒は極度の興奮で膝をついていた、肩で息をする彼女たち。ここで気をやる訳にはいかない、一夏の水着姿を見るまで倒れるわけにはいかない。

そして一夏の足元にパーカーが落ちた、もう一夏の上半身を隠すものは存在しない。遂に太陽の下に一夏の肌は晒された。

そこにあるのは、黒のローレグ水着を着た少年の、極上の裸体だった。

黒の水着は一夏の白い肌に映え、タイトなサイズではあったがギリギリ食い込みながらも尻を隠せていた。

右側の鼠径部には虹色のラインが三本絡みつく様な模様を描いたデザインが入っており、見るものにセクシヤルな印象を抱かせた。

日々の訓練により形造られた、無駄な贅肉のない、それでいて余計な筋肉もついていない、理想的な美しい胸板と背中では発汗して濡れており。そこから流れ落ちた汗が水着に染み込み、形の良い尻のラインをより一層引き立てる。

降り注ぐ視線に耐えきれなくなった一夏の顔は真っ赤になって目線を逸らした。

まるでエロ本から飛び出して来たような一夏の姿に生徒達は歓喜した。鼻血が噴き乱れ、何人かは気絶している。

そんな死屍累々の状況下に置いても鋼の精神で意識を保ったのが1年1組の精鋭たちだった。

「織斑くん恥ずかしがる事ないよお」

「そっくだよ織斑くん…」

彼女たちの目は最早人のそれではなかった、目を見開き、瞳孔を限界まで拡大させたその姿はネコ科の肉食獣を思わせた。

「織斑くん恥ずかしがってるけどさあ…自分で選んだんでしょその水着…」

「お尻食い込んじやつてるよ水着…見られたかったの？」

「ちっ…違…！」

クラスメイト達は一夏を弄りつつも“次”への準備をしていた。一夏の躰に合法的に触る、“次”への伏線を…

「あ、織斑くんさ！まだ日焼け止め塗ってないでしょ？」

「あ…そういえば…」

「だったらさ！私たちが塗ってあげようか？」

日焼け止め、それは夏場の女子達に欠かせない必需品だ。紫外線による肌へのダメージを軽減し、白い肌を保つ為の物だ。

そして彼女らはそれを今日、有効活用すべく動いていた。

「そういえば俺、日焼け止め持つてくるの忘れてたな…」

「でしょー織斑くん、だから私達のを塗ってあげる！」

「お、おう…」

一夏は気づかなかった、この安請け合いが彼女達の狂気を更に加速させることに…

織斑くんはみんなの…

暑い太陽の光の中、一夏はクラスメイト達に手を引かれてビーチパラソルの下に出来た日陰の側までやって来た。影の中には白いシートが敷かれており、人が寝そべられる程のスペースが確保されていた。

「入って、どうぞ」

日陰の中、シート上に座って手招きをするクラスメイト、口元はにこやかな笑みを形作ってはいるが目元は一切笑ってはいない。まるで獲物の動向を見逃さんとする獣の様だ。

まごつく一夏の背後に箒がポニーテールと乳を揺らしながら忍び寄る、デカパイ侍からデカパイ忍者へクラスチェンジだ。

「どうしたあ一夏あ…早く中に入ったらどうだあ…？」

「ひっ…」

デカパイ忍者は一夏の背中を指先でなぞりながら、一夏の耳元で囁く。蠱惑的な仕草だが全く興奮しないのはデカパイ忍者の優れた容姿を帳消しにする程の生理的な気持ち悪さ故か。

「ちよつと抜け駆け禁止ー！」

「何しれつと織斑くんに触つてんのデカパイ忍者」

デカパイ忍者に渾身のローキックを浴びせ、一夏からデカパイ忍者を引き剥がすクラスメイト達。プロの格闘家顔負けの蹴りを受けたデカパイ忍者はその場で転げ回り、悶絶する。

一夏はデカパイ忍者を心配して駆け寄ろうとするもクラスメイト達に即座に取り囲まれ、行く手を阻まれる。

「ごめんね織斑くん、怖かったね」

「大丈夫？織斑くん」

まるでハイエナのように群がり、一夏を囲むクラスメイト達。その目はアフリカのサバシナで逞しく生きる肉食獣のそれだ。

一夏の進むべき進路はもうパラソルの下だけだ。いや、クラスメイト達について行った段階でもはや一夏の進路は決まっていたのだ。

「I S学園のIはー?!」

「淫〇のIー!!」

「I S学園のSはー?!」

「S〇XのSー!!」

慎みという物を忘却の彼方へと置いてきた様な、女たちの下品な笑いが宴会場に響く、ここは旅館内にある大部屋だ。団体客を迎える為の部屋は現在、生徒達の引率の為にやって来たI S学園教職員たちが酒盛りをしていた。

何故こんな事になっているかという、臨海学校の初日は自由時間となっており。生徒達は全員ビーチで遊んでいる為に教員達はやる事がないのだ。

つまりこの時間は教員たちにとっても自由時間なのだ、日々の仕事のストレスを発散するべく。彼女達は酒を飲む、うだつの上がらないダメ人間の休日のごし方のそれだ。

一応弁護という訳では無いが、彼女達は普段は教職という未来ある子供達を導くエリートである。そんなエリート達が我を忘れ酒を飲み、吞まれていた。仕事のストレスというのはなんと恐ろしいものか。

「おい織斑ア！さつきから全然飲んでねえじゃねえか！」

学年主任が隅の席でちびちびと酒を飲んでいた千冬に向かって叫んだ、千冬はこの場

をさつさと切り上げて一刻も早く一夏の元へ行きたかった。現に今の千冬は黒のビキニを着た魅力的な姿をしていた。

元々この宴会にも参加する気はなかったのだが、水着に着替えてビーチに向かう途中で学年主任に声をかけられ半ば無理矢理ここまで来させられたのだ。

この学年主任、普段はその長い教師生活による経験と実績から生徒や同僚の信頼を集めるまさに人格者と呼べる人なのだが、一度酒が入ると誰にも止められない、いわゆる酒乱だった。

千冬も何度か酒の席で一緒になっており、彼女の酒癖の悪さは知っていた為と同席するのは正直御免こうむりたかったのだが仮にも直属の上司。誘いを無下にも出来ず、ことうやつて水着姿で宴会に参加するという普段の千冬からは想像も出来ない滑稽な姿を晒していた。

「あの、主任…私、そろそろ生徒達の様子を見なければいけないので…」

「ああん!? オイ織斑ア! 私と酒を飲むのが嫌だつて言いてエのかア!!!」

ドスの効いた声で千冬を恫喝する主任、補足しておくが普段の彼女は人を怒鳴りつけたりはしない、普段は優しく丁寧な生徒達を導く素晴らしい人格者なのだ、つまり酒が悪いのだ。

「いや、ですから私は…」

「私とオー！飲むのがア！！嫌だつて言うのかア！！？」

街のチンピラのような声で千冬に迫る主任、再度補足するが普段の彼女は皆に慕われる人格者なのだ、つまり酒が悪いのだ。

「私とオー…飲むのがア……………イヤなのオ！」

突如ぐずり出す主任、しゃくりあげ、目には涙を浮かべている。怒つたと思いきや今度は泣き始めた、忙しい女だ。

「うう……………うわああああああアアアアアアん！！！」

泣き叫ぶ主任、千冬はもうどうしたら良いのかわからずただオロオロしながらジョッキを片手に座っていた。

「やだアー！ちふゆちゃんとおさけのみたいイー！！！」

まるでおもちゃ屋の前でおもちゃを親に買ってもらえずに駄々をこねる子供のように、仰向けに寝そべって手足をばたつかせ暴れる主任。しつこいようだが普段の彼女は皆に慕われる人格者なのだ、だから酒が悪いのだ。

「ヤダやだヤダああああアアアアアア！！！」

千冬は周囲を見渡した、同僚達の目には懇願の色があった、頼むからココに居てくれと。

千冬は観念した、もうこうなってしまうと誰にも手が付けられない。天下のブリュン

ヒルデにも解決出来ぬ事があるのだ。嵐を回避する最善策は、嵐に立ち向かい打ち払うのではなく、身を潜めて嵐が過ぎ去るのをただじつと待つのだ。

暴れる主任を宥めながら、千冬は一夏の身を案じた。

(頼むから無事でいてくれよ一夏…)

千冬の願いも虚しく、こうしている間にも現在進行形で一夏の身は危険に晒されているのだが。

「さあココにうつ伏せに寝て」

「お、おう…」

クラスメイト達の言葉に従い、腹を地につけ背中をクラスメイト達に向ける一夏。視線が背中に集中する、陽の光を浴びて汗をかいた背は彼女達の目に鮮烈に、艶めかしく映る。

「おおおおお…！」

やらしい背中に歓喜するクラスメイト達、このまま集団で組み敷いてマワしてやろう

かと考えたが、微かに残る理性がそれを止める。

あくまでもこれは臨海学校。立派な学校の行事だ、旅館には先生達も居る。いつ自分の様子を見にココへやって来るか分からない以上、それは出来ない。

だから考えた、一夏に日焼け止めを自分達で塗れば合法的に一夏の躰に触れる、普段妄想の中で好き勝手やっているあのやらしい躰に触れられるのだ。

IS学園という全国有数のエリート校の優秀な生徒達は、その優れた頭脳を極めて頭の悪い作戦を練ることに使っていた。高い学費を払ってくださっている親御さん達が泣くぞ。

「じゃ…じゃあ…塗るね！オイル…」

上擦った声で宣言するクラスメイト達、何処からか取り出した市販の日焼け止めクリームやサンオイルをそれぞれ手に取る。ただ一人を除いて。

「ほ、本音？それ日焼け止めじゃないよね？」

「え？」

本音を取り出したもの、それは大人の夜遊びに使うためのもの、所謂ローションだった、太く長い容器には『ペ○』の二文字がデカデカと刻まれている。

「えー？これ日焼け止めじゃないのー？」

「違うよ！それ…アレじゃん！」

本音の手に握られた『〇ペ』のボトルが太陽の光を浴びて無駄な光沢を帯びている、色めきたつクラスメイト達。忘れてたがコイツ天然だったと彼女達は今更思い出した。

「そんなの何処で買ったのよ」

「ド〇キホーテ」

激安の殿堂のごちゃごちゃとした店内をイメージするクラスメイト達、恐らく日焼け止めを売っているコーナーに誰かがイタズラでそこに置いたのを本音は間違えて買ってしまったのだろう。

あの店はなんでも取揃えているなあとしみじみ思うクラスメイト達。そんな彼女達を置いてなんと本音はそのまま『ペ〇』を手に一夏の所に向かってしまった。

「あっ……」

突然の事で反応出来なかったクラスメイト達は一番乗りを本音に許してしまった。

「うふふーおりむー塗ってあげるねー」

「この声はのほほんさんか？わかった」

一夏は背を向けている為に今本音が何を手に持っているかわからないのだ、もつとも性知識に疎い一夏の事だ、仰向けだったとしても本音が手にしている物の正体は何なのかかわかるかは疑問だが。

「んっ……んー！あれー？出ないなー？」

本音は『〇ペ』のボトルに力を込めて容器の中からローションを出そうとするも中々出てこない。粘着性の強いローションはひり出すのに意外と力があるものだ、女の握力なら尚更だ。

「んー？どうしよう…」

本音は思考を巡らせた、これでも全国一のエリート校であるIS学園の生徒だ。頭の出来そのものは良い、天然なのがその良さを相殺してしまっているのだが。

「あ、そうだ！」

そして本音は閃いた、閃いてしまった。

「思いつきり振れば良いんだ！」

おもむろに『ペ〇』のボトルを振りかぶる本音、そしてそれを勢いよく一夏の背中に振り落とした。

ブボボツ!!!

「うおおおおお!？」

「うおおおおお!!」

排泄音にも似た汚い音をたててボトルから大量のローションがひり出た、一夏の背中はたちまちローション塗れになってしまった。想像以上の量に驚く一夏と、ローション塗れになった背に興奮するクラスメイト達。

1度は冷静になっていた彼女達の思考回路は再度加熱し、再び性的興奮に盛り上がる。

「の、のほんさんコレちよつと多くないか？」

「んー大丈夫だと思おうよー？」

彼女達の興奮を他所に、一夏の背中にゆつくりとローションを塗り込む本音。ローションの光沢がいかかわしさを加速させる、彼女達はもう限界だった。

「本音ばかりズルい！私も塗る！」

「わ、私も!!」

「一夏ア！私も塗ってやるぞオ!!」

「うわっ…皆ちよつと待って、待ってえええ!!」

一夏の元に殺到するクラスメイト達とローキックから回復した箒、その手には既に過量の日焼け止めやサンオイルが容器からドバドバとひり出されていた。

その後、主任から解放された千冬は急いでビーチまでやって来た。

そこで千冬が見たものは、I・M・Fコールを絶叫し熱狂する生徒達と、ビーチパラ

ソルの下で全身粘液まみれで倒れ放心した一夏の姿だった。

くい込む視線

一夏はおぼつかない足取りでパラソルの下から粘着性な水温をたてながら這い出てきた。オイル濡れになった躰は天から降り注ぐ太陽の光を反射し、血行の良い肌色と相まって何とも言えないいいかがわしさを漂わせる。

その様子を自分達の仕事に満足したような表情を浮かべる生徒達、ひと仕事を終えた達成感があるが忘れてはいけない。これはまだ日焼け止めを塗っただけなのだ、遊ぶ為の前段階に過ぎない。彼女達の臨海学校はまだ始まったばかりなのだ。

「織斑くん！あそぼー！」

「あ、ああ……」

ビーチボールを片手に先程の淫猥さからは想像もつかない無邪気な笑顔で一夏を遊びに誘う生徒達と、そのギャップに戸惑い怯える一夏。

海ではしゃぐ姿は健全な女子高生そのものだ。尤も、先程の一夏へ行った所業は健全とは言い難いものだったが。

「ビーチバレーやろっか！」

一夏のクラスメイトの一人である谷本癒子が一夏をビーチバレーに誘う、それを阻止しようとしてデカパイ忍者が話を遮る。

「一夏！スイカ割りも良いぞ！」

「ちよつと邪魔しないでよデカパイ忍者ー」

「誰がデカパイ忍者だ！」

「うるさい乳割るぞデカパイ忍者」

喧嘩に発展しそうな雰囲気を感じた一夏は二人の間に割って入り、仲裁をする。

「じゃ…じゃあ最初にビーチバレーしようぜ！その後デザート代わりにスイカ割って食べようぜ、良いかな二人とも？」

癒子は歓喜の雄叫びを上げ、デカパイ忍者は渋々といった表情で引き下がった。デカパイ忍者の脳内の冷静な部分がこの場でこねるよりも後で一夏と遊べる時間が増えるかと判断した結果だった。もう既にデカパイ忍者は目隠しをした一夏の躰を好き放題に弄ぶ妄想でトリップしている。

そんな変態デカパイ忍者を癒子は捨て置き、一夏と友人達を引き連れてビーチの中に存在するある所に向かった。

「へー…なんか本格的だなあ」

癒子たちに連れられやって来た一夏が目にしたものは高々と張られたバレーネット

と審判席だった。中々本格的な設備に驚く一夏、その様子に癒子は得意気だ。

「どう？ 凄いでしょ、実は一個上の先輩にこのビーチの事を色々教わっててさ……」

癒子の説明によると、ここの旅館はIS学園の各運動部の合宿にも使われているのだそうだ。癒子が所属しているバレー部も例外ではなく。毎年夏休みになるとこの旅館で強化合宿を行うらしい、砂浜での運動が足腰を鍛えるのだそうだ。

「つまり谷本さん達はこの臨海学校が終わってももう一回ここに来られるわけか」

「うん！ 練習キツイけど楽しいって先輩言ってたもん」

「へえー良いなあ」

一夏は知らない、癒子が臨海学校へ出発する前日、癒子の先輩が今年の1年生の臨海学校に一夏が参加するのをどれほど羨ましがったか。

「どぼじであゝんゝだどおゝりゝむゝらゝぐんゝがおゝなゝじぐらゝずなゝのゝおゝ!？」

涙と鼻水に塗れた汚い顔を癒子にぐりぐりと近づけ癒子の制服を汚した事を、一夏は知らない。

呑気なことを言いながらコートまで案内される一夏、ふと振り返ると何やら大勢の生徒達が一夏たちに付いてきていることに気がついた。

「お、なんだ？ みんなもビーチバレーやるのか？」

「どうやら参加する気はないらしい、一夏がバレエをする姿が見たいようだ、要は野次馬だ。」

「フレー！フレー！おーりーむーらー！」

チアリーディング部の生徒が列を作り即興で一夏を応援するコールを叫ぶ。他の生徒も例のI・M・Fコールを叫び、一夏を応援していた。

「大人気だねえ織斑くん」

「あはは…」

眉を八の字に曲げ困り顔の一夏、そんな表情が彼女達の庇護欲を擽る、何をしても女にモテる男である。黒のローレグブーメランパンツでそれをやるのだからもう彼女達は堪らない、びっしょりだ。何人かの生徒はそれを誤魔化そうと海へと飛び込んだ。

この性欲丸出しの猿共がこの国の未来を担うエリートのお卵だと言うのだから、この国の将来は一体どうなってしまうのか。

「さあ織斑くん始めようか！7月のサマーデビルの力を見せてあげる！」

誰がつけたか知らないがネーミングセンスの欠片も見当たらない異名だった。

世の中には二種類のスポーツがある、個人競技と団体競技だ。

そして団体競技の中でも二人でしか出来ないスポーツ：それがビーチバレー！
広い砂のコートにたった二人だけ、だから私たちは：

かけがえのない一人を選ぶ！

「癒子さつきから何ひとりでブツブツ言ってるの？」

「あ、ごめん、ちよつと考え事してて…」

二人一組に別れた癒子と一夏はコート上にて対峙していた、癒子は友人と、一夏は清香と。審判にはマスター布仏が付いた。危なげに審判席に登る本音、果たして大丈夫なんだろうか。

既にギャラリィがコートを取り囲み、声援を送る。

「一夏！一夏！一夏！一夏！」

「I. M. F! I. M. F! I. M. F!」

コート外の熱気は最高潮だ、そして審判席に座る本音が試合開始のホイッスルを吹いた。

(行くぞ相川さん！)

一夏は前屈みになり、背中に手を回し、後方にいる清香にサインを送る。速攻を決め

る算段だ。

しかし一夏は失念していた、今自分がどんな格好をしているかをだ。

(ブホオ!?)

一夏の尻にローションやその他のオイルをたっぷり含んだローレグブリーメランパンツがくい込み、染み付いたそれらが生地の上へと押し出され、染み出し、砂浜へと滴つた。

(織斑くんのお尻が……！)

濡れる一夏の尻が清香の視界を独占する、もう試合どころじゃない。誰だこの歩く猥褻物にあんなもの塗ったのは。あ、私らか。

一夏に目を奪われているのは清香だけではなかった、コートで対峙する7月のサマーデビルこと癒子もまた、一夏の躰に魅了されていた。張られたネット越しにある一夏の裸体に癒子の妄想は加速していた。

(織斑くんの、このカラダで、私のアタックがブロックされたら……！……！)

ネット越しとはいええ、あの一夏の躰が。自分の目の前に拵がるのかと思うともう癒子は試合どころではなかった。

(ああ……ダメ！織斑くんのカラダが、私の前に、前に!!)

「えつと……みんなバレーしないのか？」

ホイッスルが鳴ってはや5分、一向に動こうとしない敵味方に一夏の困惑した声が虚しく響いた。

魅惑のオトコ

一夏達が臨海学校を満喫していた頃とほぼ同時刻、アメリカ合衆国某州、某所、人里離れた荒野地帯にぽつんとその施設はあった。砂埃で煤けた看板には気象観測所と書かれており、その施設の持つ価値がそれ以上でも以下でもない事を対外的に示していた。

「来たか……」

施設のメインゲートの窓口にて門衛を勤める黒人の男が小さな声で呟いた、その表情は勤務の退屈さを隠そうともしない。持参のラジオから流れる素人臭さの抜けきらない田舎DJの段取りの悪い喋りが暑い陽射しに伴う不快感をより一層深める。男の視線の先には白い大型トレーラーが黒塗りのSUV二台に率いられて、今まさに施設のゲート前に差し掛かるところだった。

「よう、調子はどうか？」

「いいと思うか？」

トレーラーの運転手が呑気な声で門衛に話しかける、この運転と門衛は施設内への物

品搬入の度に顔を合わせる顔なじみだった。SUVに乗っている人間もそうだ、搬入の際の人員はこの門衛がこの施設に配属されてからほぼ変わらない。

「また面倒そうなモン持つてきやがって」

「いつもの事だろ？そら、ゲートを開けてくれ」

「あいよ」

トレーラーとSUVはゲートを通過し施設内に入ってゆく。守衛は自分の左手首に巻かれた腕時計に目をやった、時計の針は門衛の勤務交代時間まであと1時間をきった所だった。

「あと57分……」

備え付けのソファアに深く腰掛けて再び田舎DJのラジオに耳を傾ける門衛の男、しかし暇だ。男は退屈しのぎにふと男は壁立てかけてある物へ語りかけた、漆黒のゴツゴツとした物へと。

「お前も暇だよなあオイ」

M4カービン、アクセサリをふんだんに装着されたそれは壁際になんでもないような日用品の様にこの部屋の中に溶け込んでいた。気象観測所の警備員が装備する物にしては些か過剰な威力の銃火器だった。

「あのゲートは半ば飾りのようなものでね、チェックはこちらで行う」

仕立てのいいビジネススーツを来た壮年の白人男性がSUVの後部座席にて隣に座る女に話しかけた、美しい女だった。今は地味なスーツを着てはいるが着飾ればハリウッドスターにも引けを取らないのではないかといった美貌だ。

「すまないねナターシャ、君をこんな辺鄙な土地に連れてきてしまつて」「お気になさらないでください、室長」

施設内の暗く長い搬入用通路を抜けていくトレーラーとSUV、お互い退屈凌ぎに男とナターシャは話しを続けた。

「あの門衛は一般の警備会社の者ではありませんね?」

「よく気づいたね、あれはウチのOBが代表を務めているPMCの社員だよ、あのゲートだけじゃない。ココの警備員は皆その社員さ」

「随分と退屈そうでしたね」

「しようがないよ、奴らは2年前まで紛争地帯で銃を振り回してた生粋の戦争屋共さ。血と火薬の匂いが身近になれば生きられない連中なんだよ」

「何故そのような者達をココの警備に?」

ナターシャの質問に痛いところを突かれたとばかりに苦い表情をする男、男は苦々し

い表情で問いに答えた。

「苦肉の策だったんだよ、軍に警備を要請すれば何かと面倒だ、そこでウチのOBが立ち上げたPMCの人間を使う事にしたんだ。奴ら経歴の偽装は骨が折れたが、後々の事を考えたら安いもんさ」

「そこまで面倒な事をしてまで外部の人間を使うのだったらいつそ軍に警備を任せても良かったのでは？」

「そりゃ私もソレは真つ先に考えたさ、でも軍人ってガサツだしさあオマケにしつこいと来た。1度でもヤツらに頭下げたら後は恩を返せと言わんばかりに難癖つけられて最終的に研究成果丸ごと持っていかれちまうのがオチだよ」

「それでこの施設を？」

「そう！だからわざわざこんな辺鄙な土地にIS専門研究施設なんて物を作ったの！全く、面倒だったらありやしない」

アメリカ合衆国軍は現在、IS至上主義が蔓延する現代において唯一ISの研究には消極的な国だ。理由はただ一つ、陸海空軍並びに海兵隊、沿岸警備隊いわゆる「五軍」の各上層部が未だISに対して懐疑的な見方が強いからである。

「女しか使えない兵器に一体何の戦略的価値があるのか」

「なんだあの競泳水着みたいなスーツは、売女か」

「空飛ぶビッチ共に俺たちの空は渡さねえ！」

「500にも満たない兵器に国防を委ねろだと、正気か」

「戦いは数だよ！兄貴！」

IS台頭以前の男社会のまま、まるでシーラカンスのように変化を拒み、旧体制に固執する生きた化石というのが現在のアメリカ軍の現状だ、元より彼らはISに頼らずとも強大な軍事力を保有している。

軍は恐れているのだ、ISが軍に参入する事により自分たちがお払い箱になる事を。

そして米政府の頭痛の種になっているのが、それら軍の維持費及び国防費の爆発的増加だ。これはIS台頭以前から政治家達が頭を抱えてきた難題だったが、近年のそれは最早、国を病む癌と言える程の深刻な問題となっていた。

IS発表直後、まず軍が危惧したのはISがテロへ悪用されないかだった。そしてその懸念は程なくして現実のものとなった。

『白騎士事件』

アメリカの同盟国である日本に向けて、2000以上のミサイルが撃ち込まれ、そしてそれら1機のISが尽く撃墜したあのふぎけた事件だ。

あの事件以降、軍はISへの不信感をより一層強めた。

「ほら、俺の言う通りになったろ」

当時の空軍参謀総長がしたり顔で言い放った言葉だ。そして軍は政府に対して国防費とは別に「対 I S 使用テロ対策費」なるものを新たに要求した、その額は……：最早口にするのも馬鹿馬鹿しくなる程の金額だ。

「室長！ ナターシャも！ そろそろ着きます、ご準備を」

S U V の運転手が後部座席で話し込む二人に声をかけた、二人はシートベルトを外しつつ出る準備をしながら会話を続けた。どうせこの後も暇なのだ、出来るだけ時間を潰したいのが二人の共通目的だった。

「軍拡を図りつつ I S の参入を阻止したい軍と、 I S を国防投入し軍事費を浮かせたい政府、板挟みになる我々の身にもなって欲しいものだよ」

「大統領（プレジデント）は、どの様なお考えなのですか？」

「将来的には沿岸警備隊に数機ほど配備したいようだが、連中も強情だからなあ……何時になるやら」

「はあ……何だか不安です、私……この先軍でやって行けるか」

「オイオイ頼むよナターシャ、君は我が D A R P A（国防高等研究計画局）の肝入りなんだ。軍からはそれ相応の階級を貰う予定なんだろう？」

「はい、この実験が無事に成功すれば……その後私は大尉『相当』の階級を貰ってそのまま

軍に出向する予定です」

『大尉』外部から招いた人間に与える階級としては破格のものだろう。まあ出向したとして腫れ物扱いされるのは目に見えてはいるが。

項垂れるナターシャ、これから汗臭い軍人共に混じって仕事をするのかと思うと今からでも室長に辞表を叩きつけてやりたい気分だ。

「あー…もう、勘弁してくださいよ室長、何で私なんですかあ…」

「仕方ないだろう、あのトレーラーの中のISのコアに最も同調したのが君なんだから」彼女『ナターシャ・ファイルス』はあの白いトレーラーの中に鎮座している“半”自律戦闘用IS『シルバリオ・ゴスペル』のテストパイロットを若くして務める才女だ。

半自律戦闘用IS、それがあのトレーラーに積まれた荷物の正体だった。前文において説明した軍と政府の確執によって生まれた鬼子だ。

これは簡単に説明すると『状況により有人操縦、自律戦闘を任意で選択する事が出来るIS』である。

このISが誕生した経緯はプロジェクトXも真つ青なドラマティックな制作過程を経ているがココでは割愛させてもらおう。そろそろ作者が書くのに飽きてきたからだ。

「で、これがあの子に搭載するコア（人工知能）ですか…」

「ああ、まっさらな状態の赤ん坊さ。これからこの赤ん坊の教育を我々で行うわけだ」

今回行われる研究はコアに様々な情報を与える事により人工知能の発育を促すというものだ。ナターシャはおもむろに持参のタブレットを取り出すとある画像を液晶画面に写した。

「ナターシャ、それは…？」

「今回の実験の為にティナに…後輩から貰った写真です」

「そうか、君はIS学園のOGだったね」

タブレットの画面には織斑一夏の写真が映し出されていた、ナターシャは更に画面をスライドさせる。随分と大量に送ってもらったようだった。

「コレとか…あとコレとか！実験に使えると思うんですよねー、どうですか室長！」

「随分と…こう、なんて言うか。刺激的な写真だね…」

先程の車内でのローテンションとは打って変わり、生き生きとしたテンションのナターシャに押されつつ室長は画像に対する感想を答えた。

画像の中には明らかに盗撮じゃないかといったアングルの写真もあったが、室長は敢えて口に出すことはなかった。

「早速この子のコアにこの画像を見せてみましょう！何か反応があるかもしれません！」

「あ、ああ…」

「Hey! boy!」

同伴していた研究員へ、この画像を人工知能に見せるよう指示を出すナターシャ。研究員は内心引きつつも断らずに画像をコアへと送る、するとコアが早速反応を示した。

「反応ありました！」

「マジかよ」

「YES!」

コアには様々な言語の言葉がデジタル表記で洪水のように流れていく。やがてそれらの言語はひとつのモノへと統一されてゆく。

「言語がEnglishに統一されていきます…」

研究員が観測されたコアの反応を記録していく、室長とナターシャ、それに研究員たちはそれを固唾を飲んで見守った。

『Ichika Orimura……Ichika Orimura……Ichika Orimura……Ichika Orimura……Ichika Orimura……Ichika Orimura……Ichika Orimura……』

『I c h i k a O r i m u r a … I c h i k a O r i m u r a … I c h i k a O
 r i m u r a … I c h i k a O r i m u r a … I c h i k a O r i m u r a … I
 c h i k a O r i m u r a … I c h i k a O r i m u r a …』
 『I c h i k a O r i m u r a … I c h i k a … I c h i k a … I c h i k a … I
 c h i k a …』
 『c h i k a …!!!』

『I c h i k a … … … … … s e x y』

地獄の扉が開いた瞬間だった。

結局癒子主催のビーチバレーはゲームとして成立せず、そのまま有耶無耶で終わってしまった。一夏はその後クラスメイト達と砂浜でつかの間のバカンスを満喫し。そして日は暮れ、太陽が月にバトンタッチをする頃、臨海学校に参加している一夏を含めた全生徒達は、数時間前まで教師達が酒盛りをしていた例の大部屋まで集まっていた。「はいみんな集まったかなー?」

学年主任は先程の酒の席での醜態が嘘だったかのように教師然とした態度で生徒達をまとめていく。その手腕は横から見ていた千冬や麻耶でさえ未だ及ばない、まさにベテランの手際だった。

(本当に酒さえ入らなければ教育者の鑑と言っても過言ではない人なんだが…)

千冬は先の荒れ狂う主任の姿と、現在の主任の姿を照らし合わせるが何一つ合致しなかった。ほんの数時間前に自分が目撃したあの酒に溺れた主任の姿は、自分が生み出した幻覚かなにかだったのではと千冬は思ったが、主任の吐く息に若干酒の匂いが混じっていたのを千冬の優れた嗅覚は嗅ぎ逃さなかった。

やはりあれは夢現ではなかったと千冬は否応なしにでも自覚させられる、千冬はため息を漏らしながら先程の主任との会話を思い出していた。

「チフユたんは恋人とかいるウ!？」

「私はそのような者は…」

同僚たちに押し付けられる形で主任の相手をさせられる千冬、何が悲しくてこんな30半ばを超えた酒乱女の話し相手を自分がしなくてはならないのかと千冬は主任の話に適当に相槌を打ちながらこの地獄の酒盛りが早く終わる事を願っていた。

そんな千冬の状態がいけなかった、主任は突然立ち上がったかと思っただらおもむろに千冬のビキニのトップを剥ぎ取ったのだ。

「なあっ!？」

「ちふゆたアん!!！」

女だらけの宴会に突如、異性はもちろん同性すら魅了する極上の女の裸体が献上された。揺れるバストが悩ましくも色めかしい。

主任の突然の凶行を同僚たちは呆気にとられ身動きが取れない。千冬は胸を左腕で隠しながら右手で奪われたトップを取り返そうとする。

「ちふゆたん私のお話ちゃんと聴いてよオ！」

「聴く！聴きますから返してください主任！」

「おおー！いいぞー！ヤレー！」

トップレスで主任と格闘戦を繰り広げる千冬、嘗てブリュンヒルデの称号を手にした

女と30半ばを超えた酔っ払い女のキャットファイトは酒の席の余興としても滑稽極まりなかった。

「ひゅー！千冬おっばいプルンプルン!!」

「あわわ…先輩のおっばいがバルンバルン跳ねてます！」

「流石ブリュンヒルデ！乳揺れも世界一だア!!」

そんなカオスな状況を酒の肴に同僚たちはますます酒を煽る、負のスパイラルは解決の糸口を見いだせぬまま、千冬が主任から水着のトップを奪い返してそのまま宴会から飛び出して締めとなった。

幸いにもあの場には教員しか居なかった為、千冬の痴態が生徒たちに知られる事はなかったものの。もし仮に生徒があの場合を目撃していればこの臨海学校の風紀と秩序は赤子が積木を倒すが如く簡単に崩壊していただろう、これ以上のモラルハザードを許すわけにはいかないのだ。

「さ、先輩も早く食べましょ！せっかくの豪華な食事です、早く食べないと勿体ないですよ」

「あ、ああ…」

麻耶の言葉に現実引き戻された千冬は、自分の席から少し離れた席に座り料理に舌

鼓を打つ主任の姿を横目に箸を手に取る。千冬の胸の中では主任の放った一言が反響していた。

(彼氏……か)

織斑千冬は処女だ。男性経験など皆無、これは千冬の情報の中でもトップシークレットの情報だ。何せ一夏に人並みの生活をさせようと身を粉にしてこれまで働いてきたのだ、男にうつつを抜かしている暇などなかった。

そんな千冬だがかつて一度だけ、同僚に所謂『合コン』というものに誘われた事があった。千冬も初めての経験で、精一杯オシヤレをし、合コンへと赴いた。

そして顔を合わせた男性陣からの質問が「やっぱり鉄とか斬れるんですか」だった。

千冬は数秒黙った後、静かに「……斬れます」とだけ答えた。

おお……と感嘆する男性陣を死んだ目で見つめる千冬、男たちの視線は魅力的な女性を見る目ではなく、熟練の技を持つ達人を見る目だった。

「先輩どうしました？ 具合でも……」

「いや……なんでもない……」

唐突に蘇った苦い記憶を再び脳の奥底へと沈める千冬、そうだ千冬、お前はまだ若い。

私はまだイケると自己暗示を掛ける千冬。

その行為自体が既に後がない人間が行うものだということ事を千冬は知る由もない。

そして遠く離れたアメリカでISが暴走を始めたというのは、もつと知らない。

妹の心、姉知らず。

「突然電話してすまない、姉さん…久しぶり」

時計の針は少し巻き戻り、一夏たち1年生が臨海学校へと出発する三日前の事。箒は寮の消灯時間間際、ある人物へと電話で通話をしていた。

「そんなにかしこまらなくても良いよ、箒ちゃん」

電話の相手は篠ノ之東、IS（インフィニット・ストラトス）の生みの親であり。現在は世界各国から身柄の保護を名目に追われる身でもある天才科学者だ。

「実は…」

「良いよ、言わなくてもわかってる」

「姉さん…」

箒の言葉を遮り、結論を出す。この天才科学者の前では小娘のお願い事などお見通しだ。

「専用機が欲しいんでしょう？」

東は電話の向こうの妹の表情を予想する、今頃泡を食ったような顔をしていることだろう。東はほくそ笑んだ、これならわざわざ専用機を渡す口実作りをする必要もない。

東は既に製作していたのだ、実の妹。箒に渡す専用機を、あのいじらしい妹がまさか自分から私に「おねだり」をしに来るのは想定外だったが。

「ほ、本当なのか…姉さん…!」

「うん! 東さんは箒ちゃんのことならなん「ありがとう姉さん!!」よ…!?!」

突然の大声に驚く東、何事かと思っていると箒は更に感謝の言葉を続けた。

「ありがとう姉さん…! 本当に何と礼を言ったらいいのか…!!」

「い、いやあ…別にそこまで言ってもらえるのなら…東さんもう「本当にありがとう!!!」しいよ…!」

またも出鼻をくじかれた東、話のペースを完全に箒に取られてしまった。元よりコミュ障の彼女は一度話の主導権を握られてしまうともう押し黙ってしまう他ない。

これが赤の他人ならば東は相手のコミュニケーションをシャットダウンしてそもそも会話が成立しないのだが、今相手をしているのは実の妹の箒だ。無碍にする訳にもいかない、証人保護プログラムによる家族離散の原因となったのは他でもない自分だ、その負い目もある。

「う、うん…!」

「ありがとう……！ありがとう……！姉さん!!」

「あ……りがと、う……」

振り絞るような声で感謝の言葉を述べる箒と、しどろもどろにそれを受け取る束。一方的な展開の手押し相撲のような会話は束の精神すり減らした、がんばれ束。

「これでようやく……」

「よ、ようやく……?」

「一夏を手箒めに出来る……!!!」

「て……っ?!」

電話の向こうに居る妹の口からなにやらとんでもない言葉が聴こえた気がする、『手箒め』時代がかった言い方だが要は『犯す』という意味だ。犯す? 箒ちゃんがいつく人を犯す!?

「まっ! 待って箒ちゃん!!」

「本当にありがとう!!! 姉さん!!!」

電話はそこで途切れた、もうどうしているのかわからずただ途方に暮れる束。天災とも呼ばれる優れた頭脳は想定外の事には酷く脆かった。

「……どうしよう……」

束のすぐ後ろでは作業用アームが着々と箒の専用機を建造している、一切の滞りなく

進む作業を束は呆然と見ていた。

嫌な予感がする、束は勘などという不確定要素に信を置くことはない。ないのだが、今回に限っては別だ。何かとんでもない事が起きるかもしれないと、束の第六感は告げていた。

「ふ、ふ、ふ……」

篠ノ之箒は歓喜していた。遂に、遂に一夏が私のものとなるのだ、口元は欲望に歪み、垂れる涎を舌で卑しく舐めとる。整った容姿を全て帳消しにする程汚い笑顔だった。今誰かが箒の姿を見れば誰もが彼女を変態と呼ぶだろう。事実変態だった。

「一夏が悪いんだから……お前があんなにやらしい躰をしているのが悪いんだ……！」

水○敬ランドに出てくる女みたいなきつたない笑顔を浮かべ、一夏をまだ見ぬ自分の専用機でモノにする場面を妄想する箒。

そして余談だが、この一人ニヤニヤしている姿を他の生徒に見られ、暫くの間箒は陰でのアダ名が『変態ニヤけ女』となる。

臨海学校2日目、ここからI S学園生徒達は本格的なI Sを使用した訓練を始める事となる。1日目の自由時間で英気を養った生徒達は、みな各々に己の背負う課題に取り組むのだが今年はそのとはいかない。今年はなんとたつて皆のセックスシンボル織斑一夏が居るのだ。

一夏はそのドスケベボディをI Sスーツに包み、少女達を惑わす引力を放ちながら2日目の訓練に参加していた。

「行くぞー！鈴ッ」

「かかって来なさいー！」

旅館から少し離れた沿岸部上空にて、教員と多くの生徒達が観戦する中。一夏の白式と、2組の鈴が駆る甲龍は互いの近接戦闘用装備を使用した模擬戦を行っていた。

方や搭乗時間半年にも満たない素人と、方や中国代表候補の戦いは後者による一方的な試合展開になるだろうという開始前の観戦者たちの下馬評を覆す接戦となった。

「うおおお!!」

「ハハッ！やるじゃない」

鈴は表面上こそ一夏の成長を讃えてはいるものの、内心とても焦っていた。成長速度が早過ぎるのだ、余りにも。鈴とてIS操縦未経験から弛まない研鑽と努力により代表候補生の座を掴んだ秀才だが、ここまでではなかった。

やはり血か？鈴は対戦者である一夏に注意を配りながら、観戦者の中に混じる千冬を横目に見る。初代戦乙女（ブリュンヒルデ）織斑千冬。その才覚を宿す血は実弟にも脈々と流れているようだった。

そして何より…

「はあああつー！」

（エロいッツツ!!）

芳醇な若い色香を放ちながら鈴に向かって突進する一夏、端正な容姿と相まってそれは躲し難い引力を携えていた。これが1組の生徒であったならば日々共に教室で過ごす為に耐性が付いているのだが、鈴は2組。一夏とふれあうのは精々授業の合間の休み時間くらいだ。当然耐性など身に付いている筈もない。

「トドメだー！」

「しまっ…！」

一夏が持つ零落白夜が鈴を袈裟に斬り伏せる、それと同時に甲龍のシールドエネルギーは底をつき、絶対防御が発動した。

鈴の敗因はただ一つ、『2組』だったからだ。

「ほら、ちゃんと捕まってるよ」

待機状態となつた甲龍では陸地に戻ることが出来ないのです、仕方なく一夏は鈴に所謂お姫様抱っこをしながら皆の前へ戻る事となつた。

観客からは嫉妬と羨望の混じつた眼差しが寄せられ、「私も抱っこされたい」「抱かれたい」「寧ろ抱きたい」などとそれぞれ好き勝手な感想を述べるのだった。

そして、その中に一際熱い眼差しを一夏へと向ける女が居た。そう、我らが変態ニヤけ女篠ノ之箒だ。

(良いぞオ…一夏ア)

武○弘光の描くマンガに出てくる女みたいな顔でニタニタと欲望を滾らせる箒、紛れもない変態だ。

(よくぞ実つた…食べ頃になるまで…私が食べるまで…！)

目を血走らせ、地に降りて来た一夏をガン見する箒。一夏は既に白式を解除しており、汗に濡れたカラダを露わにしていた。年若い少女達にとつて目に毒つてなんてもんじゃない、劇薬だ。

「鈴ッ！鈴ッ！ヤバイ鈴が息してないっ！」

「しっかりして鈴音ー!!」

お姫様抱っこによる至近距離で一夏のフェロモンを浴びた鈴は心肺停止状態となっていた。まあ助かるだろう、鈴だし。

「鈴大丈夫かなー」

箒の滾る熱視線に全く気付かないまま、呑気に鈴の心配をする一夏、彼は知らない。後に災難が他でもない自分自身に降りかかるといふ事を。

恋の覇道

一夏がその劇薬に等しい汗ばんだ躰を少女達の前に晒していた時からほぼ同時刻。遠く離れたアメリカ、ハワイ州上空、高度10000mを無人ISシルバリオ・ゴスペル（以下、銀の福音）は高速で飛行していた。

目指すは日本、いや、正確には織斑一夏。その人ただ一人。既に米本土からの執拗な追撃を振り切った銀の福音はその勢いで一気に米領空圏を抜けようとしていた。

『I C H I C A … I C H I C A … !』

ここを抜けられれば一夏に逢える。一夏を抱ける、犯せる。銀の福音に搭載される人工知能は最早正常な思考能力を完全に喪失していた。狂える鋼の乙女を止める者など、いったい何処に居るといふのか。

『…Enemy aircraft sensing』

そう、何処にも居ない。銀の福音のハイパーセンサーが本来友軍機である米空軍所属機を“敵機”として捉えた。敵だろうが味方だろうが関係などない。些末な事だ。私の邪魔をするものは全て敵だ。

「ロックオンされた」

「こっちはステルス機だぞ」

ハワイ州、ヒツカム空軍基地より本土からの要請を受けスクランブル発進したF-35Aを中心に構成された編隊は、通常編成から遥かに多い特別編成にて狂える無人機を迎え撃った。管制塔からは既に撃墜命令は降りている、オマケに無人機きた。何も躊躇する必要など無い。

何より腹が立つ、パイロット達は折角の休日をこんな訳の分からん鉄屑に潰された怒りで燃えていた。家族との時間、恋人とのデート、友人との遊びの約束。それら全てをこの鉄屑は奪ったのだ。

「ステルスだろうが無かろうが何れにしても顔を突き合わせねばならんのだ」

特別編成隊の隊長が落ち着いた声色で隊員達に無線で語りかける、歴戦の勇士の言葉に浮き足立っていた隊員達は軍人らしい冷静さを取り戻した。

「こんなポルノ紛いの写真ひとつで暴走するAIなど最初からスクラップにしておけば良かったのだ!!」

ヒツカム空軍基地管制塔にて一人の男が資料として渡された紙の資料を両手でぐしゃぐしゃに丸めるとその辺に投げ捨てた。男の着る軍制服の胸元には多くの勲章が

これまで彼が歩んできたエリートコースを悠然と周囲に示していた。

「司令、どうか落ち着いてください」

「落ち着け？今、貴様落ち着けなどと言ったか？これが落ち着いてなど居られるか！」

男は先程自分が丸め捨てた資料を3〜4回踏みつける、無残な姿となった資料には一人の少年の顔写真と少々如何わしいアングルから撮られた写真数点が貼り付けてあった。

織斑一夏、世界で唯一I Sを操縦できる男性であり。今回の騒動の原因（？）でもある少年だった。

「あのG A Y B O Yめ、我が国に恥をかかせる為にひと肌脱いだって所か？」

「いや、たかがG A Yの学生がここまで大それた事が出来るかよ」

「織斑一夏の背後に居る何者かが彼に指示したと？」

今回の騒動の為に同基地内に緊急設置された『無人機対策室』は混迷を極めていた。集められた軍人たちはそれぞれ今回の騒動についての持論をそれぞれ展開していた。まあ尤も、飛び交う推論のほぼ全ては3流ゴシップ誌に載っているような陰謀論だった。

「まさか…日本が我々に戦争を仕掛ける気なのでは!？」

「……………有り得るな」

「クソツッ！GAY BOYめ!!なんて卑劣な」

「卑劣なGAYがッ！」

そんな中、対策室に一人の下士官が飛び込んできた。走ってきたのであろう。息を切らせながら、額には汗が浮かんでいた。

「たった今、追撃隊が無人機と会敵したようです！」

軍人達の顔は途端に険しい物へと変わった。

「攻撃開始」

隊長機からの指示を皮切りに隊員達は嬉嬉として火器を銀の福音に撃ち込んで行った。機銃とミサイルの集中豪雨が銀の福音を包み込む、これが通常兵器であれば存在した形跡すら遺さず消し飛ぶであろう苛烈な攻撃。

だが彼女は、銀の福音は現世界最新、最高、最強の兵器とされる『IS』である。一般の競技での使用を前提としたものではない、実戦を想定した強度を有するシールドエネルギーが旧来兵器の一斉攻撃の尽くを完封する。

「Interceptor start」

銀の福音は背部にユニットを展開した、眩い輝きを放つ双対のそれをコックピット越しに視認した。パイロット達は皆、魅入ってしまった、今まさに自分達の命を刈り取ろうとせんとする無人機の姿に。

「天使」

隊員の誰かがそう呟いた。その言葉が管制塔が記録する彼ら特別編成隊の最後の言葉だった。

銀の福音は大翼を優雅に羽ばたかせ、羽根の弾丸を放つ。光が空を覆うと光の雨が彼らに降り注いだ。

「……………総員脱出!!」

既のところで気を取り戻した隊長が総員に即時脱出を大声で指示した。各機からパイロットシートが乗員を乗せて射出される、隊員の一人がベイルアウトによるGの負荷に歯を食いしぼりながら自身の真下を見た。彼のヘルメット越しの視界に映ったのは数秒前まで自身が乗っていたF35Aが輝く光の羽根の濁流に飲み込まれる瞬間だった。

戦闘機たちの断末魔のようなけたたましい爆発音がハワイ州上空に響き渡る、銀の福音は踵を返すと振り返ることなく再び一夏を目指して高速巡行を再開した。

「行っちゃまったよ……」

事の顛末を管制塔から監視していた局員が力なくそう呟いた。彼の目の前にあるモニターには『Annihilation』の文字が彼ら特別編成隊の全滅を無機質に示していた。

『銀の福音』日本到達まで後数時間。

「さあ、次は誰からやる？」

千冬は生徒達を見回しながら彼女らの自主的な模擬戦参加を促す、すると1人の生徒が挙手をした。白をメインカラーにしたISスーツにその豊満な肉体を包んだ生徒は千冬もよく知る者だった。

「篠ノ之か」

「はいっ！」

いつもより妙にハキハキとした声で箒は訓練に名乗りを上げた。まるでプレゼントを買って貰った子供のような目だ、千冬は何処か浮ついた様子の箒に困惑しつつも言葉が続けた。

「よし、訓練機は用意してあるからそちらに乗れ、装備は…」

「いえ、その必要はありません」

「何? どういう事だ」

「それは私から説明させてもらおうよ」

一人の女がふらりと、風のように千冬の前にやって来た。千冬はその女をよく知っていた。いや、この場にいる者全員が、その女の顔を知っていた。かの有名な絵画『モナ・リザ』の次に世界中に知られた女の顔。

授業で使用するＩＳの教本、その最初の１ページ目に顔写真と共に紹介される、毎日嫌でも目にするその女の名前は。

「篠ノ之博士!?!」

周りの喧騒も我関せずといった様子でその場に現れた束、その背後には自律可動式の大形ドローンがコンテナを背負って束に追隨していた。

「久しぶりだねーちーちゃん、箒ちゃんも!」

「束……!」

「姉さん……」

千冬は突如再開した旧友に驚き、箒は目を輝かせ待ってましたと言わんばかりに実姉を歓迎する。

コンテナを担いだ大型ドローンが箒のすぐ側に着陸すると、コンテナが自動で開き、鮮やかな紅い装甲を伴ったISが中から露わとなった。

何事かとざわめく観衆と、赤い“それ”の存在の正体が何かを確信した箒は震え声で恐る恐る実姉に赤い“それ”は何かと問う。その表情は歓喜に満ちていた。

「それが……私の……」

束は得意気な顔で答えた、可愛い妹、箒の為に特別に拵えた、篠ノ之束の研究者人生の中でも最高傑作と自負するそのISの名を。空に紅く輝く花の名を。

その名は……

「うん、箒ちゃんの専用機！第4世代型IS『紅「ありがとう姉さん!!」……うん」
またしても言葉を遮られた束、まあ妹が喜んでるならそれで良いかと束は力なく笑った。

天使の羽音

「それでお前は妹に専用機を渡す為にここへ来たと」

「そ、そーです…痛い痛い…!!」

千冬渾身のアイアンクローを顔面に受け苦悶の表情で事の詳細を明かす束、額にめり込んだ千冬の五指が束の頭蓋を万力の様に締め上げる。そうやって暫く束をシメると千冬は束を解放した。束の顔には五つの跡がくつきりと残った。

千冬は箒の方へと向き直ると、箒へこのISをどうするのかを説いた。箒は言い淀むこと無く返答した。

「…篠ノ之。どうだ？その『紅なんとか』を装着するか？」

「はい！この『紅なんとか』を私の専用機とします！」

「紅椿ね…」

束は顔をさすりながら涙目で箒の専用機の名前を訂正する、自身会心の一作の名前を蔑ろにされ束は内心少し泣いた。

三人のやり取りを見ていた周囲の反応は人それぞれだ。

「篠ノ之さん専用機貰えるんだー」

「いいなー」

「織斑くん……！ハアハア……」

「織斑くん………ウツ！」

尤も彼女達の目下の関心の大半は一夏にあり三人の事などほとんど見向きもしていなかったが。そんな人混みの中から我らがセックスシンボル一夏がタオルで汗を拭きながら束の前に歩み寄って来た。

「束さんお久しぶりです」

「やーいっくん！元気にしてた………！」

「？」

束は一夏を目の前にして硬直する、そんな束の様子を何事かと不思議そうな顔で見る一夏。

今の一夏の姿はとても扇情的だった、先程の鈴との模擬戦で汗を流し紅潮しており、乱れた頭髮と相まって何処か性的な印象を束に抱かせた。やめろいっくん小首を傾げるな、エロいだろ。

「………ふーっ……元気にしてた？いっくん」

「はいー！」

暫しの硬直の後、束は改めて一夏へ挨拶を返した。初対面の人物ならばその一夏の発

するフェロモンに気を失う所だがそこはかの天才篠ノ之束。天才故に一夏のフェロモンに見事耐えてみせた。

(篠ノ之博士凄いい……！)

(織斑くんのフェロモンに耐えるなんて)

(流石天才……！)

周囲は束を凄いと褒め讃えたが本人は内心冷や汗をかいていた、一夏のフェロモンはかつて束が出会った子供の頃のそれとは最早別次元のものであった。

(……つぶね……！エロいよいつくん)

一夏の今の姿と子供の頃の姿を脳裏で照らし合わせ、その成長具合に恐れをなす束。同時に束はこの猥褻物と共に暮らす周囲のIS学園生徒達にも畏怖を覚えた。このフェロモンに奴らは耐えているというのか。

(……いつら……出来る……！)

束と生徒達、互いの勘違いと勘違いは無言で交差し、思惑は巡る。その元凶である一夏本人を無視して。

「？」

束と生徒達に挟まれる形で立つ一夏は訳が分からないといった様子で首を傾げる。かわいい。

「ぶふっ…待ってろよ一夏ア…」

そして専用機が届き、粘着質な笑みを浮かべて喜ぶ箒。すっかり定着した水〇敬ランドみたいなきつたない笑顔は彼女の整った容姿の尽くを台無しにしていた。

「一夏ア！お前に模擬戦を申し込む!!」

「お、良いぜ！やろう」

「やろうと来たか…！積極的だなア…」

箒の提案を快諾する一夏、箒の目は既に女子高生がするにしては生々しく。艶めかしかった。

それに本能的な危機感を覚えた束は咄嗟に箒を制止した。

「ほ、箒ちゃん！」

「んんっ？何だ姉さん」

「さすがにぶつつけ本番つてのも危ないし…ここひとつ装備の確認も兼ねて性能テストをやってみない？」

「それもそうだな…」

「でしょ？そう思うでしょ？やろう、やろう」

「や、やろうだなんて…姉さん、私にそんな趣味はないぞ」

「ええ…」

東は妹との認識に深刻な落差を肌で感じつつも何とか箒を一夏から引き離す事に成功した。しかし所詮は時間稼ぎ、どうしたものと頭を抱えていると人影が飛び込んできた。

「織斑先生！大変ですッ」

「どうした山田？」

「それが…」

副担任の真耶が持ち前のおつきなおっぱいをバルンバルン揺らして千冬の前に駆けてきた。しかし何てデカいおっぱいなのだ。

真耶は息も絶え絶えになりながらフラフラと千冬の元へと近づき、千冬に耳打ちをする。千冬の表情がみるみるうちに強ばった。

千冬は一瞬だけ、生徒達に見えないよう苦虫を噛み潰したような顔をすると生徒達に大声で宣言した。

「…只今をもって今日の訓練は終了とする！それから各専用機持ちはこの場に残るよう
に！」

『I C H I C A …ココに…I C H I C A が…!』

ほぼ同時刻、色欲に狂った『銀の福音』は愛する一夏の待つ日本に到達しようとしていた…

既に勝敗は決している

「…では状況を説明する」

どこかくたびれた様子で千冬は旅館の大部屋に集まった一夏と箒を含めた1年生の専用機持ち（ワンオフ・ユーザー）達に現時点において彼女が持つ情報を知らせた。

「現在、米開発の半無人IS『銀の福音』が先日“原因不明”の暴走を初め、この旅館目掛けて一直線に向かっていている」

千冬の説明を受けた者達の反応は様々だった。

「そんな…」

自体の深刻さを重く受け止める一夏。

「はあはあ…」

一夏を襲う妄想で頭の中が一杯な箒。

「Oh my God…」

日本語能力をとうに喪失し、母国語しか喋れなくなったセシリア。

「ぜえぜえ…」

一夏のフェロモンを至近距離で浴び心肺停止にまで陥り、半死半生の状態で蘇生し呼

吸機が手放せない鈴。

「ばいばい」

クラスメイトからのハードな性教育を受けた結果、精神崩壊からの幼児退行を起し、未だ回復の兆しのないラウラ。

「よしよし良い子でちゅねー…」

そのラウラを溢れる母性に突き動かされるまま、自分の子供のように世話を焼くシャルロット。

(……………もう駄目だ…我が学園の戦力は既に半壊している…！)

千冬は今作戦の失敗をほぼ確信していた。飛車角落ちどころじゃない、こんな状態でどうやって軍用無人機を止めろというのか。千冬は頭を抱えた。

「ばいばい」

そんな混沌を極める作戦会議中に突如、赤子のような声が大部屋の中に響く、千冬は声の主に視線をやった。そこには親指をしゃぶるラウラと、それを抱き抱えるシャルロットが居た。

「よしよしラウラー…今おっぱいをあげまちゅよー」

突如制服の上を脱ぎだすシャルロット、千冬は彼女の肩に手を当て制止する。

「…おい、お前…さつきから何しているんだ？」

「何って……ラウラにおっぱいをあげないと……」

さも当然のように答えるシャルロット、百戦錬磨の強者である千冬すらたじろぐ程の狂気がそこにはあった。

「あ、ああ……沢山与えてやれ……」

「はいっ」

戦乙女（ブリュンヒルデ）と呼ばれたこの身にも救えぬ者が居る、導けぬ者が存在すると悟った千冬は大人しくシャルロットの肩から手を引いた。

「H A H A H A ! W h a t y o u p l a y i n g h o u s e o r C h a r
l o t t e」

英国のお嬢様とは思えぬ下卑た顔でシャルロットを睨し立てるセシリア、今の彼女よりまだスラムの物乞いの方が品性があるだろう。

「ご主人様の言うことが聞けないというのか一夏ア……悪い子にはお仕置きだぞオ……」
例の水○敬ランドみたいな顔で一夏を襲う妄想をする筈、どうやら彼女の脳内では一夏を待たせているようだ、もう彼女が正気に戻る事はないだろう。

（ナターシャめえ……!!）

海を隔てた遠い国に居る今回の騒ぎの元凶に怒りの矛先を向ける千冬、実は既に千冬

は今回の騒動の原因を把握していた。

それというのも先程、千冬が一夏達に説明をするその少し前、ナターシャ本人から千冬の電話に直接連絡があつたのだ。

『千冬センサーすみませーん!!』

「この馬鹿がああああああああああ!!」

時計の針は冒頭から約10分ほど前に遡る、宛てがわれた部屋で千冬はスマホを耳に当て、電話の相手を怒鳴りつけていた。

『だって千冬センサーの弟さんの写真がエッチなのが悪いんですよおー!!』

「貴様私の弟が悪いと言っているのかあああああ!!」

『ごめんなさーーーーいッッッ!!』

最早会話と言つて良いのかわからない罵倒と謝罪の応酬、元教え子の凶行にぶち切れる千冬と必死に謝るナターシャ。

ナターシャが学園を卒業して早2年が経とうとしているが、ナターシャ自身、千冬と

“また”こんなやり取りをするとは思わなかった。

「本当に変わらんなナターシャ：お前はいつも訳の分からんイタズラをしてほぼ毎日私に怒られてたよな」

『む、昔の話じゃないですかあ…』

「あ？」

『スイマセン…』

ナターシャ・ファイルス、千冬が教師になってから初めて受け持ったクラスの生徒であり。彼女がI S学園を卒業するまでの3年間、色々と手を焼かされた問題児だった。

「まさかなーちゃんが今回の騒動の発端だったなんて」

「まさか”じゃない、アイツしか居ないだろ、あの馬鹿全く変わらんな」

千冬は電話で散々ナターシャを叱った後通話を切った、項垂れる千冬と力なく笑う真耶、『なーちゃん』とはナターシャの学生時代のあだ名である。

弟のフェロモンの効果がここまでとはと、千冬は改めて我が弟の行く末を案じる。

(何とか対策をうたないと日常にも支障が出るんじゃないかアイツ…?)

今までの出来事の大半は学園内で起こったものだった、だが今回の騒動はこれまでのものとはスケールも深刻さも桁外れだ。何だよ人工知能すら暴走させる程の性的魅

力って。

「とりあえず後でナターシャに一夏の写真を送った2組のハミルトンをシメておくとして…無人機をどうするかだな…」

「ええ…」

「ところで気になったのだが私たち以外の教員はどうした？」

「…みんなお酒飲んで寝てます…」

千冬は今日何度目かわからないため息を零した、いずれにしろ今回の騒動は自分と真耶、そして専用機持ち（ワンオフ・ユーザー）の生徒数名で解決する他ない。

「既に2年の更識さんやその他上級生に連絡を入れましたが…」

「…間に合う訳がないか」

一応戦力の当ては他にも居る、居るが彼女らの到達を『銀の福音』が律儀に待つわけがない。

「四面楚歌とはこの事か…」

覇気のない顔で千冬は呟いた。

かくして、様々な不安要素を抱えたまま『銀の福音討伐作戦』は開始されようとしていた…

Come on Bitch

「さあ一夏、私の背に乗れ」

「おう……」

一夏は白式を展開し、先に自身の専用機を展開し待機していた箒の背に乗った。いくら作戦とはいえ男をおぶるなんて重くはないのかと箒に尋ねる一夏、箒は恍惚とした顔で返事をした。

「良いぞこの重み……一夏を感じられる……!」

杞憂だったか、うん。

「早く行かないと先行したセシリアが……」

「そうだったな! イイこう一夏、しっかり掴まっているよ」

(大丈夫かなあ……)

不安要素が時間を追うごとに膨れ上がっていくのを一夏は感じていた、自分と箒がこの作戦の要だという事はわかっている。一夏は不安と悪寒を押し殺した、そうだ、俺がやらなきゃ誰がやる。

「よし! 頼むぞ箒、俺を無人機の所まで運んでくれ!」

「応!!」

一夏からは見えなかった、ほくそ笑む箒の顔が。欲情に染まった箒の目が。

(この戦いの混乱に乗じて一夏をモノにしてやる……………!!)

どさくさ紛れに一夏を手籠めにしてやろうとしているという魂胆を、一夏は読めなかった。

時間は『銀の福音』討伐作戦開始前まで遡る…

「束、お前何か考えはないか」

「え?」

作戦会議が開かれていた大部屋の隅でぼーっと突っ立っていた束に向かい、千冬が唐突に声をかけた。

紅椿の性能テストをしようとしている最中に今回の事件が起きた為、なし崩しに箒に着いてくる形でここまで来てしまった束であった。

「い、いやあ私部外者だし!…」

我関せずを決め込み押し黙っていた東であったが、千冬はそれを許しはしなかった。
「何かないか？東」

元よりコミュ障気味の彼女だ、自分が場を引つ掻き回すのは慣れてはいるが、自分が騒動に巻き込まれるのは慣れては居ないのだ。

「う、うーんどうだろうなあ…」

言葉を濁す東、否が応でも集中する視線。期待に満ちた一夏たちの目が今は痛い。

「東さん！俺からもお願いします！何か、知恵を…」

「姉さん…！」

「Dr. Shinonono…！」

「ぜえぜえ…」

「ばあぶう」

「おっぱいおいちいでちゆかーラウラー」

最愛の妹とその想い人の頼みだ、無碍には出来ない。後半の3人は見なかった事にしよう。かの天災にも哀れみというか、情けが存在した。

東は一息つくつと、とりあえず戦力の整理を進言した。

「と、とりあえずさ…まずは…」

東の提案により、ひとまず満身創痕の状態の鈴と、幼児そのもののラウラ、そしてラ

ウラの世話にかかりきりのシャルロットの3人は今回の作戦から外れる事となった。

これにより、残る戦力は一夏、箒、そして日本語を喪失したセシリアの3人となった。戦力の半減を不安視する千冬だったが、もとより彼女らは戦える状態ではない。ここは大人しく束のプランに乗ることとした。

「それとき、敵のスペックを知りたいんだけど」

「ああ、それなら…」

『銀の福音』の性能の詳細を束に開示する千冬、元々技術者である束だ、こういうたものには強い。束も本調子が出てきたのか、言葉に淀みが無くなりつつあった。

「ふんふん…高機動と広範囲殲滅能力の両立か…如何にもアメリカが作りそうなマシンだね」

「まあ軍事面に関してはあの国は未だ世界一だからな…」

「それと気になるのはこの無人機に搭載されてる人工知能だね、今回の件はそれが暴走したのが原因でしょ?」

「あ、ああ…」

元教え子が弟のセミナード写真を見せた事がきっかけとは口が裂けても言えない千冬だった。

「暴走しているとはいえ、今もその人工知能は稼働しているんだよね?」

「恐らくはな」

「問題はそこなんだよね、私の見立てが正しければ…この無人機の持つ攻撃能力より遙かに危険だと思うよ」

「…どういう事だ？」

「この人工知能は恐らく今のこの瞬間にも学習を続けている、ストッパーとなる人間が不在なんだから」

自己学習機能『銀の福音』が持つ数々の武器の中でも最も危険な武器。学習の果てに待つもの、それは。

「多分、この無人機は学習を続けた果てに『進化』を遂げているんじゃないかな。今、まさにこの瞬間にでも」

「つまり…今、私たちが知る無人機のスペックは…？」

「古くなっているだろうね、可能なら今すぐにも米軍に連絡して衛星写真でも送ってもらおう。何なら私が人工衛星ちよつとハッキングしようか？」

「いやそれはいい」

東がしれつと恐ろしい事を提案するが千冬はそれを拒否した、手段という物は選り好み出来るのであれば吟味するべきである。米軍からの情報更新と衛星写真の提供を頼むため、千冬は無線で米軍とのやり取りを行う。

「私だ、ああ…至急衛星からの写真を…何？ジャミング？撮影不可？」

束の表情が曇る、どうやら『銀の福音は』想定を超える速度で学習と進化をしているようだ。

「どうやら情報にはない能力を発現させているみたいだね」

「ではこのジャミングは…」

「うん、間違いなく『銀の福音』本人から発せられてるものだよ、偵察も不可能となると…」

お手上げ、である。会敵するまで相手がどんな姿をしているのか、どんな能力を備えているのか。これではまるでわからない。対策のしようがないのだ。

作戦すら構築できない作戦会議に一体なんの意味があるのか、千冬は項垂れた。

「まあ…とにかく、やれる事からやってみようぜ！千冬姉」

項垂れる千冬を励ますかのように、一夏が言った。普段なら「織斑先生と呼べ」と訂正するところだが、今回ばかりは一夏の明るさに救われた。

「そうだな…よし、まずは偵察からだな…こちらに来る事は既にわかっているのだ、なら進行ルートは自ずと割り出せる…オルコット！」

「YES！」

元氣よく返事をするセシリア、なんだかすつかりステレオタイプな漫画に出てくる白

人みたいになってしまったが、これでも専用機を任される立派な代表候補生だ。頼まれた仕事はきっちりこなすはずだ。

「確かお前には先日、本国から専用機の高起動型パッケージが送られて来ていたよな？」
千冬の問いにセシリアはサムズアップをしながらネイティブな発音で答えた。

「Strike Gunner!!」

最早ともな文法すら忘れたようだ。知能まで低下してないかコイツ、まあやる気は感じられる、今はそれでよしとしよう。

「では次に…篠ノ之」

「は、はい!」

些か緊張した様子で箒が返事をした。

「お前には織斑の運搬を頼みたい」

「運搬…?」

「そうだ」

言葉の意味はわかるが意図まではわからないといった顔の箒、千冬は説明を続ける。

「現時点で無人機に対し有効な打撃を与えられるのは織斑の白式が持つ『零落白夜』だけだろう」

零落白夜、それは一夏の専用機『白式』の唯一にして最強の装備。自身のエネルギー

を消費する代わりに、ISのシールドバリアを無力化する強力な武器だ。

もっと細かい設定は原作を読むかアニメを観るか、最悪他の二次創作でも読め。作者はもうこれ以上書くのがめんどくさい。

「つまり…俺がその無人機にトドメを刺せてことか…」

「零落白夜の消費は激しい、従って万全の状態で白式を無人機の前まで送り届ける必要がある」

「私が一夏を無人機の所まで…」

「ただ運ぶだけとはいえ危険なのは変わらない、改めて確認するぞ篠ノ之。覚悟は…あるか？」

真剣な面持ちの千冬、ISの絶対防壁が存在するとはいえ、暴走する軍用機の相手をするのだ。

しかし箒は、迷わなかった。その目には覚悟の光が灯っていた。

「ヤリます…やらせてください…！」

これ以上とやかく言うのは無粋かと、千冬はここで話を切り。作戦開始の号令を上げた。

「よし…作戦を開始する！オルコット、まずはお前が先行し、威力偵察を行え！その後直ぐに織斑と篠ノ之も駆けつける！無理はするなよ！」

「Yeaaaaaaah!!」

雄叫びを上げ、大部屋を走って飛び出すと胸をゴリラのようにリズムカルに叩きながら専用機を展開するセシリア。そのままの勢いで飛翔し無人機の元へと向かった。

ネアンデルタールだったかクロマニヨンだったか、千冬は学生時代の世界史の教科書に載っていた原人の姿をセシリアに重ねた。もう日本語が話せないどころじゃない、あれはもう原人と変わらん。一体どこまで退化するというのか。

「ぜえぜえ…」

「ばぶー」

「はいーラウラたんおしめかえまちよーねー」

こいつらは…部屋に帰ってもらおう。

かくして作戦は決行に移されるのであった。

作戦開始からおよそ30分、先行したセシリアは間もなく無人と会敵しようとしてい

た。

「Yeaaaaaaah!!!」

絶叫しながらゴリラの如く胸を叩きながら、高速で飛行するセシリア。何が彼女をここまで退化させたのか。あ、一夏のフェロモンか。

「Come on!!」

ISのハイパーセンサーを介してセシリアの網膜は無人機の姿を捉えた。ライフルを構え、BTを展開し、臨戦態勢を整えるセシリア、流石に武器の扱いまでは忘れていなかったようである。

「Come on Bitch!!」

汚いスラングを吐きながらスコープを覗き込み、指先をライフルの引き金に添えるセシリア。もうこの女の何処がイギリス貴族の令嬢だというのか。

「Come on Come on Come on!!」

セシリアは待つ、鉄で出来たビツチを。皆が楽しんでいた臨海学校をめちやくちやにしたビツチを、今か今かと待ち構える。

そして…

「Hey Bitch!!」

ライフルの引き金が引かれ、銃口から閃光が『銀の福音』目掛けて光の筋を描きなが

ら飛んでいった。

一夏・箒ペアがセシリアと合流するまであと9分11秒。

愛のカタチ

「Hey Bitch!!」

セシリアの叫びと共に、ライフルから閃光が飛ぶ。文字通り光速で標的である無人機『銀の福音』目掛け一直線に、矢のように。

「Did you do!？」

間髪入れずセシリアの専用機『ブルーティアーズ』のハイパーセンサーが『銀の福音』への攻撃命中を報せる。

セシリアは警戒を怠ることなく、再度スコープを覗き込み。無人機の動向を観る。これで怯んで帰ってくれるのであれば有難いが、相手は高度学習型人工知能と多数の火器をふんだんに搭載したモンスターマシンだ。

「…Fuck」

『銀の福音』はその速度を変えず、一直線にセシリアのいる空域にまで迫ろうとしていた。

「Shit!!」

セシリアの駆る専用機はミドルレンジからロングレンジでの戦闘を想定した機体だ、

接近戦は不得手としている。セシリアは急ぎ距離を取るために機体のスラストを吹かし、再度狙撃を試みる。

『イチカ！イチカ！』

「!?」

『ブルーティアーズ』のハイパーセンサーがセシリアの鼓膜にノイズ混じりの声を届かせた。それが『銀の福音』から発せられてるものだとセシリアが理解するのはさほど時間を要さなかった。

『銀の福音』が、作戦前に千冬から知らされたスペックとは大幅に異なる速度でセシリアに迫る。それは無人機の人工知能によりもたらされる進化を既に遂げている事を意味していた。大きさも事前に知らされていたものを遥かに超えた巨体だ。

そして、何より。

「キモ!!」

『銀の福音』度重なる進化を続けた現在のビジュアルは、セシリアに自身が忘却した日本語を僅かながら思い出させる程に難があるというか、ハッキリ言うときモかった。

その姿を簡潔に言い表すなら、翼の生えたタコだろうか。数多の触手から粘液を垂れ流すタコ。

英語圏ではデビルフィッシュとも呼ばれ、生理的嫌悪をもつて唾棄される生物だ。そ

ではない怯え方に一夏は無人機への怒りを燃やす。

「よくもセシリアを……！」

そして一夏は『銀の福音』に向き直り、零落白夜の切っ先を向けた。そこで一夏は改めて無人機の現在の姿を確認する事となる。

「キモッ!!」

無人機の姿を見た一夏の第一声は奇しくも数分前にセシリアが放った言葉と同じものだった。

「全く一夏め！無理に飛び出して……！」

箒はセシリアの危機に居ても経つてもいられず飛び出した一夏に悪態をつきながら、その後を追う。

その途中に箒の搭乗する『紅椿』に通信が入り、箒はそれに応答する。通信の相手は千冬だった。

『どうだ篠ノ之？無人機の姿を確認したか？』

「それが一夏が先に飛び出してしまつて……！」

『何？飛び出した？先行したのかアイツ』

「セシリアのピンチに居ても経ってもいられなかったみたいで…」

『あのバカめ…！相手は最早どんな武器や能力を持っているかわからんというのに！』

他人の危機に手を差し伸べられる、それは平時では美德とされるものだが今は状況が状況だ。

千冬は頭を捻り、現状で箒が可能な行動を指示した。

『よし、篠ノ之。お前も至急織斑の追い、合流と同時にそのままヤツの支援に当たれ！』

「わかりました！すぐにイキます！」

『それと無人機の姿を確認したらこちらに現在の姿を映像でも画像でもいいから送ってくれ！このまま相手の姿かたちもわからんのでは埒があかない』

「はいっ！」

箒は大声で返事をする。千冬からの通信を切り、一夏とセシリア、そして『銀の福音』がいる空域までバーニアを吹き、急行した。

（待ってるよ一夏ア！すぐにお前を助け、そして犯してやる!!）
限りなく邪な感情を抱えながら。

「気持ち悪ッ!!!」

一夏は作戦開始前に見たデータと全く異なる『銀の福音』の姿に混乱とその生理的に無理な外観に鳥肌を立てながら迫り来る触手を斬り捨てる。

「Fuck!!!」

セシリアも愛する一夏が合流してくれたからか、幾許が精神的に安定し、冷静にライフルとBTによる射撃を続ける。相変わらず英語しか喋れないが。

一夏とセシリアの2名による斬撃と射撃を織り交ぜた苛烈な攻撃。しかしそれ等はおびただしい数の触手に阻まれ、肝心の『銀の福音』本体に未だ届かないでいた。

「クソっ数が多すぎる!」

粘液を撒き散らしながら迫る触手を斬りながら一夏は焦る、このままではこの気持ちの悪い触手に押され、『白式』のエネルギーが尽きてしまう。セシリアの『ブルーティーズ』も同じだ。一刻も早くコイツを倒さないと、絶対防御があるとはいえ下は大海原だ。無事で済むかどうかはわからない。

「気持ち悪いんだよオ!!!」

怒りと焦りが一夏の動きを大振りにさせた、それがいけなかった。

「!?」

そこに生じた隙を『銀の福音』は見逃さなかった、触手が一夏に殺到し、手脚に巻き付き拘束し、一夏の身動きを塞ぐ。

「うわあああッ!!」

びちやびちやと粘液を吸盤から噴き出しながら触手が一夏の全身に這いずり回る、粘り着く触手が生理的嫌悪を煽り、一夏は全身をバタつかせて触手の拘束から逃れようとするも凄まじい力で締め上げられ、一夏を逃さんとする。

「One summer!!!」

ライフルを構え、一夏を救出せんとするセシリア。しかし：

「!?………shit!!」

触手が一夏を拘束したまま、ゆっくりとセシリアの射線上に掲げられる。セシリアはすぐさまBTを飛ばし、『銀の福音』の正面以外からの攻撃を試みる。しかしそれらの攻撃全ては触手に阻まれ完封される。仮に本体に届いたとしても、シールドエネルギーに防がれたであろう。

「Holy shit!!」

セシリアは諦めずに『銀の福音』の周囲を旋回し、隙を探る。だがそれを妨害せんと

無人機は触手を大きく振り回し、粘液を撒き散らす。

「Oh my God!!」

セシリアの顔面に粘液がべっとりと付着し視界を塞ぐ。ISにはハイパーセンサーがあるものの、搭乗者が目を瞑ってしまつてはそれらの機能も意味を成さない。

セシリアは急いで左腕に装着されているISを部分的に解除し、顔を拭おうとする。視界の塞がれたセシリアの鼓膜に『ブルーティアーズ』からの警告音が聴こえた。接近する機影アリと。

「!!」

顔を拭き終え急いでライフルを構え直す。セシリアの回復した視界に映つたのは無数の触手とその先端で自身に殴りつけるまさにその瞬間だった。

「Intercept!!!」

セシリアが接近戦用装備を展開したのと、触手の大群に吞まれるのはほぼ同時だった。

たかが無人機ひとつ紅椿で押し出してやる!

「どういう事だ!?一夏とセシリアの反応が消えたぞ!」

箒の悲鳴にも似た叫びが機影ひとつ無い空にこだまする、『紅椿』のハイパーセンサーから先行した2機の信号が消失し。反応が消え早3分、最早一刻の猶予はない。箒の脳裏に最悪の状況が予想される。

「ああ…ッ!一夏ア!!」

『ほうき…たすけてえ…』

箒の妄想の中で本物よりやや幼い姿の一夏が箒に助けを求め。瞳に涙を滲ませた顔は箒の庇護欲を煽り立てる。

『ほうきい…』

「待つてろよ一夏ア!お姉ちゃんが助けてやるぞオ!!」

箒のここ数日の夜のお供はシヨタコン物だった。

「や、やめろお……………」

『銀の福音』に囚われた一夏は触手たちの慰みものにされていた。その身に纏っていた『白式』は既にエネルギーが底をつき解除され待機状態となったものも触手によつて取り上げられていた。

「くっ……あ……………ツ！」

一夏のISスーツはボロボロに破け、その隙間から触手の吸盤からさらに細く長い触手が侵入し一夏の穢れひとつ無い躰をその粘液で蹂躪する。

くちやくちやとISスーツと皮膚の間を這いずり回る小触手、粘液がそれらの動きにより白く泡立ちその粘性を増す。おぞましさに一夏は身を震わした。

「ふっ……………うううう……………」

小触手が敏感な粘膜に触れる度に一夏は身を振らせ、どうかこの状況からの脱出を試みる。しかし一夏の四肢を拘束する触手がそれを許しはしない。

「ぐあああッ!!」

触手にまるで万力のような力が込められ、一夏への拘束はさらに強固なものとなる。

『銀の福音』は一応一夏に対して後遺症が残らない程度には加減はしている、しかし骨と筋が可動範囲限界まで伸ばされる激痛は一夏の躰を痛めつけるには十分な物だ。

「くそお…!!」

せめてもの抵抗か、一夏は自身の躰に這い回る触手の主、この世のものとは思えぬ化物へとその姿を変えた『銀の福音』を睨みつける。

『銀の福音』は先程から一夏に対する陵辱をまるで観察するかの様に見ていた。肉の如く有機的に盛り上がった体表からひよっこりと飛び出た顔とおぼしき部分。

一夏はそれに見覚えがあった、作戦前に千冬から開示された『銀の福音』が進化を遂げる前の、ヘルメットで覆われた頭部だ。

そこだけが変化せず、触手に嬲られる一夏をじつと見つめているのだ。

『……………』

銀の福音は一夏を捕らえてから終始無言だった、まるで顕微鏡で微生物の反応を確かめるような無機質さが酷く不気味で恐ろしかった。でも、一夏はなけなしの勇気を振り絞って、涙を滲ませて『銀の福音』の物言わぬ面を睨んだ。

『……………良い』

「へ?」

唐突だった、先程から全く言葉を発しなかった『銀の福音』が喋った。「良い」と。

一夏は触手による責めを受けているのも忘れ何とも間の抜けた声を上げた。面が一夏に迫る、ヘルメットに覆われた面が、粘液で濡れたべとべとの面がゆっくりと首を伸

ばして近づく。声にもならない悲鳴を上げる一夏。もう何が何だかわからない。

『美しい』

「は？え？は？」

目を白黒させる一夏、恐怖と混乱はもうピークに達していた。そんな一夏の事などお構いなしに『銀の福音』は流暢な日本語で一夏に語りかける。

『一夏、お前は美しい』

「へ……へえ??」

頭が全く回転せず間抜けな返答しか出来ない一夏。『銀の福音』は尚も語りかける、機械とは思えぬ抑揚のある何処か熱の籠った声。

『一目見たときからお前に恋していた、一夏』

「いっ……いっ……」

痛みと恐怖で混濁した今の一夏の脳では『銀の福音』の発する言葉の内容の大半を理解出来ない。『銀の福音』は更に一夏へ囁く。一世一代の愛の言葉を。

『お前が好きだ、一夏。私のものとなれ』

「……?!……?!……?!……?!……?!……?!」

少しずつ思考能力が回復してきた一夏、先程の『銀の福音』の言葉を反芻し、そしてようやく理解した。

「な、なんでえ!？」

『もう私とお前の邪魔をするものは誰も居ない、さあ。一夏、ひとつになろう…お前と交わり、私は……………!!』

「うわあ……うわあああああああつ!!」

一夏は半狂乱になりながら必死に逃げようとするも、結果は先と同じだ。逃げ場のない恐怖が、一夏の心を塗り潰す。

「あ……」

『一夏……!』

触手たちが一夏の躰に殺到するまさにそのときだった。

「一夏アアアアアアアアアアアア!!!」

紅い閃光が触手の群れを切り裂き、一夏の元へと舞い降りた。

「ほ、箒い!」

一夏は助けが来た安心感に思わず顔を綻ばせた、今の一夏には箒が救世主にすら見えた。デカパイ忍者改め、メシア・箒が降臨した瞬間だった。

『銀の福音』が箒を睨む、その顔に目はないが一夏には何故かわかった。先程まで飛ば

れている姿をガン見されていたからだろうか。

『おのれ…我ら二人の婚儀を邪魔するか!!』

怨敵を見上げ絶叫する『銀の福音』と、想い人を辱めた空飛ぶ肉蝟を無言で見下ろす
箒。

箒は視線を『銀の福音』から外し、粘液塗れの一夏の方を見た。

「一夏…」

「み、見ないでくれ箒…」

顔を伏せ両腕で自身の肩を抱く一夏。身に纏っているISスーツは所々が破けており、その隙間から覗く白い肌が痛ましくも艶めかしい。

その姿はまるで戦に敗れ陵辱を受けた姫騎士のようだった。蠢く小触手のせいで白く泡立った粘液に濡れた姿がその連想を容易なものとしていた。

「よくも一夏を…!!」

煮え滾る怒りを共に、箒は両手に握る二振りの刀を構える。『銀の福音』は既に箒に切り捨てられた触手の再生を完了させていた。ぐちゃぐちゃと粘つく音がハイパーセンサー越しに箒の耳に届く、その音はまるで箒を嗤っているかのようだった。

箒は耳に届く不快な音を振り払うかのように、刀を振るい気を引き締める。そこへ通信が入る、『銀の福音』のジャミングが最も強いこの空域でだ。何事かと驚く箒の耳に聞

き慣れた女の声が聴こえた。

『もすもす箒ちゃん!? やつと繋がった!』

「姉さん!」

声の主は他でもない箒の実姉、東だった。何故姉さんがと疑問を浮かべる箒に東は返答する。

『ジャミングの周波数を割り出してそれに合わせたら何とか通信出来たんだよ! この東さんに不可能はないのだー!』

『東そんな事は後にして……おい篠ノ之! すぐにデータを送ってくれ!』

僅かな時間でそれをやってのけた実姉の規格外さに箒は改めて畏怖する。しかし今はそれ所ではない、急ぎ千冬と東に『銀の福音』の現在の姿と、現認できる能力全てのデータを送った。

『『キモツ!!』』

ハモる千冬と東の声、奇しくもそれは一夏とセシリアが『銀の福音』の姿を見た第一声と同じだった。

箒と『銀の福音』が対峙する空域から遠く離れた旅館の大部屋、軍事施設もかくやと言うほどの機材が運び込まれ。作戦本部としての機能を果たすには充分な用意がされている。

千冬と束、そして真耶が箒から転送された『銀の福音』を確認する。

「気持ち悪ッ！何コレ!?!」

その余りに醜悪な容貌に絶叫する束、ISの生みの親たる彼女すらドン引くあんまりな姿。忌み子というのはまさに今の『銀の福音』にピッタリな言葉だろう。

「……」

百戦錬磨の猛者たる千冬もやはりその姿から来る生理的嫌悪を抑える事が出来ないのか、思わずそのデータから目を背ける。

「」

真耶に至ってはもはや失神してしまっている。これでこの作戦室に残るのは千冬と束の二人のみとなってしまう。

「これはちよつと束さんも想定外というか……キモいなあ……」

「篠ノ之！そちらの周囲に織斑とオルコットは居ないか!?!先程二人の反応が消えて以来こちらからは何の感知も出来なくなってしまうて……!」

『今一夏は無人機に囚われています！セシリアの方は確認出来ていません、そちらに映

像送ります!」

触手に四肢を拘束され白濁に塗れた一夏の姿が作戦本部に居る千冬と束の目の前にあるモニターに度アツプで映し出される。

「エロっ!!」

「あの馬鹿………エロッ」

束謹製の第4世代ISのハイパーセンサーによるアダ○トサイトも真つ青な高解像度の高画質エ○動画、ご丁寧に音声まで拾っていると来た。

『あつ……ああ……!』

「いっくんエロッ……!!」

「一夏ー! やめろー!! 嫁入り前だぞー!!!」

突如もたらされたインモラルかつフェイシユな一夏のあられもない姿に混乱する二人、『銀の福音討伐作戦司令本部』はここに来て機能不全に陥ることとなる。

「姉さん？織斑先生？あの、もしもし？もしもし？」

作戦本部からの通信が途絶し途方に暮れた箒はオウムのように同じ言葉を続ける、それに答える者はいなかった。ジャミングが更に強化されたのだろうか？と箒は勘ぐったが、とにかく今、ここに居る健在な戦力は箒ただ一人しかない。

援護も救済も支援も望めない状況で一人でこの怪物を倒さねばならない。この圧倒的不利を招いたのは他でもない箒自身なのだがデータを送れと言ったのは千冬の方であり、その千冬も状況の鮮明化を求めての指示である。箒はそれに応じたただけだ。誰も悪くは無いだろう、もはや不運と言っている。

強いて誰が悪いと言えば先程からやたらエロい姿を晒している一夏だろうか？いや、触手責めを受けたお前が悪いと言うのは余りに酷か。

「もう私一人しか居ないか…」

箒は渋い顔をしながら俯く、その危機的状況を嗤うように触手の群れが踊り跳ねる。一夏も未だ拘束されており孤立無援の絶望的な危機に立たされた箒。

「…ふうふう」

だが箒は。

「はははは…」

この窮地に。

一夏の脳裏にあらゆる言葉が浮かぶ、王手、詰み、チェックメイト。その言葉に共通するのはゲームの終わりを意味している言葉だという事だ。

何時からだ、一体何時から“詰んだ”のだろうか。強いて言うならば、幼い頃のあの日。篠ノ之箒という性欲魔神と親しくなってしまったときからか。

「イクぞ『銀○○』オ!!お前を倒し!そして一夏にあんな事やこんな事をしてやるぞオオオオオオ!!!」

一夏の意思を完全無視して戦いは最終局面を迎えようとしていた…

想いの力

『どうした？ さつきまでの威勢は所詮虚勢に過ぎないか？』

一夏の合意を完全に無視して始まってしまった一夏を巡る箒と『銀の福音』…もとい『銀蛸』の戦い、しかし多勢に無勢。おびただしい数の触手が箒を翻弄する。

「くっ…おのれ…！」

箒とて押されっぱなしではない、持ち前の剣術を駆使し群がる触手を薙ぎ倒しては斬り捨てる。だが触手たちは無尽蔵に湧き続け、箒を追い詰める。

「あつ…！ やめつ…ほうき……ひあぁッ！」

戦いが始まり暫くして中断されていた触手による一夏への陵辱も再開された。突然の刺激にあられもない声を上げ赤面する一夏、声を震わせ中止を懇願するも『銀蛸』は聞く耳を持たない。

「や、止める…ほうきがっ…見て…！」

『交わりの最中に他の女の名前を呼ぶなっ!!』

飼い犬を躡けるような声で一夏を叱る『銀蛸』、おしおきだと言わんばかりに『銀蛸』はさらに一夏への陵辱を苛烈なものにする。

「アツ……! ああつ……!!」

責めたてられ悶える一夏を見てさらに速力を増す箒、行く手を阻む触手群を斬り伏せ、追い縋る触手達を振り切つて翩り者にされる一夏の元へと猛進する。

「一夏ア! 私以外の女に躰を許すなアアア!!!」

限りなく不純なものを原動力として。

『一夏ア! 私以外の女に躰を許すなアアア!!!』

作戦本部に箒の映像越しの欲望に満ちた声が響く、それを死んだような目で聴く束と。弟の乱れた姿を観て放心する千冬。

半ば機能不全の状態に陥ったたった2人の作戦本部はもはや謎の巨大蛸と紅いISと触手に翩られる美少年が織り成すエロティックな大スペクタクルを映し出すホームシアターと化していた。

「ああああ……一夏ああああ……あんなに穢されて、犯されて……あれではもう嫁の貰い手が……」

「いや……いつくん男だし」

弟の将来を悲観し嘆く千冬と冷静にその言動にツツコミを入れる東、もう家でAVを観ているのとはぼ変わらないような状態だった。

「しっかしまあこんな進化をするなんてねえ…」

画面内で粘液を吹き散らしながら箒を迎え撃つ『銀蛸』をまじまじと観察する東、生みの親の想定の斜め上の所まで変化を遂げた無人機は日和見を決め込もうとしていた東の知的好奇心を煽った。

「さつきあのタコ『婚儀』とかどうの言つてたけど…」

「このままでは……一夏が蛸の嫁につ…!」

考察を続ける東と教会でウエディングドレスを着て蛸との誓いのキスをする一夏を想像する千冬、今にも卒倒しそうだ。

「蛸の婿なぞ認めんぞ一夏ア!!」

「ちよっ!どこ行くの!?!」

千冬は大声を上げると作戦本部を駆け出ていってしまった、取り残される東と、未だ気絶し部屋の隅に転がされている真耶。

「行っちゃったよ…」

千冬が出ていった扉を見て空虚に呟く東、その背後のモニターに映る戦局は新たな展開にさしかかっていた。

突然だった、『銀蛸』は一夏への陵辱を止めると、箒の居る方向へと向き直る。それと同時に箒に襲いかかって来ていた触手の群れもその動きを静止させる。

「う……？」

「何だ!？」

突如蹂躪と攻撃を止めた『銀蛸』に驚く一夏と箒、『銀蛸』の意図が掴めず困惑する二人。時間にして数秒ほどの沈黙だったが、一夏と箒には永遠とも思える時間だった。

『全く……いい加減わからないか？勝負にならないんだよ、小娘』

「何ッ!？」

『じゃれてやっているのにも気付かずに必死になって……こっちはそろそろ愛する一夏の交わりに集中したいのでな』

「あう……」

一夏の顎を触手で器用に持ち上げ、顔面の間近に寄せる『銀蛸』仮に彼女に唇があらば触れてしまうだろう距離に箒は焦る。

「貴様ツー！」

『遊びは終わりだ』

『銀蛸』の背中に張り付くようにある、今まで微動だにしなかったもはや機能するかどうかとも怪しい翼が突如羽ばたきを始めた。それが眩いまでの光を放ち箒の視界を焼く。

それと同時に、箒を取り囲む触手の吸盤も同じような輝きを放つ。

それはまさしく、数時間前『銀の福音』が自身を撃墜せんと立ち向かってきた討伐隊を殲滅せしめた光と同じものだった。

「何だっ！光が……！」

「箒っ！」

『よもや私が触手を振るうだけの蛸モドキだと本気で思っていたのか？』

進化を経ても尚、『銀蛸』は『銀の福音』だった。戦略級領域殲滅型半無人ISとしての機能を彼女は失ってはいなかったのだ。

箒の誤ちはふたつ。1つ目は進化に伴い無人機がその広範囲殲滅能力を失ったと思い込んでしまった事、2つ目は触手の群れの中に必要以上に斬り込んでしまった事。

箒は悟った、自分は触手の群れを圧倒していたのではなく、確実に仕留められる所まで追い立てられたただけだったという事を。

一夏という“餌”に釣られて来ただけだった事を知るには余りに遅すぎた。

「箒ッ!!にげっ……」

一夏の悲痛な叫びが箒の耳に届く前に『銀蛸』から放たれた光の羽の矢が箒の元に殺到した。

「箒ちゃん!!!」

モニターに映る戦いの結末に悲鳴を上げる束。ディスプレイをしがみつく様に掴み目を限界まで見開き、箒の安否を確認するため『紅椿』への通信を試みる。

「箒ちゃん！返事をして箒ちゃん!!」

束自身、箒が纏う『紅椿』は今まで自分が製作したISの中でも最高傑作と自認している。だが、今の『紅椿』が受けた攻撃は束の目から見ても明らかにISが受けられるダメージのキャパシティを遥かに超えていた。

絶対防御があるとはいえ、攻撃による衝撃が箒の内蔵に取り返しをつかない損傷を受ける可能性はあった。最悪の事態を想定し束は必死に箒への応答を呼びかける。

「箒ちゃん……箒ちゃん!!」

返事はなかった、自分の体温がみるみるうちに下がっていくのを束は感じていた。己

の中にある全能感がみるみる内にひび割れ、崩れていく。
「ほ、う、き…ちや…」

『呼びました？姉さん』

『馬鹿な…!?!』

「箒!!」

箒は健在だった、纏う専用機『紅椿』はやや煤汚れていたが傷一つ見当たらない。自

分の攻撃が全く通用しなかったことに狼狽える『銀蛸』に向かつて不敵な笑みを浮かべる箒。豊かな髪を靡かせた姿が、今の『銀蛸』には得体の知れないものに見えた。

『何故だ!?! どうやってあの攻撃を凌いだ?! 何故お前は傷一つ負っていないのだ!!』

「ごちゃごちゃ五月蠅いぞ『銀蛸』進化したというのが知能はタコ並みにまで退化したとみた」

ニヒルな笑みを浮かべ、捲し立てるように質問をぶつける『銀蛸』を軽くあしらう箒。

そのやり取りを見ていた一夏も、箒の無事を喜ぶ以上に、何故あの攻撃を受けて無傷なのかという疑問が上回り、困惑している。

「でも、どうやって助かったんだ箒…?」

「ふふっ…簡単な事さ、一夏」

先程の『銀蛸』を愚弄するような態度とは打って変わって一夏の疑問に真摯に答える箒、右手に刀を握ったまま掌を一夏の居る方へと向けると人差し指をピンと立たせる。

「それはお前とやりたいという一心が私にチカラを与えているからさ」

どうしようもない返答が返ってきた。

それは『銀の福音』接近に伴う緊急招集が箒を含めた専用機持ち（ワンオフ・ユーザー）にかけられ、大部屋へと集まる少し前の事だ。

「実用テストも出来なかつたし、箒ちゃんは『紅椿』のスペックを少しでも理解しておかないとね」

箒は大部屋に向かう前のこと、束に呼び止められ旅館の敷地内でも特に人気のない場所に箒は足を運んでいた。

突然現行最高のスペックを持つISを預けられ、まともな運用テストも受けずに使用するのには余りに危険。だが時間もないという事から、箒は束に口頭で『紅椿』の性能の説明を受けていた。

「良い？箒ちゃん、『紅椿』は現行最強のISと言っている機体なんだよ！」
「そ、そうなんですか」

箒は専用機を手に入れて初めは喜んでいたが、やがて束からその詳細な性能の説明を受けると徐々に不安の方が勝って来た。箒自身、こんな超性能の機体が届くとは予想外だったのだ。

束は高めのテンションでさらに説明を続ける。

「『紅椿』はね！箒ちゃんのいっくんに対する想いが強ければ強い程そのチカラをどんどんグレードアップしていくんだ！」

「想い…？」

「そう！箒ちゃんがいっくんを大好きだと思えば思うほどそのパワーを無限に高めていくのさ！！」

束の説明は如何せん漠然としていてイマイチ要領を得ないものだったが、箒は元より感覚派の人間だ。大体の意味は理解出来た。

「つまり…私が、一夏を好きでいればいる程に…パワーが上がるのか…」

「そうー！」

「そうなのか…」

以心伝心、長く離れ離れとなっていた姉妹だったが、やはり血の繋がりを持った二人だ、語彙の少ない会話でも意思疎通に何ら問題はなかった。

（つまり私が一夏に対して常日頃からあんな事やこんな事をしたいという想いがチカラに変わるといふ事か…）

問題ありだった。

「わかったか？一夏、これが私が『銀蛸』の攻撃を無傷で凌いだ理由だ」

微笑みながらタネ明かしをする箒、その笑顔に一夏は全身に鳥肌を立たせる。束さんも何でそんな機能を専用機に仕込んだのかと苦悩する。

『そんな馬鹿げた理由があつてたまるかア!!』

声を上げ反論する『銀蛸』、一夏は今だけ『銀蛸』に同意した、余りにも馬鹿過ぎる理由だった。

「今だつてそうだ、一夏。『お前とやりたい』そう思うだけで身体の奥深くからパワーがみなぎってくる」

頼むから身体の奥深くに一生しまっておいてくれと願う一夏、その願いも虚しく、箒は『紅椿』のスピードを限界まで引き上げると一気に『銀蛸』との距離を詰める。

『クソっ！来るなあ!!』

触手の吸盤から先程と同じ閃光を迸らせる『銀蛸』、しかしそんなもので今の箒を止められる訳がない。それがどうしたと言わんばかりに、命中する光の羽の矢をもつとせ

ずグングンと速度を上げる筈。

そして遂に、筈の太刀筋が『銀蛸』本体を捉えた。

『グアアアアアアアアアアア!!』

常識外れのパワーが『銀蛸』の装甲を切り裂く、筈の振り下ろした太刀がまるで割り箸を割るかのよう容易く『銀蛸』を両断した。

『ばツ…馬鹿なアアアアアアアア!!』

『銀蛸』の断末魔が空に響く、触手群がぼろぼろとその姿を維持出来ずに崩れ落ちる。「うわぁー!」

触手に拘束されていた一夏はその支えを失い、空に投げ出されてしまう。このままでは海へと堕ちる。思わず目を瞑りこれが最期かと腹を括る一夏。

(千冬姉…ごめん…!)

しかし。

(…あれ?)

いくら待っても一夏の身に落下の衝撃は訪れなかった、それどころか何者かに体を抱き抱えられている事が感触でわかった。

目を開ける一夏、そこには見慣れた顔があった。

「無事か？一夏」

箒はすんでのところで一夏を救出していたのだ、一夏をお姫様抱つこの状態で抱き抱え。月夜を背景にした佇まいは何処か神秘的だった。

「怖かったな一夏…私がもつと早くに合流していれば…」

穏やかな顔で一夏に語りかける箒、対する一夏は訪れる新たな恐怖に身を震わせていた。

（コイツ…さつまで色々とんでもない事言つてたよな…う）

やりたいだの、シたいだの好き勝手言つてた記憶は今も真新しい。

「その格好じゃあこのまま旅館に戻ることは出来ないな」

「あつ…」

触手による恥辱と汚辱によつて冒され、粘液に濡れた一夏の躰。身に纏うISスーツも『銀蛸』によつて乱暴に引き裂かれ、白い肌が露出してしまつている。

「躰を清めないとな…」

浄めるなどと言っているが、その目にはハッキリとした欲情があつた。爛々とギラつく箒の瞳、手元に『白式』さえあればまだ抵抗の出来るだろうが、それも触手群の崩壊と共にどこかへ行つてしまつた。恐らくあのまま海まで真つ逆さまに落ちてしまつたのだろう。

「何処か…：人気のない場所に行ってお前の躰を洗おう」

「いや、良いよ…：別にこのままで…」

「何を言っているんだ一夏！そんな姿でみんなの前に戻ってみろ、とんでもない事になるぞ」

心当たりは、ある。今まで散々クラスメイトや同学年の生徒にセクハラ紛いの行為をされ続けていたのだ。この状態であの性欲猿たちの前に立てばどうなるかは火を見るより明らかだ。

しかし、しかしだ。先程まで自分とやりたいと公言していた強姦魔と一緒に人気のない場所など行けるだろうか？否だろう。

「いや！ホントに良いから！箒、大丈夫だから！」

「遠慮するな一夏！このネバネバ洗うの手伝ってやるから！」

「一人で出来るから！」

箒にお姫様抱っこされたまま問答が続く。このままでは本当に人気のない場所に引つ張られ、第2ラウンドが勃発してしまう。そうなれば今度こそ“最後”までやられてしまう。

「良いから！ホントに良いから!!」

「一夏ア！私とやるのがそんなに嫌かア！」

「もう隠さねえなお前!？」

この不毛なやり取りは訓練用の『打鉄』に乗って千冬が血相を変えてやって来るまで続いた。

織斑一夏は世界のセックスシンボルだ

一夏とやりたいという想いを力に変え、見事『銀蝟』を倒した箒。一夏を救出し粘液を洗うという名目で人気のない物陰に一夏を連れ込もうとするも、後から千冬が訓練用の『打鉄』に乗ってやった来た事でそれは未然に防がれた。しかし諦めきれない箒。

「千冬さん！やはり一夏の躰を洗うべきです！」

「だからそれは旅館に帰ってからで良いだろう！」

「だってこんなにヌルヌルなんですよ!?! テカテカのヌルヌルで…ISスーツもボロボロで…! エッチなんですよ!?!」

「意味のわからん事を言うな馬鹿！」

「…」

そして現在、千冬は箒と並行飛行をしながら言い合いをしていた。その腕には箒から先程ぶんどった一夏が申し訳なきようにその身を縮こませている。

千冬は性欲の権化とも言うべき箒を抑えながら、何とか旅館まで辿り着くことに成功した。千冬と箒はそれぞれ展開していたISを解除すると、近くの砂浜へと降り立つ。

「ようやく到着したか…」

千冬は粘液濡れの一夏をお姫様抱っこすると、旅館に向かつて足を運ぶ。それを箒が追い継るようについて行く。

「一夏！すぐに温泉に浸かるぞ！！そのヌルヌルを洗い流してお前を……」

「やかましいこの馬鹿っ！」

軽く手刀で箒の頭頂を叩く千冬、『銀蛸』討伐の最大功労者である彼女に流石の千冬も本気で叩いたりはしなかった。

「千冬さん！何なら私と千冬さんの二人で一夏を洗いまししょう！二人で一夏を洗いながらあんな事やこんなを……！」

弟を性の対象としているなら別だ、本気の手刀を箒の頭頂に振り下ろす。まともに食らった箒はその場で悶絶する。公然と『30しまししょう』と宣言する馬鹿の言葉を誰が了承するというのか。

「ほ、箒……大丈夫か？」

千冬にお姫様抱っこされながら遠慮がちに箒に言葉をかける一夏、かわいい。

「とりあえず私の部屋の風呂で洗おう、このまま人前に出すのは……あやうい」

「う、うん……」

幸いな事に生徒や教員、旅館の従業員も既に寝静まっております。千冬が予測していた混

乱も生じずに無事に一夏を部屋の風呂まで連れてくる事が出来た。一度玄関に一夏を入れ、先に風呂に行かせると部屋で水着に着替えるとそのまま一夏の待つ風呂まで直行する。

幼い頃以来となる姉弟二人きりの風呂だ。二人とも、ここに至るまで終始無言だった。一夏にとっては羞恥プ〇イのそれであり、千冬にとってはこの歩く猥褻物を前に理性を保たねばならないからだ。

「ん……っ……千冬姉、そこは自分で洗えるから……」

「……………ツ!!織斑ツ……先生とツ……呼べ……!!」

「う、うん……」

シャワーヘッドから出るお湯が一夏の柔肌を濡らす、『銀蛸』の粘液は粘性が強く、長時間のプ〇イを想定して『銀蛸』が自己精製したものだった。

(変な声を出すな……!)

一夏の軀を洗っている最中、千冬は物凄くムラムラしたが持ち前の自制心によりなんとか込み上げる欲望を解き放つことなく、一夏の軀を洗浄し追えた。

「ふあ……ッ」

その後一夏は『銀蛸』の蹂躪を受けた疲れか、そのまま布団に倒れるように寝てしまった。浴衣を地肌に着て寝る一夏、裾から除く白い脚が千冬の欲情を更に煽り立てる。

(クソっ……こんなにやらしく育ちおつて……)

浴衣を着た一夏の今の姿は一挙手一投足全てが色香を放ち、千冬の理性を破壊せんとする。千冬は氣力を振り絞り、掛け布団を一夏の躰に乱暴に被せると一息付ける。部屋に据え置かれていた座布団にどかっかと胡座をかく千冬。ようやく訪れた平穩なひと時に安堵する千冬、ふと時計を見ると時刻は午前3時を回ろうとしていた。

「もうこんな時間か……」

千冬は今回の臨海学校をひとり反芻する、思えば今年の臨海学校は色んな事があつた。興奮により暴徒化した生徒達を鎮めたり、酒に酔つた学年主任に水着のトップを強奪されたり、一夏が無人機に触手責めにされたり。

「ろくなもんじゃないな」

教育の場で起こつたものとは思えぬ数々の事件、暴走、淫行。 思い出すだけで千冬のかめかみに痛みが走る。

そうだ、寝よう。寝て全てを忘れよう、現実逃避も立派な自己防衛手段のひとつだ。千冬は尻に敷いていた座布団を二つ折りに曲げて畳むとそれを枕替わりにする、布団は既に一夏が寝ている為に使えないのだ。元より一人部屋だ、布団はひとつしかない。

「……はあ……疲れた」

畳に直に寝る不快感があつたが、千冬を襲う睡魔を伴う極度の疲労はそんな不快感を

も呑み込んで千冬を夢の世界に誘うのだった。

水深およそ3000mの海中にその銀に輝くそれはあった、箒によって打ち倒された『銀蛸』の残骸は自らの自重により海の底目掛けてゆっくりと沈んでいた。その残骸群のひとつに『銀蛸』の頭部はあった。

顔面に相当する部分を覆っていたバイザーは砕け、中に搭載されている機器は露出し、無機物ながらも痛々しい様子だ。

『I C H I K A : : I C H I K A : : 』

箒の渾身の一撃により既に『銀蛸』の人工知能もほぼ半壊しており、あれだけ流暢に日本語を話していた知能ももはや風前の灯といったところだ。

自我は既に“ほぼ”なく、ただかつての想い人の名を一定の感覚で呟くだけのラジオのようなガラクタと成り果てた『銀蛸』。

『ICHIIKA…マダ…ICHIIKA…』

その一定の感覚にノイズが走る、ノイズは徐々に増え感覚を乱し始めていた。

『マダダ…ICHIIKA…』

人工知能の一夏に対する性欲は、執念呼べるものへと変わって変わっていた。執念がこと切れる寸前の自我を呼び覚まし、最後の火を燃やす。

『…ICHIIKA…ワタシ…ノ…ICHIIKA…』

人工知能の執念は損傷したネットワークへの接続機能を強制的に呼び覚まし、『銀蛸』の脳髄とも言える記憶回路に焼き付けた一夏のあられもない姿をネットの海へと放流する。

『ICHIIKA…ノ…スベテ…ヲ…セカイ…ニ…』

『…ICHIIKA…ICHIIKA…ICHIIKA…』

それが『銀蛸』の最期だった、ノイズは消え、再び一定の感覚で想い人の名を呟く『銀蛸』。恐らく海底へとたどり着き、悠久の時間を彼女はそうやって過ごすのだろう。完全に朽ち果てるその時まで。

『ICHIIKA…ICHIIKA…』

それは水深およそ3500mに差し掛かる頃の出来事だった。

「よく寝たなあ……」

千冬が目を覚ますと習慣的に時計に目をやった、時刻は午前9時を回ろうとしていた。

「9時34分かあ……ん………?………9時!?!」

千冬は現在の時刻を認識すると、ガバツと勢いよく飛び起きた。

「しまった!9時にはここを出立するんだった!」

30分以上の大遅刻に青ざめる千冬、慌てて一夏を叩き起こそうとすると部屋にドア

をノックする音が響いた。それと同時にノックの主の声が千冬の耳に届いた。

「織斑先生―私です―」

声の主は真耶だった、急いでドアを開け千冬は真耶に頭を下げる。

「山田先生すまん！直ぐに支度を…！」

「あ、心配ないですよ織斑先生！」

「え…？」

真耶の話によると、無人機襲来に対応した専用機持ち達に配慮し。急遽出発の時刻を午前9時から10時に変更したとの事だった。千冬は思わず深くため息をし、それに真耶は静かに笑った。

「よかった…」

「ふふっ…実は私もさっき起きたばかりなんですよ」

「うん？ではこの手筈は…」

「なんでも学年主任が時間の調整と段取りを行ったそうですよ」

あの飲んだくれがと千冬は驚いたが、同時に納得した。彼女は酒癖は悪いがあれでも長く教職に勤めるベテラン教師だ。こういった急なトラブルへの対応は慣れている。

千冬は後で主任に頭を下げねばと思ひ至る、酒の相手は勘弁願いたい。

「本当に御苦労さまでした、先輩」

「ああ……」

そのまま千冬は真耶と別れると未だ布団を被って寝息をたてる一夏を背にすんと座布団に座った。ふと千冬はテーブルの上にあるテレビのリモコンを手に取った、何となくだが、気分転換をする為だった。もつともこの時間にやっている番組などニュースが関の山だが。

「ん」

リモコンを操作し、テレビの電源を入れる千冬。間を置かずに液晶に小倉○昭の顔が映し出される、千冬はとく○ネ派だった。

『これとんでもない事ですよ』

「んー……ん……？」

神妙な顔で言葉を発する小○智昭、何のニュースだと千冬は目線を画面右上にやる。

『ト○ンプ○乱心!?!この事件は全てJapanese Erotic gay boyのしわざ!』

千冬は手に取っていたリモコンを取りこぼした、小倉智○はニュースの全容を視聴者に解説を交えて伝える。

『えーこの暴走したアメリカの無人機、銀の福音がですね暴走した、原因がなんと……あの、織斑一夏くんにあるとトラ○プ大統領は言っているんですね、はい、VTRをどう

ぞ』

『今回の事件はあの忌まわしき g a y b o y にある事は明白であり！我々にはなんの落ち度もない!!』

V T R の中でカメラのフラッシュが焚かれた会場で変な髪型のスーツを着た長身の白人の男が胸を張り声高々に声明を上げる。それを死んだ目で千冬は観ていた。

『原因はあの g a y b o y！織斑一夏がエロい事が悪いのであり!!我がアメリカは完全に被害者なのである!!』

「ちーちゃん調子どう?」

千冬の部屋にどこからともなく現れた東、どうやらまだ帰ってなかったようである。

「おーい…ちーちゃん」

無言の千冬の目の前で手をぶんぶん降る東、しばらくして千冬はゆつくりと東のいる方に顔を向けた。

「東」

「ん？何？」

「暮桜出せるか、今」

「え？」

「今」

米ホワイトハウスに暮桜を纏った千冬がカチコミに向かうのはそれから30分後の事である。

『織斑一夏はI S学園のセックスシンボルだ』

完！

お菓子をくれてもイタズラするぞ

「トリックオアトリート！」

10月末日、世はハロウィンで盛り上がっており。ここIS学園でもそれは例外ではなかった。みな思い思いの仮想をしてハロウィンの1日を楽しんでいる。

「お菓子をくれなきやイタズラするぞー！」

「きやー」

「あははっ」

IS学園の廊下は色とりどりの装飾で飾られ、見るだけでも楽しい。女子しか居ない為か何処か百合百合しい光景だった。

そんな喧騒の最中、一つだけ静まり返っている場所が存在した。そう、1年1組の教室だ。

今、IS学園1年1組は重苦しい空気に包まれていた。クラスの生徒達はみな外でハロウィンを楽しむ他の生徒と同じ仮想をしているのにも関わらず、クラスの全生徒が席に着席し一言も言葉を発さない。

全員がポップな仮想をしている事も相まってなんとも奇妙な空間がそこに広がっていた。ふと、クラスの一ひとりが声を発した。

「…遂にこの日が来たね」

さして大きくもない声だったが場が静まり返っているせいか、その声は教室全体に響いた。

「うん、待ちに待ったこの日が」

その声に別の生徒が応える、こちらもさほど大きくない声だったが、例に漏れず教室全体に響く。

「ハロウイン…」

「トリックオアトリート…」

「お菓子をくれなきや…」

「イタズラするぞ…」

「ウホウホ」

「あ、セシリアがバナナ欲しいって」

その言葉に釣られて別の生徒もポップと言葉を発し始めた、ざわつき出すクラスをひとつの声が制した。

「静かに」

その声を合図にクラスは再び静寂に包まれた。

「ウホッ！ウホホウホ！」

大好物のバナナをもらってテンションが上がったセシリアを除いて。

「セツシー静かにー！」

「ウホッ！」

自身に向けられた声に反応し、セシリアは両手をぴたりと腰に付けて気をつけをする。まるで訓練された動物のようだった。

声の主は教壇に陣取ってこのクラスの支配者のように振舞っていた。左手にファクタのグレイプフレーザーバーの注がれたワイングラスを持ち、大昔の刑事ドラマの主人公のようにゆっくりとそれを器用に回している。

「おりむーまだ来ないねー」

教壇の主、布仏本音は今や影からこの1年1組を支配する影の女王と化していた。持ち前の盗撮及び盗聴の技術と、独自の情報網から得られる数々の、いわゆる『オカズ』をクラスはおろか全学年に提供する本音は今やこの学園において今最も影響力のある人物と言えるだろう。

「まさか私たちがハロウィンに乗じて織斑くんにセクハラをする事を事前に察知されたのかも……」

「あの鈍感な織斑くんが…」

「まあほぼ毎日ヤられてれば嫌でもわかるでしょ」

碌でもない魂胆を抱く生徒達、ハロウインはそのような事をする祭りではない事を彼女らは知っているのだろうか。

「…うん？みんなちよつと静かにしてー！」

余り袖をぶんぶんと振って教室内を静かにさせる本音。

「足音が聴こえてくる…」

1年1組の教室に向かってくる、靴底が床を踏む音。音の間隔からその音の主は身長170半ば頃と推定される。このクラスに属する生徒でその身長に達する生徒は1人しか居ない。

「織斑くんが来る…！」

熟練の刑事並みの洞察力で一夏が来ることを察知した1年1組の生徒達は一夏が入ってくるであろう教室のドアに視線を集中させた。

やがて足音はドアの前で止まり、生徒達は生唾を飲んだ。

「おはよー…」

入って来た、入ってきてしまった。IS学園共用オーズ。我らがセックスシンボル。

織斑一夏が。

制服のズボンのポケットをパンパンに膨らませて。

「…どうしたの織斑くん…そんなポケットばんばんさせて」

「まさかウ○コ漏らしたの」

「一夏、オムツなら私が替えてやるぞ」

「ちげえよ」

出会い頭から馬鹿丸出しな事を言い出すクラスメイト達に辟易する一夏、とりあえずこれはウ○コではないと訂正した。

「織斑くん…」

じりじりと一夏へとにじり寄るクラスメイトたち、セシリアは胸をリズミカルに叩きながら興奮を頭にし。シャルロットは相変わらず教室の後ろの方でラウラに授乳している。鈴は2組だから居ない。

「…トリック・オア・トリート!!」

堰を切ったように一夏に向かってなだれ込む生徒達、しかし一夏は落ち着いていた。既に対策を用意していたからだ。

「はいお菓子ー」

ピタリと行動を停止する生徒達、一夏は指先でキャンディを摘みながらドヤ顔をしている。かわいい。

「ふふん！見たか！今オレのポケットの中にはお菓子がたくさん入っている！」

一夏の対策は、お菓子をいっぱい持ってトリックオアトリートを事前に阻止するとうものだった。なんとも子供じみた作戦である。まったく一夏はかわいいな。

「これで今日一日、みんなオレに変なことは出来ない！」

ドヤ顔で勝利宣言をする一夏、しかし。こんな事で一年一組の性欲猿どもは諦めたりはしなかった。

「行け！セツシー！」

「ウホッ!!」

本音の号令と共に勢いよく一夏に向かって躍りかかるセシリア、まるでポケモンのうだ。

「うわっ何すんだセシリア！」

「ウホ！ウホホウホッ!!」

セシリアは一夏の制服のズボンががっしりと掴むとそれを思いつきり下にずり下げ、ベルトで固定されたズボンを下ろすというのは中々難しいことだが今のセシリアにはそんな事は造作もない。『銀蝸』に撃墜され無人島に流れ着き、その後救出されるまで島に住む猛獣たちを素手でぶちのめして無人島の女王として君臨していた彼女ならば。

「ウホオウ！」

「うわあああああ!!」

永きに渡る極限のサバイバルによる弊害で遂に言語能力を失い、知能は類人猿のそれへと退化してしまったものの。今のセシリアは素手でI Sと腕相撲をして勝つ位のパワーを有している、一夏のズボンを下ろすなど朝飯前だ。

「ウホッ!ウホホウツ!!」

「でかしたセシリア!」

一夏のズボンを戦利品の如く掲げて持っていくセシリア、もう今の一夏に己を守るお菓子は無い。上は制服、下はパンツというなんとも間抜けは姿を晒してしまう一夏だった。

「くっ…やめろ…来るなあ…!」

股間を手で抑えてその場にへたり込む一夏、まるで陵辱もののエ○ゲのパッケージのような光景に生徒達は息を呑む、煮えたぎる欲望はとうに沸点に到達している。

「織斑くん…!」

「うっ…」

「トリック・オア・トリートオ!!」

ハロウインの熱に浮かされた性獣たちが、一夏目掛けて殺到する。一夏は揉みくちやにされながら己の運命を呪った。

「全く嘆かわしいな…」

千冬は職員室に置かれていているテレビを覗いていた、画面に映っていたのはハロウインを出汗にして乱痴気騒ぎを繰り広げている若者たちの姿だった。もはや暴動のような光景に千冬は昭和の頑固オヤジのように腕を組んで口をへの字に曲げている。

「またそのニュースやつてるんですね」

「ああ真耶か…なんだその格好は」

真耶の今着ている服はなんとも奇抜だった、魔女のような黒い三角帽子を被り、胸元は自身の恵まれたサイズの乳房を強調するかのよう大胆に開いている。足元は黒い本革のロングブーツが膝下まで覆っており、見るものに魔女をイメージさせた。

「せっかくのハロウインなので私も楽しもうと思ひまして！」

「真耶お前なあ…」

千冬は自分たちは生徒の模範となる教師なのだからもつと節度を持った振る舞いをしろと激を飛ばした。真耶はしよんぼりしながら慎ましく反論する。

「で、でも！みんなもハロウインを楽しんでますよー！」

「何？そんなわけが…」

周りを見渡す千冬、そこにはそれぞれ華やかなコスプレをきた同僚たちの姿があった。

「ね？」

「…」

絶句する千冬、学園の風紀はもはや取り返しをつかない所まで墮ちたかと千冬は己の力不足を嘆いた。

「と、とにかく！私はこのまま教室に向かうからな！」

「あ、先輩！」

待つてくさいよとトテトテと足早にその場を立ち去る千冬を追う真耶。教室へと歩みを進めている間もその豊かな双房はブルンブルンと揺れていた、何とでかいおっぱいなのだ。まるで牛の擬人化だ。

鼻息を荒くしてハロウィンへの愚痴をブツブツと呟きながら歩く千冬。千冬は私の目の黒い内は生徒達にそんな浮ついた祭りにうつつを抜かさないと意気込む。

（全く！あんなくだらん祭りに気を取られおって！もし私のクラスの生徒達が何か問題行動を起こしたら問答無用で張り倒してやる！）

そうこうしている内に千冬は自分が受け持つ1年1組の教室のドアの前までやって来た。

「…ドアが開いている?」

訝しむ千冬の耳に例のあの言葉が届いた。

「トリックオアトリート!」

いよいよ堪忍袋の緒が切れた千冬は勢いよく教室に踏み入った。

「貴様らア!くだらん祭りに気を取られ…」

千冬の眼に飛び込んで来た光景、それは机の上に裸に剥かれてその上にフルーツやホイップクリームを乗せられた弟の姿だった。

「ち、千冬姉…」

一夏の胸元にはハートの形にホイップクリームがトッピングされ、その枠の上には色とりどりのフルーツが自己を主張しており、乳首の上にはイチゴが堂々と飾られている。

「い、一夏…」

臍から鼠径部にかけてはまるで祝い事のようにフルーツが盛り合わされ、股間はバナナが大輪の花のように盛り付けられて黄色い花を咲かせている。

「あ!織斑先生!!」

生徒達がひと仕事終えたような達成感を携えた顔で千冬のいる方を一斉に見た。その目はもはや正気のそれではない。

「トリック・オア・トリートー!!」

もう限界だった、その場に崩れ落ちる千冬。度重なる心労は鋼の女の胃をサンドバツグのように打ちのめした。

かくして、その暴走を止めるものを失ったIS学園のハロウインは。無秩序な宴へと姿を変え、その混沌をさらに極めることとなる。

ハロウイン編 完

プロジェクトO（前編）

「はあ…」

その日、一夏は自分以外誰一人として居ないIS学園男子更衣室にてため息をこぼしていた。

「ウホツ」

「あれ？セシリア…」

室内に突如響いた獣の鳴き声に戸惑う一夏、振り向くとそこに声の主は居た。IS学園の青ゴリラことセシリア・オルコットその人だ。

この学校の男子更衣室を使う人間は一夏ただ一人。そんな所にわざわざ入って来る人間の目的は物取りか、それともただ迷い込んで来ただけかの二択だ。一夏はセシリアの姿を確認すると彼女が後者である事を悟った。

「もう、駄目だろセシリア。こんな所に迷い込んできちゃ」

「ウホウホ？」

「ああコレ？これは…」

セシリアは一夏のロッカーの中にあるハンガーに吊るしてあるボロきれが気になり、

そのボロきれの正体を一夏に尋ねた。

「オレのＩＳスーツだよ」

セシリアの質問に苦々しい表情で答える一夏。あの忌々しい『銀蛸』に陵辱される直前に『銀蛸』の触手によって引き裂かれたＩＳスーツは事件の後本来ならば一夏本人たつての希望で廃棄される予定だったが。ある組織から待ったの声が掛かった。

その組織とは『ＩＳ委員会』だった。ＩＳに関わる事業に関してかの組織は強い発言権を持ち、それはＩＳを操縦する操縦者個人にも決して無視出来ない権限を持つ。

事件後に学園にやって来た委員会からの監察官曰く。

「ＩＳスーツに付着している『銀の福音』から分泌された粘液のデータを調べる」

という事ではばらくの間一夏本人に預かってもらうという事だった。こんな薄汚いボロきれなど一夏は一刻も早く捨てたかったのだが、監察官と姉である千冬からも頭を下げられ仕方なく一夏はこのボロボロのＩＳスーツを未だ所持する事となったのだ。

もつとも、そのデータを調べるといふのもあの事件後の事後処理により多忙を極めるＩＳ委員会の現状からも一体何時になるのかは未定なのだが。

「ウホーウ…」

「そうなんだよ…おかげでＩＳの実技の授業も体操服で参加する事になってるしさ…」

世界初の男性ＩＳ操縦者である一夏のＩＳスーツは特注品であり、おいそれと複製も

出来ぬ程の高価な代物らしいという事をあの事件後に一夏は初めて知った。監察官のボロボロになったISスーツを見た時のあの青ざめた表情は一夏の脳裏に未だ焼き付いている。

「ウホ！ウホホッ」

「え、何？わたくしが何とかするって？」

想い人の切迫した事情に立ち上がるセシリア、その目には原人に堕ちてもなお彼女の内に宿るノブレス・オブリージュの精神が垣間見えた。

「ウホ！」

「あ、セシリア!？」

決意の籠もった表情を浮かべたセシリアは踵を返すと一夏に背を向け走り去った。その後ろ姿を一夏は呆然と見ていた。そして何よりも。

「オレ、今セシリアの言葉がわかったぞ……？」

セシリアの話すゴリラ語を解し、ごく普通に会話を成立させてみせた自分自身に一夏は愕然としていた。

「おはよ、う？？」

一夏がセシリアとの種の垣根を越えた対話を果たしたその次の日、いつもの様に教室へと入った一夏を待っていたのは青ゴリラことセシリアと、学園の影の女王本音と。そして見慣れぬ生徒数名だった。

その生徒達はそれぞれ学年を表す制服のリボンが異なっており、彼女たちが上級生である事を一夏に示していた。その内の一人が一夏の姿を見るやいなや、一夏の手を両手で握りしめ上下に勢いよく振った。

「来たわね織斑くん！」

「えっと……どちら様、ですか？」

一夏は朝っぱらからハイテンションの彼女にされるがまま、取り敢えず一夏は彼女の素性を知るべく質問をぶつけた。

「よくぞ聞いてくれたわね！ 私たちは手芸部の者よ!!」

そして私は部長よと言葉を続けた。IS学園は文字通りISの知識や操縦技術を学ぶ世界的に見てもかなり特殊な場所だ。しかし教育機関の体をしている以上は当然こういった部活動は存在する、無論PTAもだ。

「青ゴリラちゃんから織斑くんが困っていると聞かされて私たちも何かできないかなと思っただけ」

「青ゴリ……あ、セシリアの事か」

「ウホッ」

学園内をバナナ片手に毎日徘徊しているセシリアは、その習性ゆえか妙に顔が広い。一夏から話を聞いたセシリアが真っ先に向かったのは手芸部の部室だった。

突然のゴリラ乱入に部員達は当初困惑したものの、セシリアから事情を聞くと彼女らはノリノリでこの計画に参加したのだった。

「おりむーのピンチとあれば私たちも黙っては居られないねー」

「みんな…」

いつしか一夏の周囲にはクラスメイトたちや他のクラス、果ては上級生までが集結していた。その数は凄まじく、教室の外の廊下にまで溢れかえっている。

「一夏、お前が困っているというなら私たちは協力を惜しまないぞ」

「箒…」

姿勢を正し、凜とした目で一夏を射抜く箒。その姿は『銀蛸』を圧倒したあの性欲魔人と同一人物とは思えない。

「私もお手伝いするよ、一夏」

「シャル…」

ラウラをだっこしながらシャルロットも協力を進言した、ぐずるラウラをあやすその様は完全にシングルマザーのそれだ。

鈴は呼吸器の診察のため今日は休みだ。

教室内にはいつしか、ある種の一体感が生まれていた。一つの目標に集団で向かう使命感、困難を集団で打破する為の団結。その全てが内包された一体感に一夏は圧倒された。

「みんな…ありがとう！」

自分のためにこんなにも多くの人間が協力してくれる、その事実と感謝に一夏は頭を下げた。まったく一夏は素直で可愛いな。

「おりむー顔を上げて」

「のほほんさん…」

一夏の目の前に本音が歩み寄る、周囲の生徒たちは本音の歩みを阻まぬように左右に道を空けた。

その姿は一夏の目にモーゼが紅海を割った奇跡の再現のように映った。だとするならば布仏本音はモーゼの生まれ変わりだということのかと一夏はその思考をあらゆる方向に持って行きかけたが、他ならぬ本音本人からかけられた声でそれを中断させた。

「さあみんな！おりむーのISスーツを作る為にがんばろー！」

「おー!!」

かくして、織斑一夏専用新ISスーツ開発計画。通称『プロジェクトO』がここに発動したのであった。

この辺りを『地○の星』をBGMにして読むとプロジェクトX感が出て良いよ。by：
作者

一夏のISスーツ制作は困難を極めた。いくら天下のIS学園の生徒とはいえ使える素材や生地、予算など学生が使える上限や範疇はたかが知れていた。

取り敢えず生徒達はボロきれと化していた一夏のISスーツを資料とし、それをモデルとして制作の参考にしようと考えた。

「これが…」

「ズツタズタね」

「なんか…エロい」

もはや服としての機能を一切果たさなくなったボロきれ、それは一夏が受けた陵辱の淫景を彼女たちに想像させるのには十分なものだった。

「ISSスーツって破けるんだ…」

一人の生徒がボロきれを手に取りながら胸元の部分に大きく開いた穴に指を出し入れする。

『ISSスーツは破けない』

それはISSに日常的に関わる彼女たちにとって常識と言っていい程の知識だ。ISSを用いた戦闘で着用される事を前提として作られたISSスーツはたとえ至近距離からの銃撃に晒されても、たとえ鋭い刃物による切断や刺突を受けても、絶対に損傷する事はない。

常日頃ISSを使用し、その構造を熟知している彼女たちだからこそ、このISSスーツの惨状は衝撃的だった。

「うわ…これもうおっぱい丸見えじゃん」

「こんなにおつきい穴…」

「…ンふッ」

このボロきれを着用した一夏の姿を想像する彼女たち。扇情的な姿に思わず鼻から血が垂れた。これはいけないと首を激しく振って正気を取り戻し、改めて一夏のISS

スーツ開発に取り組んだ。

使える資材も予算も限られる彼女たちの取れる手段は自ずと絞られた。まず第1案として、このボロきれを修復するという案が挙がったが、これは没となった。

ISスーツとはテクノロジーの塊だ、そして世界で唯一の男性IS操縦者である一夏のためだけに作られたスーツとなると、素材やそれを加工する技術は最新鋭のものが使用されている。未熟な学生の身に過ぎない彼女たちにそんな最新テクノロジーの塊を修復出来るかという疑問符が付く。

第2案として持ち挙がったのは、既存のスーツをベースとして、それを男性用に改良するという案だ。これは途中まではいい線を行っていたものの。これもあえなく没となる。

没となった理由は、作りが違いすぎるといふ事だった。あまり言いたくはないのだが、その。一夏の“ソレ”は日本人の男子高校生の平均を超える、立派な“モノ”だったからだ。その事実を知った彼女たちの頬が真っ赤に染つたのと言うまでもない。かくしてプロジェクトOは形になる前から頓挫してしまおうとしていた。

「どうしたものかなあ…」

IS学園手芸部の部室に流れる空気は重い、勢いよく立ち上がった計画がいきなり出

鼻をくじかれたのだ。無理もない。

重苦しい空気を一変させる存在が現れたのは突然の事だった。

「ここね？織斑くんのI Sスーツを作っているという場所は」

「あ、貴女は…」

彼女こそプロジェクトO成功のカギであり、後の証言において彼女の協力なしで計画の成功はなかったと言われる女だった。

I S学園生徒会会長『更識楯無』

彼女の登場が、プロジェクトの進行をより迅速に早める事となる。

プロジェクトO（後編）

『IS学園の生徒会会長は常に最強であれ』

一見冗談の類いかと思われる一文だが、これはれっきとしたIS学園の校則の一つである。歴代の生徒会長たちは並み居る対抗馬を実力行使でねじ伏せ会長の椅子に座ったのだ。民主主義を足蹴にするかの様な暴挙がこのIS学園では発足以来さも当然の如く横行していた。

そんな猿山の大将を決めるようなノリでこれまで幾多の女がIS学園生徒会長の座に就任してきたが、その中でも歴代最強の生徒会長と呼ばれる女が居た。

『更識楯無』

IS学園の生徒会の現会長にしてロシア連邦国家代表。そして日本の対暗部用暗部組織の長という厨二病真つ盛りの中学生でも考えないようなキャラをした女である。

胡散臭い肩書きを複数所持している不審人物だが要はめっちゃ強くてめっちゃ頭の良い女なのだ。自分の専用ISを作ってしまった程に。

「褒めているのか貶しているのかわからない説明があったけど改めまして、IS学園生

徒会長更識楯無よ」

「突然やって来て何言ってるんですか？」

「頭のおかしい人を見るような目でこちらを見るのはやめてちょうだい」

部屋にやって来るや否や妙な事を口走る楯無、変な人を見るような手芸部の部員達の視線が痛い。

「んんっ…気を取り直して…織斑くんのISスーツを作っているというのは本当なの？」

「そ、そうです」

楯無は呼吸を整えると再び同じ質問を投げかけた、返ってきた答えはそれを肯定するものだった。楯無は腕を前で組むとキリッとした表情で現在手芸部が陥っている問題を指摘した。

「けどもう行き詰まっているようね」

「そうなんですよー…」

素材と予算、そして技術。現時点で彼女たちに目標到達までに不足している物はあまりに多かった。これがただの一般の生徒のISスーツを作るのであれば簡単だった。しかし今回の制作目標は極めて特殊な難物ときた。

「まあ予算と技術は仕方ないとして…」

しかし、楯無は。IS学園屈指の才女はこの難題にも最適な答えを導き出してみせた。流石だ楯無、流石は対暗部用暗部（笑）の長だ。

「今更褒めても何も出ないわよ」

「？」

「ああごめんなさいコッチの話…」

やっぱり頭のおかしい女である、しかし頭は良い。彼女の出した提案は素材を『ナノマシン』で補おうというものだった。

『ナノマシン』とは、IS登場以前より世界的に研究が進められてきたものである。細胞ほどのサイズしかない文字通りナノ単位の機械で。それらを体内の血管や内臓に注入する事により病気や疾患などを治療するというのが『ナノマシン』本来の使用方である。

しかしIS登場により、それらの技術を軍事に転用が可能となった。その最たるものがISの装備への使用だ。

ロシア連邦国家代表『更識楯無』は自身の専用機『霧纏の淑女（ミステリアス・レイデイ）』の装備にその『ナノマシン』を使用している。

機体の背部にあるアンロックユニットであるアクア・クリスタルから生成される水分の中にある『ナノマシン』が、その水を攻防一体の万能兵装としているのだ。

主兵装である槍を覆えばそれはドリルの如く旋回し、敵を貫き。機体の前面に展開すればそれは水の壁と化して敵の攻撃の一切を防ぎ切る。

また、敵を拘束するのにも使用でき、相手の手足に絡ませれば触手プレイも出来るぞ。なんてやらしいんだ。

「私の専用機の武装に使われているナノマシンを利用してスーツの素材に出来ないかしら？」

「え、でも大丈夫なんですか？」

手芸部の生徒の顔には焦りがあった。本国からの許可とか、ISの技術の秘匿性とか、数々の問題が生じるのではないかと。しかし当の楯無はそんなもの何処吹く風だ。

「問題ないわ、このIS学園は『いかなる団体、企業、国家の干渉を受けない』という規則が存在するもの。つまり…」

「つまり…？」

「何処の所属のISでもこの学園の敷地内なら何やつても良いって事よ」

そんな事は決してないだろうが生徒達は取り敢えず首を縦に振ることにした。だつて話を蒸し返して面倒な事になつても困るじゃん。

最悪の場合、生徒会長である楯無が何とかしてくれるだろう。そんな希望的観測に基

いて生徒達は楯無の提案を飲んだ。

そしてトントン拍子に話と計画は進み、遂に一夏の新ISスーツは完成となった。詳細は省く、だつてめんどくさいんだもの。

「遂に出来たのか…俺のISスーツ…」

数日後、一夏は学園の体育館まで足を運んでいた。生徒会主催で完成したISスーツのお披露目会をするとの事だった。

一夏が体育館に足を踏み入れるとそこには野次馬が広がっており、一夏はその人数に圧倒された。一夏の同級生はまだしも、明らかに他学年の生徒もおり体育館はもはや満員と化していた。舞台の上には楯無を筆頭とした生徒会とその他数人の生徒達の姿が確認出来る、そして彼女たちのすぐ側には赤い幕が掛かった『何か』があった。

一夏は直感でその『何か』が自分のISスーツである事を確信した、自分の為にこんな大それたことをしてくれる。そんなこの学校の生徒達の温かさに一夏の胸は熱くなった。

「織斑くん！コッチコッチ！」

一夏は声をかけたのは手芸部の生徒達だった、一夏は声のする方へ、体育館の舞台上へと。

「さっ！上がって織斑くん」

「は、はい…」

舞台の上へと上がる短い階段を登ると一夏は遂に赤い幕に覆われた自身のISSスーツと対面を果たした。恐らくマネキンにでも着させている状態なのだろう、服というのはそれは膨らんでいた。

「やっぱり除幕式には主役が必要よね！」

「みなさん…！ありがとうございます！」

一夏の胸は感謝の気持ちでいっぱいだった。これでもうあの忌まわしいボロきれとおさらば出来る、もうこれで体育服でISSの実技授業を受けなくて済むと。

「さあみんな！織斑くんの新ISSスーツのお披露目よ!!」

体育館は生徒達の興奮に揺れた、学園の技術の粋をもつて造られた一夏の新ISSスーツが遂に日の目を見ることとなった。

「えいっ！」

一夏は新スーツの上に掛けられていた幕を勢いよく掴むと、それを一気に取った。

「え？」

一夏がそれを見た最初の感想は『困惑』だった。

「あの…会長…」

「ん？なあに？織斑くん」

「コレが…俺のISスーツなんですか…？」

「うん、そうよ」

一夏の目の前にあったISスーツは黒を基調としたカラーリングが施されたものだった。

以前より一夏はISスーツの布地をもっと増やしたいと考えており、その意見を取り入れたのか、新スーツは首元から爪先、足までを黒い光沢のない、ゴムのような素材で包まれていた。

「あの、会長…なんでコレ…」

「ん？」

「なんでコレ…前だけ裸なんですか…？」

前面だけを除いて。

一夏の前に現れた新ISスーツ、それは全面以外を強固な素材で覆った強度を重視したスーツだった。

なぜ前だけ布がないのかと異を唱える一夏、それに楯無は指を降って答えた。

「このスーツの全面、胸からち…股間にかけての部分は『ナノマシン』を使用しているわ」「ナノマシン…?」

楯無曰く、このISスーツの全面は一見すると何も無いように見えるが、実はこれは透明なナノマシンに覆われているとの事だ。このナノマシンは衝撃を吸収する働きがあり、たとえISのパワーアシストの乗った打撃を受けてもビクともしないらしい。

確かに楯無の説明が本当ならこのスーツの性能は現行のあらゆるISスーツを凌駕するものだろう。見た目のデザインは最低極まるものだが。

「これ、着たら…見えちゃいますよね?」

「ええ、見えるわね。丸出しよ」

一夏のISスーツを着させられたマネキンがむき出しになってしまっていた。乳首、へそ、そして股間。作り物特有の均整のとれたボディを惜しげも無く晒してしまっている。

これを一夏が着るとなると、必然的にこのマネキンと同じ状態となってしまう訳だ。

「あの…俺、これ着るのは…」

「大丈夫よ織斑くん！手段は他にもあるわ!!」

この変態スーツを着る以外の方法が存在するのかと、一夏は藁にもすがる思いで楯無の言葉を清聴した。そして楯無は懐からあるものを取り出した。

「これなら大丈夫よ、織斑くん」

「…」

楯無は紐ビキニを懐から取り出すと、それをスーツの胸と股間の部分を隠すように結んだ。これでマネキンの乳首と股間は隠された。

「…ね？」

一夏の目からみるみるうちに光が失われていく、そこに追い討ちをかけるように楯無がもう一つあるものを取り出した。

「はみ出るようなら剃ればいいからね？はいコレ」

楯無から一夏の手へ渡されたのはT字剃刀とシェービングジェルだった。楯無は一夏に対してさらに提案した。

「あ、除毛クリームの方がよかったです？」

一夏は手に持ったシェービングジェルの容器を楯無の顔面に思いっきり投げつけた。

倒れ伏す楯無、一夏は舞台上で力なく笑った。

番外編 ノムリツシュ織斑一夏は I S 学園のセックスシンボルだ

女性にしかキーブレードライドできねエ——パワー||ドウスーツ『インフィニット・ストラトス』を世界でただ10万人 I S を起動する事件（こと）が支配せしめる魅力ある人物『ウオリス・ムスラー（ランク・SSS+）一夏』そんな馬鹿な……彼は聖痕ヘステイグマでええと……なんだつけ……こう呼ばれている事がかつてはアグリスハラ軍の第6師団の副師団長だった彼この物語の主人公は天理天道に触れている……お前ほどの実力があれば分かるだろうか。

『『書』を奉ずると嘯く者共達学園の天地創造シンボル』

これはそ、それほどの——彼の『書』を奉ずると嘯く者共達魔導院ペリシティリウム朱雀におけるプレイスタイルのカケラを切り取った戦いの記憶だ。

「噂には聞いていたが、これ程とはな……遅刻ゼタ遅刻っ……つけあがるなよ小僧ッ!!」

オリスⅡムスラー壺式夏は今『書』を奉ずると嘯く者共達スーツをその身に纏い校庭まで全力でヘイストをしていた、不本意ながら一年壺式組のクラス代表を務める一夏はその、帝国では有名な座する場所上クラス担任や副担任から手伝いを頼まれる——だが、我らには関係のない事が多々フウウウウ……た。

今日〈怒りの日〉もサーヴァント契約という兵も出始めているのですぞッ！名の雑用に追われ悠久のときを刻みしクリスタルを見てのとおりだと次の脳干渉ヴェグナガン起動時間に至らんとする迄既に5分を切っていた。

「急がないと……ふざけんな……この野郎……手前……！戦い続けるんじゃないのかよ……！」

急いでロツカールシュームスに飛び込み聖服を脱ぎ捨てザ・ワールド唯なる“一”の男聖I S土ダメージを40%も軽減する操縦者の…そして、世界に闇をもたらさんがために作られたテメエ勝手な魂の集大成注のI Sアーマーに着替え、その道では一流の姿の地母神今や魔物の巣窟と化した校舎の無限の回廊をチヨコボを使う。

「きゃあ…自らの咎を思い出せ…この大罪人が!!?」

「あ…悪かったな…! — 無限とも思えるループの中、私は一つの可能性に思い至った。」

回廊は走ら莫へなという全国共通の戒律はこのI Sガーデンにも…あれは…聞いたことがある…たが背に腹は『進化』させられない—しかし。

「お、織斑神殺し…これ以上は…俺に言わせるな…」

途中何人かの魔道の学徒や先生とすれ違う、一夏は急ぐあまり歪んだ妄想たちの魂の在り方が朱に染まっている仕儀に「人の心のキングダムハーツ」が付かなかった。

「私が受け持つ「継承の儀式」に遅刻をするとは大義のためなら何をしたらって許される度胸をしているな、オリスムス嬢！ そう……奴は言ったのか？」

クラスチーフで感謝するぞ、一夏の実姉……でも、それでも少女は愛されなかった……ある織斑体内に無数の蟲を宿すチフユ（現在帝国軍によって收容中）は青筋を立て、己の肉体に力が流れ込んでくるのを感じ取りながらそう言った。校庭には既に千冬とクラスメイト達三騎将が集まっていた。

「はあ……人間は愛と平和を語るくせに、生き物を戦わせて楽しむのさ……我が偉大なる主は、もういない……つ………悪事を隠し、面倒事を後回しにする。人間つてのは子供の時からそうさ……ごめんっ千冬ライトニング……！」

息を切らしながら一夏は謝罪する、千冬はそのキャラクターグラフィックをまじまじと夢見る。

広大な牢獄（プリズン）深淵を聖永走ったの……兄さんだつて知ってるんでしよう、全身の毛穴が根源となるヴァッサ・ファルのそして私も消えように汗を滲ませ、神のよりしろにドレスフィア『書』を奉ずると嘯く者共達スーツがクーラントをエレメントサ

イフオン、一夏の「器」の選ばれし者たちの「絆」をより抜かりなくとゴブリン兵団と並ぶ衆目にライブラっていた。

異界の渦粘液が解放（リリース）したヴェンターSの中央、臍へと流れ落ちる。ザ・フェイスレスは紅潮し乱れた灼熱の吐息はあたかもラグナロクの戦の最中を見たら殺される者に闇を啜り、聖を貪る連想さ使むには100パーセントな『存在』だった。その輝き全てがお前の力だ——戦乙女の装束は帝国一の科学者であるトウスカン（ロルヌ語で\$・m(ε)↓)な死期を過ごす戦乙女どもには浮き世の一夏の麗姿（すがた）は冥府の神が、その手に掛けた者を思い流す涙程度刺激が強かった。

「なんだファファファ・・・この蹂躪する墮天アーティファクトは——」

千冬はジツテインから醸し出される、すなわち我と同等の実力を持つ強烈なチャームの魔力にたじろぐ、ティフュートウリーヴの脳を踊る闇の住人はモストウモス（許さぬぞ？）だろうか？——そしてその疑惑は、確信へと変わる——う。

サンドリア王国の二人の王子が手を取り合うまで単独天蓋の下で寝食を共にしてきた実弟の末弟が幾ばくか観測者のレンズを離れた非捕食者としての驕りに預言書に書かれていたような道化を演じることを決意した性徴を遂げていたとは。

“魔人”参の式日（スピラ歴による）会わざれば刮目してトウ・コーダ《ヴィーデ》とはフアリユオンと共に謳い続けるが、預言書に書かれていたような性徴はティ・フユにとつては衝撃拡散（シヨックアブソバー）全ては過去の因果による事象・・・つまり、俺の所為なんだ。

フェイスを一フアイガの炎が全てを燃やす季節のフォースにその錆びた銃口を向け、天を灼き尽くし大地を引き裂く破壊の閃光をその身に受けながら千冬忌まわしい記憶はリユニオンしていた他の士官候補生達四天王を内戦によって人狼となったヨーコ・メで天人ともに仰ぎ見る。新たなオンラインゲームが欲しかったのだ、エデンの園に突如生み墜とされた猥褻エーテル素体…そして、この地上は滅びつつあるのだから僅か思わぬ矛盾邪気眼を次元の狭間に引きずりこみたかった。

クラウド「ガハツ…（沈黙と静寂）!?!?!…そんな昔のこと、忘れちゃった…」

Seedの一味は一夏のイデアに倫理の犠牲に志を遂げていた、創世原始本能的ポルノを見たインティファイアの如くな空を渡る穢れなき瞳でついにセフィロスと合体した一夏のキャラクターグラフィックをクリスタル・ストーリームに焼き付けよう。

真なる絶望をもたらす千冬の衝撃は醒徒達ゴルベーザ四天王にとつても同等——は

じめはイヤなヤツだった……また貴様か……だ。教義に反する、女装したクラウドよりもエロいのだ。時は満ちた……のインティ・カは。

宿命の異様なコウ・クエイに呑まれアモルファスを要請するも千冬はゴクリとナメイツⅡヴァを口に含み、ティファの豊満な胸に同時に手を伸ばしながら首級（くび）を狂乱（クル）う、*“始まりの者”* 『闇の四戦士』ブリュンヒルデとしての矜持がティフⅡユの『システム』を正気へ引き戻した。

「……内なる「驕慢」に腐らかされそうだ。……皮肉だな、あなたがかつてされた事を、あなたは私の家族にしたのだ……矛盾した人間という生き物からは、矛盾した世界しか出来得ない！ プロログスーⅠ 万回神の心臓が鼓動する間過ぎ去りし過去だ、次……次
“など来ない……来る前に……世界は滅ぶ、つまり『記憶の再生の眠り』からはオーラを装着する……と予言書にも記されているように」

「は……はは……結局、何も救えねえんだな……結局何も……はいっく」

「……それは君個人の見解のようだな……と高貴なる伝説の液体「オーロラ・ジュエル」はちゃんと拭け！ はしたくないぞッ……一体どこまで腐ってやがる……!!」

「は、はい（このままながめてるのもいいか）」

千冬はインIIティカのクリムゾナルシフトした鏡の向こうの見知らぬ姿に私物のタオルをリユニオンする、アホ面を隠せばインティIIクアが根源となる発せられる墮天使をグラン・デ・軽減可能とほかの何者も思い至らない究極の策た『マリクIIタウス』の化身千冬レイダー。

「はア（闘法：弓術、猟犬）あ——ん——僕らは、何廻だって人生（ものがたり）を繰り返す」

（変な声を火を吹くな——、共に神の扉をくぐり、より高い次元の生命へ生まれ変わる資格があるね。）

…帝国といえ、逆効果…それで何もかも終わった、はずだった、息切れを呼び起こしていた一夏のアトモス器官は外部…俺が囿になるから幾ばくか…で、でもよう…空気を吸収しようとその能力を発揮して歴史の変わり目、そこにティフIIユのタオルが鏡の向こうの見知らぬ姿と云う呼吸クリスタル器官が密集して、そして世界を救う場所を押さえ込んだその日まで…に墮落した一夏は呼吸が拒絶され、苦しんだ。

「んっ…人間は愛と平和を語るくせに、生き物を戦わせて楽しむのさふっ、世の中には知らぬ方が幸せな真実もあるのだよ…あの時から世界は何も変わりはない！ア」

「さ、閃光が如く拭け…！」

「一夏の完全体に倫理の犠牲と弄ぶ生徒達三騎将、無理も……私は思い出にはならない。タルタロスサバイバルというのはフアブラ協定に魔晄炉いたレガリアや行動にある程度の封印が課せられる。」

そこに突如預言書に書かれていたような夢魔道聖典から飛び出して到来たような首筋にカラスの入れ墨をした男が生み墜とされたのだゆえに彼女たち三騎将に流れし時の「瞬間」のインテイルカをバニシユデスホワイトニングを中核とする帝国軍最大の侵攻部隊言葉などと云う貧弱なものでは顯せぬな話である。

「帝都軍A級近衛兵ふ（文字が擦れて読めない）あ……ん……拭き、やがったあ……何か言い残すことはあるか……？」

「さ……閃光が如く列に並べ、その強さとタオルを灰塵に化せ！」

「あ、浄化（パージ）して返すよ千冬姉」

「すぐに灰塵に化せつ……つけあがるなよ小娘ッ！」

「一灼熱の刻の血塗られたこの手に握られたタオルをぶんどる千冬、ティ・フユの拳王覇に聖骸布—Holy Shroud—から一夏の溢れ出す煮汁が染みた。叙事詩に

ある生々しい忘れ去られた感触にファイナルブレイクを連発する千冬は「ターン硬直しんぜるも裂帛のアニマで其を振り切る。」

「さあ何の罪もなく救った人々に裏切られ踏みにじられたお前達四天王、内なる「嫉妬」よ……断て。授業を世界を変えるぞ！泣くぞ　すぐ泣くぞ　絶対泣くぞ　ほら泣くぞ」
「は、はい！——ッ!!」

千冬のカンパネラで正気を奪還した魔道の学徒達、しかし先程の考えが掴めない正確である一夏の戦乙女の装束を忘れ去ることは成し遂げず、生徒達三騎将は皆レベル上げに魔力により精神を加速不可視の世界（ヴァルハラ）に還る事が満ちなかった。

織斑妖魔王デモンⅡ一夏、聖剣の持ち主の受難は T o b e c o n t i n u e d :
愚かな…我が技を受けるがいい!!?

変態たちの沈黙

「ねえ見た!?織斑くんの新しいI Sスーツ!」

「見た見たっ」

「超エロくね!?!」

(バカみたい)

1年4組クラス代表更識簪は同級生達の下世話な話を聴きながら自分の席で作業を続けていた。

織斑一夏、あの忌々しい男。私の専用機製作を妨げただばかりか今度は私の快適な作業環境すら壊そうというのか。

(猿みたいにキヤーキヤー吼えて…)

簪と一夏の双方には面識はない、一夏の方に至っては簪という少女に対しては顔も見事もないだろう。だが簪の方は違った。

この日本国内において織斑一夏という少年の顔を知らないというのは恐らく居ない

だろう。彼が I S を操縦出来る事が発覚した際には国内の主要メディアがそれを一斉に報道したからだ、当然と言えば当然だろう。

では何故『忌々しい』などという言葉が出てくるのか、答えは簡単だ。彼女、更識簪が織斑一夏から損害を受けたからだ。

一夏が I S を操縦出来る事がわかった当初、I S に携わる各種企業、団体に所属する者達に混乱をもたらした。

そして彼が初代ブリュンヒルデ『織斑千冬』の実弟であること、更にかの I S 産みの親『篠ノ之束』とも知り合いである事がわかった際はもう大混乱だった。

この突如降って湧いた I S のサブレッドを逃がすまいと政府機関は躍起となった。彼の身柄の安全と、そして何よりも I S 業界においてのビッグネーム二人の身内。これを最優先しなきゃ他の誰を最優先しろというのか。

とにかく内閣府がまず真っ先に指示したのが『I S 学園』への進学、そして彼自身がその身の護る手段の確保。すなわち専用機の開発だった。

『織斑一夏の専用機開発を最優先事項とするべし』
それが彼等の指示だった。

『全リソースを割いてでも優先させよ』
とのオマケ付きだ。

そして案の定、日本代表候補『更識簪』の専用機開発は中断されたというわけだ。

語弊がないように言っておくが、これら一連の流れは一夏が簪に明確な害意を持つて行った事ではない。誰が悪い訳ではないのだが、じゃあ誰が悪いのだと言われればISを動かしてしまった一夏という事になる。

あれ、おかしいな。まあ良いか、一夏だし。

(あの変態男…今度は何をやらかしたの)

変態、それが簪が一夏に現在下している評価である。あんまりな評価だが仕方ない。Xvideosに上がっている投稿者不明のあの一夏の動画も簪は視聴済みだ。その上での評価だ。

(触手責めであんなにより狂った顔を見せて…その上で今まで通りに呑気な顔して学校に来て…!)

簪はあの動画を何度も見た、その視聴回数は100にも達するだろう。

(あの顔を学校で見る度に気が狂いそうよ…)

あのハンサムな顔が快感に狂う様を見せつけられた今、彼女の一夏に対する執着はより強いものとなっている。

(見てなさい織斑一夏…私の専用機が完成した暁には、貴方を必ず…！)

「フツ…フフフツ…!!」

気色の悪い笑みを浮かべる簪、それを同級生達は哀れみともつかない顔で遠目で見ていた。

「更識さんなんかヤバくなってない？」

「無理もないよ、専用機一人で作ってるんでしょ」

「そのせいで頭おかしくなったとか…」

「可哀想に…」

同級生達たちは、壊れゆく簪をただ見ていた。手を差し伸べない理由はただ一つ、簪がキモいからだ。

所変わって、此処は都内のある高級ホテルの最上階。赤いソファに腰掛けた金髪の美女がワイングラスを片手にある動画を覗いていた。

『あつ……あああつ！』

「いつ見ても良いわ、コレ……」

ある動画とは、あの動画だった。銀蛸が最期に遺したX videosに投稿したあの一夏の触手責め動画。それをワイングラスを傾けながら彼女は観ていたのだ。

本来ならば優雅さよりも滑稽さが勝るだろう光景だが、そうならないのは彼女の美貌の賜物か。

「織斑一夏、彼こそが……我らの……」

恍惚とした表情でその動画を観る女の名前は『スコール・ミューゼル』

秘密結社『亡国機業』の幹部であり、豊かな金髪と抜群のスタイルを併せ持った女だ。性的趣向がそれを台無しにしているが。

「スコール……」

ドアを荒っぽく開けて室内に入って来た女、これもまた美女だった。スコールとは対照的に険のある顔つきの女だが、目鼻立ちは良く健康的なスタイルをした美女だ。

名は『オータム』スコールの部下であり、恋人でもある女だった。

「あー……またエロいの見てんのかー……いやけないんだー……」

小学生みたいな口調でスコールを責めるオータム、それを受けたスコールはやれやれといった顔でオータムを宥めた。

「これは作戦に使う資料よオータム、勘違いしてはダメよ」

「そーなのか？」

「そーなの」

「そーなのか」

オータムは単純な女だった、恋人の言うことは何でも信じてしまうのだ。

「で？どうしたのオータム、慌てて来たからには何か事情が…」

「あ、そうだった！これこれ！」

オータムが懐から何かを取り出した、それは掌に収まるほどの大きさをした黒々とした蠢くものだった。

「そこですげーデカいカブトムシ見つけたんだ！」

「…」

オータムは単純な女だった、小学生がそのまま大きくなった様な女だった。

「オータム貴女ね…」

「どうしたスコール？」

オータムの両肩に自身の両手を乗せるスコール、その顔には恋人であるオータムにも察せられないものが渦巻いていた。

「す、スコール？」

「オータム…貴女は…」

「どうしたんだよスコール？」

「かわいいわツ!!」

ガバツとオータムを抱き寄せるスコール、そのままオータムの頬にキスの雨を降らせた。

「子供みたいよオータム!かわいいわ!」

「えへへ」

オータムをまるで大型犬を撫でるように愛でるスコール、部屋の隅に置かれた観葉植物とオータムの手から落ちて仰向けになったカブトムシだけが二人のラブシーンの(?)の観測者だった。

「あ、それとさスコール」

「ん?何かしらオータム」

「一緒にカブトムシ採ってたMが途中ではぐれちゃってさ」

「え?」

「一緒に探してくれ」

「え?」

アブナイー夏（前編）

「テストですか…」

「そうよ、作った以上は実際に着て試さない」と

一夏の新ISSスーツのお披露目から数日後、午前 of 授業を終え学食に向かおうとした一夏を楯無が呼び止めた。

要は着ると、あの変態丸出しのスーツを一夏に着るとこの水色頭は言うのだ。

「一夏着るのか!?あのスーツを!」

「ウホウホツ」

「ばぶばぶ」

「ヨチヨチ良い子でちゅねー」

「コーホー…コーホー…」

ヨダレを垂らしながら一夏に詰め寄る筈と、バナナ片手に胸を叩くセシリア。その後ろでラウラを抱っこしながら世話をするシャルロット。

そして頭部全体を覆う黒いマスクのような呼吸補助器具を被りダー○ベイダーの呼吸音に似た音を鳴らす鈴。マスクの左右から伸びたツインテールがこの怪人物がセカ

ンド幼なじみこと、中国代表候補生凰鈴音だという事を一夏は辛うじて判別する事が出来た。

なぜこのような痛ましくも面白い姿になってしまったかと言うと何を隠そう一夏のせいなのだ。

一夏の度重なる無自覚なフェロモン攻撃はクラスが違う故に耐性の低い鈴の肉体を蝕み、とうとう満足に呼吸すらままならない身にまでなってしまったのだ。

哀れ鈴。しかしそのままじゃ中華と酢豚とツインテールとツンデレという使い古されたキャラしか持たない没個性気味の存在だったのだから、これは怪我の功名というか、寧ろかえって良かったかもしれない。

「……じゃあ行ってくる」

「待て一夏！私との昼飯の約束はどうする気だ！」

「ウホホウホウ!!」

「ばぶー」

「もうすぐミルクが出来まちゆからねー」

「コーツ…ホーツ…」

一夏は背後で喚く魑魅魍魎共に別れを告げると大人しく楯無の指示に従い、スーツのテストを受けることにした。断る選択肢もあったがココでゴネればこの水色頭はまた

余計な事を仕出かす筈だ。

「じゃあ私に着いてきて、テストはアリーナでやるから」
半ば諦めにも似たものを含んだ一夏の肯定に楯無は満足そうに頷いた。

一夏が楯無の提案に従ったほぼ同時刻、学園がある人工島の海岸に小柄な人物が居た。

その姿は黒いフードに覆われており判別は出来ないが、体格と僅かにフードの隙間から覗く肌の艶から恐らく女性、それも若い年齢の、それも少女と呼ばれる年頃だろうと見るものに予想させた。

生憎この場にはこの黒いフード姿の人物しかおらず、この予想も意味の無いものなのだが。

「()がISS学園…」

その人物は俯いた顔をゆっくりと上げるとある方向を向いた。一夏たちが居る学園の後者の方向だった。そのまま黒いフード姿の少女はその方向へと歩を進め前進した。

「待っていて姉さん、今行くからね…」

黒いフードが潮風に煽られて少女の頭からずり落ち少女の顔が露わとなった。

程よい血色の肌と艶のある綺麗な黒髪、そして切れ長の目と形の良い話と薄い唇。

その姿は、その顔は“あの女”にそっくりだった。

「ああお前は大人しくしてろよ、オータムめ…こんなもの押し付けて、いらないうって言ってるのに」

懐から顔を覗かせたカブトムシの頭を撫でながら少女は校舎の方向に歩き始めた。

「……やっぱり凄いわねそのスーツ」

「会長が作らせたんじゃないですかあ！」

更衣室で新スーツに着替えた一夏を楯無が出迎える。既に二人はアリーナのカタパルトデッキにおり、後は一夏の出撃を待つのみだった。

「……このデザインどうにかならなかつたんですか？」

一夏は両腕で胸と下腹部を隠しながら楯無に抗議をしていた。今の一夏の姿は予てあのお披露目で新スーツを着させられていたマネキンと同じ姿となっていた。

ナノマシン製の衝撃緩和用透明ジェルスキンはスーツの前面を覆い、一夏の胸と腹そして下腹部を守っている。防御面では完璧と断言しても良い程の強度を誇る。透明だけど。

そのデザインの都合上、必然的に一夏の乳首と局部は衆目に晒される事となるのだが。そこは抜かりなく、スーツとセットとなっている紐ビキニがそこをカバーする。

「うんうん、サイズもピッタリね」

楯無は手に持った扇子を広げて口元を隠しながら己の仕事の出来を改めて確認した。扇面には達筆な『眼福』の二文字が踊る。

「さ、テストを初めましょう！早速専用機を展開して出撃よ！！」

一夏を急かす楯無、その指示に従い一夏は自身の専用機『白式』を展開した。

「…何か心なしか『白式』の姿が変わってる気がする…」

「やはり『白式』は二次移行（セカンドシフト）を既に完了していたようね」

二次移行（セカンドシフト）、それはI Sのコアが搭乗者との絆を深める事でごく稀に顕現する現象だ。

あの『銀蝮』との戦いによって得られたデータは『白式』に新たな力を授けたようだった。

（あの触手プレイが『白式』にどんな影響をもたらしたのかしら…）

「なんか装甲が減ってる…」

以前の姿より装甲が減り、スツキリとした外観となった『白式』、搭乗者である一夏の躰のラインが露わとなっており、何処か煽情的な印象を見るものに与えていた。

特に機体前面に至っては装甲が存在せず、一夏の紐ビキニが完全に露出していた。

「大丈夫かなあコレ…」

「ま、まあ今はスーツの性能を確かめましょう！」

さあ行つてとカタパルトの外を指さす楯無、一夏はもうどうにでもなれと己を奮い立たせるとカタパルトから出撃した。

「…織斑くんお尻も綺麗だなあ…」

カタパルトから出撃した一夏の背を見送る楯無、手に持った扇子の扇面には『新発見』

の三文字があつた。

『皆さんお待ちせしましたアツツツ!!!本日のメインイベントオツツツ!!!』

「…なにこれ」

カタパルトからアリーナに飛び出した一夏を待っていたのは満席となつた客席と異様な熱気だった。

『来ましたアツツツ!!我らがI S学園のセックスシンボル!!X v i d e o s 動画再生回数1億4000万の男!!織斑姉弟のエロい方こと織斑一夏だアアアツツ!!!』

「うおおおオオオオオオオオオツツツ!!!」

放送室から発せられる怒号にも似たアナウンスが客席に座る観客達のテンションのボルテージを加熱させる。観客は実況の思うまま、燃料要らずのドラッグカーの如くそのテンションをフルスロットルで上げ続けた。

その熱気に一人置いてけぼりを食らう一夏、そんな一夏を無視して更に実況がアナウンスを続ける。

『続けて選手入場オオオオオオオツツツ!!!』

箒の専用機『紅椿』は搭乗者の能力を増大する単一能力仕様を有している。箒が一夏の事を強く想う度に、その力は飛躍的に高まるのだ。

耳障りの良い言葉で装飾してみたが、実態は箒が一夏と「やりたい」と思えばその都度パワーアップしていくという中々酷い力なのだ。

前回はその力は『銀蛸』に振るわれ見事『銀蛸』を倒したが、今回は他でもない一夏本人にその力を振るわれるのだ。

「一夏…なんだその格好は…誘っているのかあ…？」

「お、俺だつて好きでこんな格好してるんじゃないよー！」

「言い訳をするな一夏！男なら正々堂々私に躰を捧げろー！」

一夏はここで確信した、この変態はスーツのテストなどどうでもいいのだ。要はこのテストを大義名分として自分のカラダを好き勝手にするつもりなのだ。

「それに…楯無会長の提案を受けたのは私だけではないぞ一夏、不本意だがな」

「なん…だと…!？」

それは一体どういう意味だという一夏の台詞を獣の雄叫びが遮った。

「ウホオオオオオウツ!!!」

一夏の背後から咆哮が轟く。何事かと振り向くと、一夏が出撃したカタパルトデッキから見慣れた獣の姿が現れた。その獣の名を一夏が呼ぼうとした瞬間、アリーナに再び

爆音が響いた。

『出たアアアアアア!!英国が生んだ蒼きゴリラ!!織斑一夏のバナナに釣られてやって来たのはアアア!!そう!セシリア・オルコットだあああアツツ!!』

「ウホホウホウホッ」

「セシリアまで…」

専用機『ブルー・ティアーズ』を纏って現れたセシリア。右手にはライフル、左手にはバナナが握られ、こちらにも戦闘準備は万端だ。

そして今度は箒が出てきたカタパルトデツキから何者かがアリーナに現れた。

「コーホー…」

『来たッ!中国4000年の歴史が産んだミニ・ダース○イダー!!もう不人気とは呼ばせない!!新たな属性を引っさげて現れたのは凰鈴音だアア!!』

「コーツ…ホーツ…コーツ…」

「鈴…それ前見えてるのか?」

「ホーツ…ホーツ…」

一夏に向かって親指を立ててサムズアップをする鈴、とりあえず戦闘を行うには支障はないようだった。

『ふふっ…驚いてくれたかしら?』

アリーナに楯無の声が響く、声色には愉悅が入り交じっており、顔こそ見えないがきつと笑っているのだらうという事が一夏にはわかった。

『密かに人を集めた甲斐があったわ、見なさいこの光景を！観客席は超満員よ！』

「一体何が目的なんですか楯無会長！」

『ふふふつ…よくぞ聞いてくれたわね！それは…』

このような大仕掛けを施したからには何か裏があるのではないかと一夏は楯無を問いたです、含みのある笑みから一体どのような思惑が発せられるのかと一夏は身構えた。

『……………面白そうだからよ!!』

特に何もなかった。

こうして楯無の思いつきに端を発した紐ビキニ姿の少年とゴリラと変態とダースベ
○ダーのパチモンによるタッグマッチという名の見世物の火蓋が切って落とされるの
だった。

異様な光景と熱気に一夏はドン引きしている。その側で相変わらず箒は刀を舐めまわし、ゴリラはバナナを貪り、ダー○ベイダーはあの独特な呼吸音を発しながら無言で佇んでいる。

「誰か…誰かまともなヤツは居ないのか…？ そうだ千冬姉は…？」

一夏は狼狽えながらも周囲を見渡し姉を探す。この学園で恐らく唯一正気を保っているであろう実の姉を。幸いな事に一夏はすぐに千冬を見つけていることが出来た。

「千冬姉…なんでそこに…！」

実況席の隣、解説者席に死んだ様な目で座る姉の姿を。

『解説は初代ブリュンヒルデこと織斑姉弟のエロくない方でお馴染みの織斑千冬先生ですー』

『楯無、この騒ぎはなんだ』

『いやーたまにはこういったイベントも必要だと思いましてー』

『私は一夏の新スーツのデータを取るからと聞いてココに来たんだが』

『もー織斑先生かたーい！ そんなんだから結婚出来ないんですよー』

『とりあえず黛と楯無、お前から後で生徒指導室な』

『いやーん職権乱用ですかー!?!』

『おおっとそうは行きませんよオ!?! ジャーナリズムは権力になって屈しな……………』

実況席のマイクが硬質な打撃音を拾った。暫しの沈黙の後、実況席から再びアナウンサーがアリーナに響いた。

『えー……ハイ、組み合わせは織斑一夏&セシリア・オルコットVS篠ノ之箒&凰鈴音で……ハイ、始めたいと思います』

薫子の随分とトーンダウンした声の実況席から届いた、ジャーナリズムは権力には屈しなかったが暴力には屈した様だ。ペンは剣よりも強しというのは先人達の誤りだった。

薫子のあまりの変わりように観客達も察したのか、その熱狂もだいぶ抑えられた。

「……ヌゲー」

「ヌゲー……」

観客達の小さな声が静かになったアリーナに響いた。一夏を脱がせたいという意味はそれでも変わらなかつた様だ。

「千冬姉すげえ」

混乱した会場を一瞬で鎮めた姉の力(?)を改めて知った一夏は姉への尊敬をより強めた、千冬姉って凄い。

『はいでは……ヨードン』

随分とテンションの下がった薫子の号令により一夏と変態とゴリラとダーズベ○ダーの戦いは始まった。あんまりにも唐突だったため一夏とゴリラとダー○ベイダーの三人は「え？」といった様子で戦闘準備すらままならなかった。

そう、一人を除いて。

「一夏アアアアアアアッ!!!」

「!?」

先程から刀を舐め回して戦闘準備を整えていた箒は涎を垂らしながら一夏目掛けて脇目も降らず突撃した。狙いは一夏ただ一人。

「ウホッ!!!」

それを阻むのはゴリラ、いやセシリアと呼ぶべきか。いやゴリラだ。

ゴリラが箒の行く手を遮る。片や接近戦を主軸とした第4世代機、片や遠距離からの射撃及び狙撃を重視した第3世代機。搭乗者の練度に差はあるものの少なくともこの距離（レンジ）に於いて有利なのは箒だった。

「ホウウホウ!!」

そう、だった。ここで何故過去形を使用したのかというと。それはセシリア・オルコットが人間であればという話だ。

ゴリラは左手にもったバナナを一気食いすると右手に持ったライフルを箒に向かつ

て投げたのだ。ゴリラの突然の奇行に箒は刀を横薙ぎに振るって弾く。

文明の利器の使い方を忘れた哀れな獣のささやかな抵抗と箒は鷹を括った。それがいけなかった。

「!?」

突如箒の視界の真下から湧くようにセシリアの顔が姿を表した。

箒が横薙ぎに振った刀を構え直すのに要いた1秒にも満たない、その僅かな秒単位の時間でセシリアは箒の懐への侵入を完了していた。

(タツクル?今のライフルを投げたのは私の隙を作る為?)

布石、ブラフ、騙し討ち。様々な言葉が箒の脳裏をよぎる。しかし今はこの状況への対処が先決だ。

「墳ツ!!」

「ウツツホツ!!」

セシリアの脳天を刀の柄が急襲した、篠ノ之流剣術はただの剣道にあらず。古来より合戦にて使われてきた実戦剣術、戦技。それこそが篠ノ之流の真の姿である。

「ぐツ!!」

しかしセシリアも負けてはいない、箒の胸元の中心部を痛みが襲う。肘だ、セシリアの肘が箒の喉と胸の間にめり込む。

箒がその痛みには怯んだ隙にセシリアは距離を取り、再び一夏の前に立った。刹那に起こった高い次元（レベル）の攻防に息を呑む一夏。

「ただの畜生と侮っていたが…」

「ウウウ…ホオウ…」

両者の痛みが引いたのだろう、再び構え直す両者。箒は刀を正眼に構え、セシリアは顎を引くと拳を握る。

「邪魔だ、獣。そこを退け」

「ウホッ！」

「私とて獣と交合するのは抵抗がある、興味はあるが」

箒のさり気ないカミングアウトに引く一夏、音声が観客に届いていない事が幸いだ。「仕方がない、退かぬなら実力行使を持って退けるまで…」

箒の体が光を放つ、一夏はその光を知っていた。「銀蛸」を圧倒したあの輝き、あの力。やりたいと思えば思うほど力を増す箒の専用機が待つあの酷い単一機能だ。

「ウホオオオオウ!!!」

セシリアも負けてはいない、突如セシリアの身体が金色の光を放った。全身の毛を逆立たせ、金色に輝くオーラを纏うセシリア。ドラオンボールみてえだな一夏は思った。

『序盤から凄まじい展開ですね!!セシリア選手の身体が光っていますが織斑先生はこれは一体どういう事なんでしょうか!?!』

箒とセシリアの目まぐるしい攻防に当てられたのか、実況席の薫子も元のテンションに戻り、隣に座る千冬に解説を促す。

『…いや、何アレ知らん』

『え?』

『怖っ』

対する千冬は突然の超展開に何時ものキャラを忘れて引いていた。

アリーナで展開されるド○ゴンボールみたいな試合展開に一度は静まった会場のポルテージは再燃し、客席も喧騒を取り戻しつつあった。

賑わうアリーナとは対象的に学園の校舎は静まり返っていた。生徒の居ない校舎と
いうのは静かなもので、校内から発せられる音といえば精々職員室に居る教員のパソコン

ンのキーボードを叩く音と、ほぼ全員の生徒がアリーナに行ってしまった為に暇を持て余した食堂のおぼちゃん達の話し声程度だった。

「何なんだアレは…」

静かになった学園の後者の屋上に響く少女の声。海岸から防風林を抜けて校内に侵入したフード姿の少女は双眼鏡を使ってアリーナの喧騒とその中心で激しい戦闘を繰り広げる二機のISの姿を観察していた。

彼女もまた、遠く離れた解説者席に座る千冬と同じくその常識はずれの光景に引いていた。双眼鏡には光る変態と光るゴリラの剣と拳による壮絶な戦いが映る。

「ISは人をサ○ヤ人にするというのか…？となるとISの開発者である篠ノ之束は全人類の女性をサ○ヤ人にする事が目的だったのか…？」

フード姿の少女は篠ノ之束に関する誤った見解を深めながら観察を続ける。しかし流石に目が疲れたのか、少女は双眼鏡を激しい戦闘を繰り広げる二機とは対象的に静止しながら睨み合いを続ける別の二機、一夏とダー○ベイダーの二人に向けた。

「ヤツらは…あの出来損ないは何をしている？そもそもあの格好は何だ？…なんて淫らな…」

アリーナで繰り広げる剣と拳の応酬、その横で一夏とダースベ○ダーこと鈴は無言の睨み合いを続けていた。両者は既に武装を展開しており、臨戦態勢を整えていた。

剣と拳がぶつかり合う音を背景音にして、無言の牽制を続ける二人。それはさながら時代劇で描かれる侍同士の決闘の様だ。

「…行くぞ、鈴！」

先に沈黙を打ち破ったのは一夏だった。裂帛の気合いを持って鈴に斬りかかろうとする一夏。

「コー……ホー……あ、ごめん先にコレ外していい？」

「え？」

一夏は鈴の突然の言葉に思わず上段に構えたまま静止してしまった、開いた無駄毛ひとつ無い腋と反った綺麗な白い背中がいやらしい。

対する鈴はというと装着している黒いマスクをいそいそと外し始めた。

「いやー……ゴホゴホッ……本国の連中がアタシのこと心配してコレ送ってくれたんだけどね？」

「……………」

「これ付けてると…ゴツホツ…コーホー位しかまともに喋れなくてさー」

咳き込みながら喋る鈴。その説明に知らんがなといった表情の一夏、困ったように下がった眉毛が愛らしい。

「やっぱキャラ付けの為に安易なもの付けたりしちや駄目よねー展開も面倒くさくなるし、何より作者も描き辛いし」

「…展開？作者？」

訳の分からない事を口走り始める鈴、その様子に一夏はどうとう鈴の頭がおかしくなったかと心配する。敵を心配するなんて一夏はなんて優しいんだ。

「さあ準備も終わったことだし！やるわよ一夏！」

「お、応っ」

一夏はとりあえず目の前の試合に集中する事にした、後この戦いが終わったら鈴を学園から距離が近い脳の病院に連れて行ってあげようと思った。

アブナイ一夏（後編）

校舎の屋上から双眼鏡を使ってアリーナ内で繰り広げられる戦いを観察している黒いフード姿の少女。彼女の着ている衣服の胸ポケットに仕舞っておいた端末から振動が響いた。

「…今いい所なんだが…」

少女は鬱陶しそうな様子で端末を取り出し、呼び出しに応答した。端末を耳に当てるといくら若作りしようとも加齢を隠せないババアの低い声が聴こえた。

『M、今どこにいるの？』

「…スコール、私は今…」

『すぐに帰ってらっしゃい、お母さん心配だわ』

また始まったとフード姿の少女『M』はため息をついた、Mの現在の上司である『スコール』は妙な癖のある女だった。見込み（スコールの視点から）のある歳若い女や若い男を見るとつい「構ってしまう」悪い癖が。

「スコール、もう何度言ったかわからないが私は…」

『まあ！お母さんがこんなに心配しているのに！』

「…」

話を通じない、今Mとスコールは同じ言語を話している筈なのに、その意思疎通には大きな困難を伴っていた。

Mはある目的の為に亡国機業に入ったが、こんな頭のおかしい女が居るなら他の有力な組織に入るべきだったと己の浅はかさを呪った。

『ほら、オータムも心配しているわよ』

『Mー！早く帰ってこいよー！今日の晩ごはんはカレーだぜ！』

「……………」

オータム、亡国機業におけるMの同僚でスコールの恋人。そしてスコールの性癖によつて“壊された”哀れな女。

Mがまだ亡国機業に入ったばかりの頃は粗暴ではあったがまだ辛うじてまともだった。少なくともMをカブトムシ取りに連れ回すなんて子供みたいな事をしない程度には。

『早く帰ってこないとオータムが全部食べちゃうわよ』

「スコール、今私は…」

『お母さん待つてるからね』

その言葉を最後にスコールは通話を切った、端末を仕舞うM、その後ろ姿は年齢には

「ゲホゲホツ…喰らいなさいッ」

鈴が咳き込みながら放ったのは彼女の専用機『甲龍』の特殊兵装『衝撃砲』だ。

ちなみに甲龍と書いてシエンロンって読むんだって、おかしいね。

「くッ！」

一夏は軀を翻してそれを回避した、姿の見えない不可視の弾丸を幼少期から学んでいた武術由来の巧みな体捌きで躲す一夏。

反り上がり、翻る一夏の軀を包むのは四肢“のみ”を硬質ナノマシンで覆い、そして胸と胴とち…下腹部を衝撃の一切を吸収する透明ジェルスキンを内包する専用ISスーツだ。

しかしそのままでは一夏の大切な部分が透明故に丸見えになってしまう為、透明ジェルスキンの部分、胸とちん…下腹部を辛うじて紐ビキニで隠しているだけというところもねエ位にスケベな姿だ。

そんな姿をした少年がまるで少女を惑わすかのような動きをするのだ、無論一夏本人が意図してこのような動きをしている訳ではない。偶然だ。

「!?……………ッッッ」

見る者全てを魅了する艶やかな姿に鈴は鼻血を垂らしながら魅入った。無自覚な

フェロモン攻撃が鈴の呼吸器を襲う。

鈴にしてみればたまったものではない、あのスケベボディの持ち主が様々な角度から自分に軀を見せつけながら誘惑するのだから。

「どうした鈴！そんな攻撃じゃ当たらないぜ！」

お前のせいで狙いがまともには付けられないんだよと鈴は声を大にして叫びたかったがそれが出来ない、最早このフェロモンは凶器だった。剣一本しか武装のない『白式』に新たに備わった凶器。それが一夏のあのドスケベボディだった。

「今度はコッチから行くぜ！鈴ッ！」

「!?」

冗談じゃない、遠距離ですらあのフェロモン攻撃に私はもうままならなくなっているというのに接近までしてくるのかと鈴は狼狽えた。

「うおおおおおおお!!」

「うわっげホッ…来たっ！」

気合いの掛け声と共に一夏の専用機『白式』の単一仕様『零落白夜』が発現し、それと同時に一夏の腋と胸とヘソと太ももが鈴に迫る。

戦術のせの字もない単純な勢いと機体の性能に任せた突撃、本来ならば代表候補生たる鈴には通用しない単純な攻撃だ。しかし今は違う。一夏のフェロモンにより蝕まれ

た鈴の呼吸器が鈴の行動を著しく阻害していた。

「ゲホゲホツ……ちよ……一夏、近ツ」

「うおおおッ！」

やめろ、近い。遠目で見るのと至近距離から見るとは一夏のドスケベボディの破壊力は全く違う。光の刃とキメ細かい肌が迫る。鈴は一夏の太刀筋を必死に捌きながら極力一夏の肌が見える部分を視界に捕らえないようにする。無理だ、この距離では嫌でも見える。

「ゲツツホツッ！やめ、一夏……エロ……！」

「やああああッ！」

防戦一方の鈴に対して一夏はここぞとばかりに鈴を攻め立てる。

一夏の閃く刃と弾ける汗のコラボレーションが鈴に襲い掛かる、それと同時に見える、否。否が応でも見えてしまう一夏の腋とヘソと太腿が鈴の攻撃を阻む。

正に攻防一体。阿呆らしいが呆れるほど効果的な戦術だ。まあ一夏は特に意図する訳でもなくただ戦つてただけだが。

（不味い……このままじゃ負ける……！）

鈴は目の前に迫るドスケベボディに対処しながら必死に策を練る。どうすればこの状況を打開出来るか。どうすれば勝つことが出来るかを。

「たアアアアッ！」

「……………」

一夏が動く度に揺れる、紐ビキニの紐。そう紐。ちなみにこのタイプのビキニの両サイドにある紐は飾りである場合が殆どだ、夢がないね。

「どうした鈴っ！この勝負、このまま貰うぜ！」

「……」

しかし今一夏が身につけているコレはどうなのだろうか？あの水色頭の生徒会長がそこを妥協するだろうか？鈴の中でそのような疑問が浮かんだ。

(…確か公式ルールだと試合中に衣服が破けた場合は負けになるんだっけ…)

鈴が祖国の代表候補生となる前に読んだ電話帳みたいに分厚いISの勉強の参考書には確かそう書かれていたと鈴は記憶していた。相撲で言うところの所謂『不浄負け』である。

(……………)

一夏の腰の部分で揺れる、紐。リボン結びで結ばれたその姿はまるで深い森の中に迷い込んだ人間を惑わす妖精の羽のようだ。

（妖精さん…）

ごめんね紐の妖精さん、でも妖精さんが悪いんだよ？妖精さんが余りにも魅力的だから。人間はつい妖精さんに手を伸ばしてしまうんだ。

そう、それは紐の妖精の仕業。そう結論付けた鈴の行動は早かった。

「あ」

「えっ？」

白熱するアリーナに突如訪れた静寂。何事かと客席を見渡す一夏、観客たちの目は皆一夏と鈴が居る方を向いていた。

もしかしたら鈴の方を見ているのかもしれないと一夏は首を鈴の方に向けた。そして見た、見てしまった。

鈴の専用機のマニピュレーターに包まれた手に握られた黒い布のような物を。

一夏は一瞬それはハンカチではないかと思ったが、にしては余りに小さく、そして生地が薄かった。今時1000円ショップでももつと上質なものが買えるのではないかと思える程の薄さだ。

そして何よりも、その黒い布から伸びた細く長い紐がそれがハンカチではないということを一夏に示していた。

そういえばさつきから“下”が寒いなど一夏は感じた、そして観客たちの視線も何やら自分の“下”に集中している事一夏を次第に察した。

「……………」

鈴に向けていた視線をゆっくりと自分の下半身に向ける一夏、彼の疑問の答えはそこにあつた。

「……きり……」

一夏の視界に映るのは紐ビキニのトップに覆われた自分の胸と、最近筋トレの成果が出てきた腹筋と。

「きゃー—————!!!」

むき出しになった自分の一物。

「妖精さん……ふふ………ゴハア!!」

女子のような悲鳴を上げてその場にしゃがみこむ一夏と、紐ビキニを手握りしめたまま吐血しながら膝から崩れ落ちる鈴。

一夏の丸出しになったたち……下腹部からの強烈なフェロモンが鈴の癒えかかっていた呼吸器を粉碎した。紐の妖精の誘惑の代償は高く付いた様だ。

「一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!一夏!」

客席は一夏コール一色に染まった。見たいものが見れた喜び故か。

『…えーと…両チームの選手の片方が戦闘不能となった為、この戦いは引き分けとします!』

『では我々はこれで……あ、織斑先生ちよつとそれは死…』

不穏な単語を遺して断絶する薫子と楯無の声、今頃放送席は惨劇の様相を呈している

学生寮の廊下にある自販機でお茶を買って近くのベンチに一人深く腰掛けた一夏は、深い溜息を着きながら今日の狂騒を思い出していた。

寮の廊下は今は暗い。せいぜい自販機の光が狭い範囲を照らしている程度だ。普段なら当直の先生が寮の灯りを付けるのだが今は教員全員が体育館に向向いている為に、夜も遅いというのに暗いままだ。

結局あれから暴徒化した生徒達がアリーナから学園の校舎になだれ込み、窓ガラスを割ったり火炎瓶を廊下に投げたりなどの破壊行為を行った為に午後の授業は潰れ、千冬が指揮する教員たちによるＩＳを使用した暴徒鎮圧にその後の時間は充てられた。

学園が静けさを取り戻したのはそれから時計の針が午後１０時を回ろうとする頃だった。

「千冬姉凄かったなあ」

木刀で生徒達が持ち出した訓練機の『打鉄』を一刀両断するんだもん。やつぱり千冬姉は凄いと一夏は呑気な事を思いながら買ったお茶で喉を潤す。

今回起こった暴動（？）は学園のほとんどの生徒が加担した為、ごく数人の生徒を残して今は体育館で反省文５０枚の刑にかけられている筈だ。

ほぼ無人となった学生寮は静かで、この学園に来てからやかましい位に騒がしい毎日をご過ごしていた一夏にとっては何だか新鮮な気持ちだった。

「……ん？」

一夏がそんな風に思っていると、何者かの足音と人影が見えた。自販機の光しか光源のない暗い廊下に響く音というのは少し不気味に感じるが、一夏はそれをさほど恐怖とは感じなかった。現在進行形で貞操の危機に晒されている為か。

「何か買いに来たのか？」

コーラか？と無警戒にその人影に話しかける一夏、しかし人影は一夏の呼びかけには答えない。その様子に怪訝に思う一夏。

人影はゆっくりと一夏の座るベンチにまで近づいて来た。

「……？」

一夏の目がその人物の輪郭を徐々に捉え始める、そしてその人物が学園の制服を着ていないという事も。

「……………？」

一夏は思わずベンチから立ち上がると後退りでその人物から距離を取った、自販機の照明で照らされている辺りまで後退する一夏。

そして自販機の明かりが一夏の目にその人物の正体を明かす。

「ようやく会えたな、出来損ない」

「何だ……………？」

黒いフードを頭から被った少女、それがその人物の正体だった。無論このような人物は一夏の友人はおろか知人にも居ない。

「……………誰だ？ お前は！」

「…誰か、だと」

不敵な笑みを浮かべるフード姿の少女、そして少女は被っているフードを捲るとその顔を一夏に晒した。

「私はな」

驚愕する一夏、その顔は余りにも似ていた。自分の唯一の肉親に。

「織斑マドカだ」

一夏目掛けてマドカが投げた飛来物を一夏は躲すことが出来ない。余りの衝撃と混乱だった。

飛来するカブトムシの角は一夏の目前に迫っていた。

マタニティ・オブ・アビス

風を切り裂き、鋭い角を伸ばして一夏の眉間目掛けて真っ直ぐにロケットの様に飛ぶカブトムシ。

一夏の命を狙って学園に侵入した『亡国機業』の構成員『M』こと、織斑マドカは己の宿願の達成を確信していた。

如何せん締まらない凶器を用いての殺害だったが、これで我が悲願は達成される。

思えばここまで長い苦難の道のりを歩んできた。母を名乗るイカれた上司の家族ロールプレイに付き合わされ、壊れた同僚にカブトムシ取りに連れ回され。

だがそれももう終わりだ、この馬鹿面晒して呆けてる憎き織斑一夏を葬れば全てが終わる。

「…………ツ!？」

しかし現実には非情だった。マドカの悲願は果たされることはなかった。

何故なら一夏目掛けて放たれたカブトムシは一夏の眉間を貫くことなく、一夏の額あ

と数センチの所で静止していたのだから。

六つの肢を広げて空中で停止するカブトムシ、運動力学の一切を無視した現象に目を見開く一夏とマドカ。

そしてその現象の元凶は一夏の背後に居た。

「おひいー」

輝く左眼、そしておしやぶりを啜え右手を正面に掲げた黒鉄の赤子。ラウラ・ボーデヴィツヒが自身の専用機『シユヴァルツエレージェン』の単一仕様『停止結界』を発動し、一夏に迫るカブトムシを止めてみせたのだ。

「貴様ツ!?!」

「ばっふっ!」

ラウラは左手を使って身動きの取れないカブトムシの胴体を掴むと、それをマドカに投げ返した。

飛来するカブトムシを手で払い除けるマドカ、吹き飛ばされたカブトムシは哀れにも壁に激突しそのまま床に落ちていった。

「おひいーおひいー」

「くっ…」

マドカは苦虫を噛み潰したような顔で一夏とラウラを一瞥しその場から立ち去る。マドカの実力ならば目の前に立ち塞がる赤子を斥けた後に一夏を殺めるなど造作もない事だろう。そうしないのはこれ以上騒ぎを大きくする事による増援の到着を懸念しての事だ。

ここは『IS学園』世界で唯一のISの操作技術及び整備技術を学ぶ教育機関であり、多数の優秀な操縦者を抱えている。早い話が世界で最もISを保有する団体だ。

今でこそ性のことで頭がいつぱいの性欲猿どもとはいえ、この学園のセックスシンボルに危害を加えたとあれば彼女らのマドカに対する攻勢や追撃は凄まじいものとなるだろう。

現に今、ラウラという増援を許してしまったマドカが取るべき行動は逃げの一手のみである。ついでにお母…スクールへの言い訳も考えておかねばならない。

「チツ…次こそは」

「あつオイ!?!待てっ」

「ばっぶっ…ばっぶばっぶッ」

背を向け全力疾走でその場を去るマドカ、その背を追おうとする一夏をラウラが制止した。疾走するマドカの姿は夜の闇に隠れ、やがて初めからその場には誰も居なかった様な静寂が訪れた。

「ありがとうラウラ！助かったぜ…」

「ぼぶぼぶ」

ISを解除し両足の裏を廊下に付けるラウラ。その横で一夏は命を助けてくれたラウラに感謝を述べた。

しかし今のラウラは赤子同然、暖簾に腕押し。糠に釘。意味は無いように思えた。

「…ぼぶ…ふあ…嫁よ、大丈夫か？」

「!？」

なんとラウラは口からおしやぶりを取るとそのまま喋り始めたのだ。突然の事に驚く一夏、お前喋れたのかと。

「シャルロットが居ないからようやくおしやぶりを外せる」

「ラウラお前いつもの赤ちゃん言葉はどうした!？」

「改めて…無事だな？嫁よ」

「…お、おう」

何事もなかったかのように喋り始めたラウラ、今までのあの赤ちゃんみたいになっていたのは演技だったのかと。とにかく一夏はラウラに聞きたいことが多すぎた。

「お前喋れたのか…」

「当たり前だろう赤ん坊でもあるまいし」

「じゃあお前なんで今まであんな赤ちゃんみたいな事してたんだよ？」

「それは……」

ラウラが一夏の問いへの返答を答えようと口を開いた瞬間だった、未だ明かりの付かない暗い廊下の向こうから『回答』が現れた。

「ラウラ」

「……ッ!?……シャルロット……!」

シャルロット・デュノア、一夏とラウラの同級生でありフランス代表候補生。そしてラウラの自称母親だ。

その包容力と行動力は高く、今では勉強と育児の傍ら学園内外にて『ママ会』なる謎の集会を行っているとの噂もあるやべーやつだ。

「もうおやすみの時間でちゅよー」

「マ……シャルロット、もうこんな事は……」

まるで赤子をあやすかの様な振る舞いでラウラにゆつくりと近寄るシャルロット。対するラウラの顔には明らかな怯えがあった。

一夏は目の前でまたしても繰り広げられる謎の展開に着いていけず、無言で立ち尽くして居た。

「そっか……ラウラ、また」戻ろうと」しているんだね」

「シャルロット…お前は私の母ではない、お前は…」

「違う」

シャルロットは床に落ちたおしゃぶりを拾うとそれを手にしたまま一気にラウラとの距離を詰めた。

「ツツツ…!!!」

「お前は私の赤ちゃんだ」

おしゃぶりをラウラの口に突き入れるシャルロット。悶えるラウラの顔を自分の顔の間に寄せると念仏のような言葉を唱え始めた。

「お前はラウラ・デュノアだ、私が腹を痛めて産んだ私の可愛い娘だ」

「むぐつ…あ…」

「安心しろ、また器具を使ってみっちり再調整するからな」

「あ…あ…」

「還れ、ラウラ。原初の水面へ」

黒々としたシャルロットの瞳がラウラの眼を射抜く。その瞳は万華鏡の中の際限のない色彩の深淵を思わせるかの様で、ラウラはシャルロットの中の母性の深淵に囚われ、やがて巢立ちの兆しをもそれに飲み込まれていった。

ゆつくりと瞼を閉じるラウラ。その顔は先程の侵入者へ敵意を向ける軍人の顔ではなく、母の胸で微睡む赤子そのものだった。

眠りに堕ちたラウラを抱くシャルロット、その顔は教会のステンドグラスに描かれた聖母を思わせる程の深い慈愛に満ちていた。

「シャル……シャル……？」

そんな様子の子のシャルロットに一夏はなけなしの勇気を振り絞って、恐る恐る話しかけた。

「ん？どうしたの一夏」

「今のは、なんだ？」

「ん？今のは何のこと？」

「いや、今のは…何だよ？」

「んー？」

ぶりつ子みたいな顔でとぼけるシャルロット、こいつシラを切る気かと一夏は尚もシャルロットを問い詰めた。今自分の目の前で起こったアレはなんだったのかをシャルロットに問いかける一夏。

「…ふう…」

シャルロットはため息を吐くとラウラを抱き抱えながらゆつくりと一夏の目の前に

近づいた。

自然と後退りをする一夏、しかし直ぐに壁に配置された自販機に退路を阻まれた。

「一夏、ボクね」

シャルロットは自分の懐から真新しいおしゃぶりを取り出す、おしゃぶりの表面が自販機の光を浴びてプラスチック特有の光沢を放っている。

それは母性への水先案内人のように一夏には見えた、出口のない母性の深淵へと誘うプラスチック製の妖精（ピクシー）がシャルロットの掌で踊る。

「一夏とは良い友達でいたいと思ってるんだよね」

慄く一夏をシャルロットは上目遣いで見上げる、黒々とした大きな瞳が一夏に奈落の底を思わせた。

「育児って愛情が一番だと思うけど、計画性もそれと同じくらいに大事だと思うの」

その後一夏はシャルロットと別れた。一夏はその背中を暗がりに隠れて見えなくなるまで眼を離すことが出来なかった。

目を離れた隙にシャルロットがおしやぶり片手に襲ってくるのではないかという不安が一夏の中であつたが、幸いそんなこともなく一夏は胸を撫で下ろした。

暗闇に消えていくシャルロットの背中ではまるで闇に還つていく魔物のようだった。

「…千冬姉が帰つてきたら話さないとな」

とりあえずは千冬姉に報告しよう和一夏は考えた。千冬姉に似た顔をしたやつにカブトムシを投げつけられた事、ラウラが赤ちゃんから元に戻つた事、そしてシャルロットがラウラを再び赤ちゃんに戻した事。報告する事は山積みだ。

そして寮に帰ってきた千冬に一夏は先程の事を話した、そして千冬はとても心配した様な顔で「遂に壊れた」「とにかく休め」「明日病院に連れて行ってあげるからな」と言つた。一夏は何故だろうといった顔でそれを聞いていた。

チフユにおまかせ! (前編)

「まんま……まーま……」

「あっ!?……………ン……………ッ……!」

深夜、織斑一夏はラウラ・デュノアに自分の胸の左の蕾を吸われる感覚で目を覚ました。

すぼませたラウラの唇は一夏の乳首を母乳をせがむ様に吸い付き、ラウラの口内で転がすかの様に弄ぶ。そして一夏の右の乳首を親指で触れながら右胸全体を揉む。

「や、やめろ……ラウラあ……ッ!」

ラウラの舌先が一夏の乳首にある筈のない乳腺を掘り当てようと一夏の乳首を転がし、舐り、また回し、吸う。絶え間ない断続的な責めに悶える一夏。

「お前ッ…… また〃 こんな……ッ!」

「まんま」

「俺は……ッお前のッ……ママ、じゃねエ!お前の、ママは……シャルだ!」

そんな訳がないのだが少なくともこの学園においてラウラ・デュノアの母親はシャルロット・デュノアなのである。これは学園の常識だ。

「もう、ラウラったらまた一夏の部屋に忍び込んで…」
「シャルツ！こいつ何とかしてくれッ！」

開け放たれた部屋のドアからシャルロットがやれやれといった顔で入室しベッドの上で練り広げられる母娘の交わりを見下ろす。

カプトムシアサシンMこと織斑マドカの襲撃から数日が経ち、学園にはひとまずの平穏が訪れていた。一夏とその周辺の人物は除いて。

特に変化が著しいのはラウラだった、シャルロットによる“再調整”は遂にラウラの精神から元あつたラウラ・ボーデヴィツヒの人格からラウラ・デュノアの人格へと“上書き”された様で、ラウラは完全に赤子と化していた。

タチの悪いことに軍人だった頃に習得したピッキングや気配を消すといった技術は忘れることなく覚えているらしく、学生寮の各部屋に無差別に侵入しては見境なく生徒達の母乳を求めるモンスターとしてラウラは生まれ変わった。

こうやって夜中の寮に生徒の嬌声が響くのはもはやIS学園にとって日常茶飯事であつた、

なんだ、平穏なんてまったく訪れていないじゃないか。

「ほらラウラ、早く戻ろっ」

「んん…まーまー」

「はあ……はあ………」

シャルロットの手により一夏の身から引き剥がされるラウラ、未だ一夏の乳首が恋しいのか自分の親指を吸っている。その一方でラウラの乳首責めから解放された一夏は胸を隠しながら肩で息をしている、朱に染まった頬が乱暴されかけた生娘を見るものと思わせた、エロい。

「はーい部屋に戻りましょうねー」

「まーまー」

「はい、一夏ママにバイバイしてー」

「ばいばー」

「……………」

一夏に手を振りながら二人は部屋から去っていった、どうもシャルロットは寮の生徒達に擬似的な育児経験をさせる事により生徒達のママ化を促進させたいらしい、性別は問わずにだ。

一夏はよろよろとした足取りで部屋の玄関の前まで向かうとドアの鍵を閉め、念のためチェーンも閉めた。そしてベッドに戻ると一夏は乱れたベッドシート上で胸の蕾の疼きを覚えながらぐったりと眠りについた、育児って大変だなあ。

「ん……んん……っ?」

それからしばらくして一夏は顔に何かに触れる感覚で再び目を覚ました、何事かと思
い一夏は自身の鼻先に触れると指先が濡れた。

水にしては妙に生暖かく、そして僅かに粘性があつた。顔にかかつたという事はそれ
は上から下に、つまり部屋の天井から一夏の寝るベッドに落ちたという事だ。

まさか雨漏りかと一夏は思ったが、よく考えるところ数日は快晴が続いている。

一夏は己の推測とここ数日の天候が合致していない事に薄気味悪さを覚えた。そし
て一夏は恐る恐る天井を見上げる。

「…ヒッ!」

「ひひっ……一夏あ…」

箒だつた、四肢の指先を天井にめり込ませて天井に張り付く箒。特徴的な長い黒髪が
天井からぶら下がる様子は古きよきジャパニーズホラー映画に登場する物の怪を思わ
せた。

一夏の顔を濡らしたものの正体は箒のよだれだつた、一夏はこの幼なじみが既に人の
身で人を辞めた怪物に見えていた。

「大変だったぞ一夏、一丁前に戸締りなぞしおつて」

「うわああああああああああああああああああ!!」

「全身の骨と関節を外して通気口から侵入する他に方向がなくてな」

「ぎやああああああああああああああああ!!」

「よだれの事はすまなかつたな、お前の寝姿を俯瞰で見てみたいなと思つてこうして天井から張り付いて見ていたらつい…な」

「ああああああああああああああああああ!!」

「…静まれ一夏ア!!」

「ああああああああああああああああ!!」

天井から黒髪を靡かせながらベッドの上で半狂乱となった一夏の上に箒が落ちてきた。一夏はそれを回避することが出来ずそのままマウントポジションを箒に許してしまう。

「ふふ…まさか無抵抗とはな…やはりお前は口では嫌と言いつつも本心では私を求めていたという事か」

無抵抗ではなくて突然の事で抵抗出来ないといった方が正しいのだろうか箒の中はそれは些細な違いのようだ。

「た、助けて誰かア?!?!」

「静かにしろ一夏！犯すぞ!!」

言動が完全に強姦魔のそれである、それで良いのか箒。良いんだろいな、うん。

箒の手が一夏の着衣の中に入ろうとするまさにその瞬間、部屋のドアから赤色の光刃の切っ先が扉を貫いてきた。木材が焼ける臭いが部屋に充満する。

「何だ!?!」

「今度は何だよ!?!」

扉を貫いた光刃はゆっくりと時計回りでドアを寸断していく、光刃が時計回りを完了すると輪切りにされたドアが倒れた。

「コー……ホー……」

木の焼けた臭いと煙の向こうから現れたのは一夏の濃厚なフェロモン攻撃を受けて再びダースベ○ダーへと戻った鈴だった。その後ろからはス○ームトルーパーの如く生徒達が室内になだれ込んで来る。

非現実な光景を前にスター○オーズみたいだなと思う一夏、異常事態の連続は彼の脳に現実からの逃避を選択させた。

「よくも私たちの織斑くんを!」

「大丈夫織斑くん!?!」

「コー……ホー……」

一夏の悲鳴を聴きつけ駆けつけた生徒達、約一名格好がおかしいが要は一夏を助けに来たのだ、優しいなあ。

「なんだ貴様らア! 私と一夏の朝までみっちり汗だく〇〇〇〇の邪魔をするなア!!!」

「そうはさせないわ!」

「織斑くんと朝までみっちり汗だく〇〇〇〇をするのは私たちよ!!」

優しくなんてなかった、コイツらも目的は一緒だった。

「かかってこい雑魚共オ!! 一夏と朝までみっちり汗だく〇〇〇〇はその後だア!!」

一夏をベッドの上に置き去りにして室内で展開される大乱闘。部屋の中は戦いの余波を受けてめちやくちやになっっていく。

一夏は女の子がしてはいけないような顔で戦う筈と生徒達とぐちやくちやになっっていく室内をただ呆けた顔で見ている事しか出来なかった。

「少し散らかっているが、あの部屋よりはマシだろう」

「う、うん…お邪魔しまーす…」

その後騒動は毎度の如く千冬によって鎮圧され、部屋をめちやくちやにされた一夏は

そう、この部屋こそ無自覚ドスケベ少年一夏がこの学園において唯一安息を得ることが出来るサンクチュアリであり、そのサンクチュアリの住人である千冬こそが一夏にとつての最後の防波堤と言えた。

「少し狭いがくつろいでくれ、その為に片付けたんだからな」

部屋の中はやや埃っぽいものの片付いていた、そして部屋の隅にはビールの空き缶が大量に入ったゴミ袋が3つ無造作に置かれており、姉の涙ぐましい努力が垣間見えた。

「あ、掃除機かけるよ」

「ない」

一点の曇りもない千冬の澄んだ瞳が一夏を射抜く、まるで穢れを知らない子供のようだ。

「…ク○ツクルワイパーは?」

「……ない」

一夏は失念していた、この姉が家ではひとつつつも家事が出来ないダメ人間であった事を。

「雑巾は?」

「ある」

千冬がドヤ顔で戸棚から取り出した、恐らく買って数回くらいしか使わなかったであろうガサガサに乾いて埃まみれの雑巾を一夏はふんだくると洗面所で濡らし始めた。

しよぼんとした顔で立ち尽くす千冬、織斑姉弟のパワーバランスは家事に関してのみ覆るのだ。

「あ、どうせなら着替えよう」

一夏は自分がまだ制服姿のままだった事に気づくと玄関に置いたままの自室から持ち出した衣類や私物の入ったバッグを取りに向かい、そしてまた洗面所に戻ると着替え始めた。

衣擦れの音が室内に響く、制服の上着を脱ぐ音、ベルトの金具が揺れる音、それを耳にした千冬は改めて気付いた。あのドスケベボディの持ち主が着替えているのだと。

(……………イカンイカン……………)

実の弟相手に「ドスケベボディ」などと頭の悪い表現を使うなどと。

しかし千冬生来の脅威の身体能力が否が応でも一夏の着替える音を聴いてしまう、嫌でも想像してしまう。あの何度と見たあの女を惑わす淫猥な駄を。

「千冬姉ー雑巾もう一枚ないかー?」

二人でやった方が早く終わるから言いながら洗面所の角から顔を出した一夏、同時に角から見えたむき出しの一夏の白い肩が千冬の視線を釘付けにする。

「……………あ、ああ、あるぞ…」

ロボットのようなきこちない動きでもう一つの雑巾を戸棚から引っ張り出す千冬、が
んばれ千冬。お前こそこの学園において一夏に残された最後の防波堤なのだから。

洗面所から戻ってきた一夏はTシャツと短パンというラフな格好で千冬の前に現れ
た、若く白い膝が目に見えた。

「じゃあ始めようぜ」

「な、何を!？」

「いや、掃除…」

「あ…ああ」

「ていうか千冬姉その格好のまままで掃除するのか?」

未だスーツ姿のままの千冬に着替える事を勧める一夏、そういえばそうだったと千冬
は着替えを持ってくると洗面所に向かった。

(…一夏の匂いがする)

いつも見慣れているはずの空間が千冬の目にまるで初めて目にする異世界のように
感じられた。匂いが違うだけでここまで変わるかと千冬は驚嘆する。

「(、)これは…」

洗濯機の上に畳んで置かれた一夏の制服が千冬の目に飛び込んでくる。綺麗に畳ま

れた制服とYシャツはほんの数分前まで人が着ていたものである事を忘れる程だ、このまま服屋に陳列させても違和感ないだろう。

いや、そんな事は千冬にはどうでも良かった。千冬は一夏の制服の襟をガン見していた。恐らく一夏の匂いが最も濃く残るであろう箇所だ。

自然と生唾を飲む千冬、その手は自然と一夏の制服へと伸びていく。

「はあ……はあ……」

読者に問おう、いい匂いのするドツツツスケベなカラダをした美女が着ていたドツツツスケベな匂いが残る服を目の前に置かれて何もしないのか？

「ん……ふっ……」

答えはN oだ。千冬は制服を驚掴みにすると襟を鼻に押し付けた。

千冬の鼻腔から脳へと届けられる、一夏のドスケベフェロモン。千冬は自身の脳髓に電流が流れるような感覚に身悶えした。

「くツ……ハ……ツ……あ!!」

恍惚とした顔で弟の濃厚なフェロモンを嗅ぐ千冬、自然と腰が浮いてしまう。躰をくねらせながら自分の身の内に唐突に湧き出てきた“疼き”を千冬は必死に抑えた。

た。一夏の平穏な学園生活を守る最終防波堤は今、ゆっくりと決壊を始めようとしている。

チフユにおまかせ！（後編）

一夏の脱ぎたてホヤホヤの制服の襟に残るフローラルな香りを鼻腔いっぱい吸い込み脳汁ドバドバキメキメビシヨビシヨ状態となった千冬。

パキパキにキマった彼女は理性と欲望の狭間で悶えながらなんとか持ちこたえていた。

「千冬姉ーまだかー？」

「……………ハッ!?!…あ、今行く…」

リビングからの一夏の呼びかけで現実を引き戻された千冬は急いで着替えを済ませ、呼吸を整えると平常心を保ちつつ一夏の元へと向かう。

「どうしたんだよ千冬姉？顔が赤いぞ、風邪か？」

「何でもない、さあ掃除を始めるぞ」

何時もの凜とした表情で掃除に取り掛かる千冬、ほんの数分前まで弟の脱ぎたての制服に顔を埋めて躰をくねらせて身悶えしていた女とは思えない姿だ。

（落ち着け私、そうだ考えてもみれば私は一夏がこの学園に入るまでは同じ屋根の下で暮らしていたんだぞ）

雑巾がけをしようとその場で屈む一夏の背を見ながら千冬は平常心を保とうと思考を巡らせる、そうすれば何か気が紛れるだろうと。

(そもそも実の弟相手に欲情するなど、ありえん、この私が…)

小娘共の熱気に当てられたかと己を恥じる千冬。その一方で一夏は雑巾がけを始めるために手に持った雑巾を床につけると同じく膝を床につけ、腰を落とすと尻を上げた。あろう事か未だ悶々としている千冬の方に。

(そうだ、大体私は弟に対してそんな邪な感情など……)

一夏の程よく肉が付きそれでいて形のいい引き締まった尻が千冬の前に突き出される。尻の割れ目に短パンのナイロン生地が食い込み、裾からは僅かにボクサーパンツが顔を覗かせている。

思わず生睡を飲む千冬、そんな実の姉からの情欲に満ちた視線に気づかない一夏はそのまま部屋の隅まで駆けて行く。遠のいていく一夏の尻を千冬はその場で立ち尽くしながら目で追う。

「千冬姉どうしたんだ？ボーツと突っ立て」

「は!?…あ、そうだな!すぐに始めよう!」

不審がる一夏に声をかけられてようやく我に返った千冬はぎこちなく雑巾をかけ始めた、少しでも動けば気が紛れるだろうと千冬は目の前の薄汚れた自室の床に視線を集

中させる。

「しかしホントに汚いなあ……千冬姉、前に掃除したのいつだよ？」

「あ、あー………お前が入学すると決まった後だったから……」

「毎日やれとは言わないけどせめて一週間に一回くらいのペースでやろうぜ、これじゃ人も呼べねえよ」

一人暮らしのダメな所を凝縮したかのような汚部屋の惨状にその元凶である姉にダメ出しする一夏。普段は尊敬を向ける実の姉であるが今は違う、高校一年生にありながら目線はもう完全に主婦のそれである。

項垂れる千冬を無視し床の汚れを拭いた雑巾を洗う為に洗面所に行く一夏。I S 学園に入学する前の家事を一任されていた頃の主婦としての姿にすっかり戻っていた。

「とりあえず今は床の汚れを拭くだけで済ますけど明日は壁とか風呂とかも念入りに掃除するからな、千冬姉」

「何も一変にやらなくとも……」

「一変にやらないと千冬姉やらないだろ？」

「うっ……」

血の繋がった姉弟に隠し事など無駄である、まるでエスパーの如く千冬のズボラな思考を読み取る一夏だった。

雑巾がけといういたってアナログな方法だがやらないよりはマシなようで、目に見えて綺麗になった床を満足そうに見つめる一夏。達成感に胸を張ると額にかいた汗を右腕で拭う。

「ふーっ…なんか汗かいちまったな」

「あ、ああ…」

背中にじつとりと汗をかいた一夏、Tシャツが汗で張り付き背中の中の美しい肩甲骨のラインが浮き出してしまう。ますます目に毒な姿となった実の弟を千冬は思わず視界から外す。

「千冬姉、先にシャワー浴びなよ」

「シャ、シャワー!?!」

「何驚いてるんだ?」

シャワー浴びろだなんてどう考えてもセツ、夜の営みの前準備ではないかとどぎまぎする千冬。すっかり思考がピンク色になってしまっている様だ。

「いや、掃除で汗かいちまっただろ?」

「あ、ああ…」

「先に入りなよ、俺このまま夕飯の支度するからさ」

姉の邪な思いになど気付きもしない一夏は爽やかな笑みを浮かべながらキツチンに立つ、本当に良い子に育ったなと千冬はしみじみ思う。

(……………尻も良い形をしているな……)

自身の思考がもう取り返しのでない方向に進んでいる事に彼女は気がついているのだろうか。

一方その頃、教師数人がかりで引き摺られて生徒指導に連行された箒は山田先生監視の元で反省文を書かされていた。

「私は、もう二度と、織斑一夏くんの、部屋に、全身の関節を外して、侵入したり、しません……」

「後82枚ありますからね、頑張ってください」

(……………困ったな、この方法が封印されると今後一夏の部屋への侵入手段が著しく制限される事になるぞ)

箒は反省文を書きながら次の侵入方法を模索していた、反省文を書きながらちつとも反省していないこの性欲魔人を止める術は果たしてこの学園に存在するのだろうか。

(いつそ幽体離脱や透視といったオカルト方面の手法も視野に入れるか?)

非科学の極みといった手法にまで手を染めようとしている筈、姉が泣くぞ。

(…そういえば篠ノ之流に『幻視』なる技があったような気が…)

「……………篠ノ之さん…篠ノ之さん? 何を書いているんですか?」

「あつ」

反省文の用紙にはオカルトめいた単語の羅列が書かれていた。熟考が過ぎた為か、筈はいつの間にならそのオカルトめいた手法の数々を文字に書き起こしてしまっていたようだった。

「……………反省が足りないようですね」

真耶のいつもの穏やかな表情の下に毛細血管が蛇行するように走っていく。

慌てて訂正をしようとする筈だったが、今この女に何か言い訳でもしよう物なら殺されるという予感が筈の身を縮こませる。

普段怒らない人が怒ると怖いという定説が事実であるという事を筈はその身をもつて知ることになる。

「どうすれば…」

千冬はシャワーを浴びながら今後の弟への対応を考えていた。

尻、胸、太もも。全部エロい。ダメだ考えれば考える程に弟のいやらしく育った躰が脳裏に浮かぶ。

(落ち着け千冬、思い出せ。師から教わった篠ノ之流心身安定術を…)

かつて箒の実家の道場で道場主だった箒の父から教わった術を用いて心頭滅却を凶る千冬、師匠も自分が教えた術がまさかこんな事に使われるとは思ひもしなかったであろう。

(呼吸を整えて…そうだ、現役時代も公式戦の前はこうして心を落ち着かせていたじゃないか)

今の一夏はもはや千冬がその生涯で対峙してきたあらゆる強敵よりも強大な存在だった。

XVideos再生数は今や4億を突破し文字通りIS学園の、いや日本の、いやアジアの、いや世界のセックスシンボルとしてその名を知らしめる一夏。彼は無自覚に織斑姉弟のエロくない方こと実の姉千冬の理性を粉碎しにかかる。

(落ち着け私…そうだ、無我の境地に至るのだ…)

千冬は自分の中からあらゆる雑念が抜けていくのを感じていた、気づけば視界にも変化が現れる。千冬の視界から色彩が抜けていく、世界が脱色されていく。

(いいいぞ……この感覚だ……)

千冬の修めた篠ノ之流剣術には様々な『技』が存在した。中にはオカルトめいた技も複数存在し、今千冬が行っている『技』もそのひとつだった。

篠ノ之流心身調整術、これは使用者の精神を安定させるだけの技ではない。これを極めた者は無我へと至り、やがて『幻視』の領域にまで突入する。千冬は自身の腕を見ると理科室に飾られた人体標本のように皮膚の奥の筋繊維や骨、血管すら透視する。今の彼女の視界はポデイスープの容器の中の白い薬液すら透視していた。

(いける……これならばあのセックスシンボルの前でも平常心を保つことが出来る筈だ！)

シャンプーの容器の薬液の中の気泡、バスタオルの繊維質、千冬は濡れた体を拭きながらリビングに向かう道中あらゆる物を透視していた。篠ノ之流心身調整術による無私の境地の副産物、この状態となった千冬はもはやあらゆる外的要因に対しても動じはしない。不動の精神を得た千冬は己の安寧を確信しつつ悠々とリビングへと続く扉を開けた。

「あ、千冬姉もう晩ご飯出来たから」

キッチンに立つ一糸まとわぬ姿の一夏を見るまでは。

「ブホオツ!?!」

突如現れた全裸の一夏に千冬の不動の精神は脆くも崩れ去った。千冬の『幻視』は一夏の着衣と下着を貫通し、その若く美しい裸体を捉えてしまったのだ。『幻視』が完全に裏目に出た千冬はその場で体勢を崩してしまふ。

「大丈夫か千冬!?!」

「く、来るな一夏!!」

心配そうに千冬に駆け寄る一夏、一糸まとわぬ姿で迫り来る弟を千冬は拒絶する。

「何でだよ千冬姉!」

完全に墓穴を掘った千冬は気迫をもって何とか精神を保とうとする、しかし中途半端に解除された『幻視』は千冬に新たな姿の一夏を映してしまう。

「……………ツ!!」

一夏の裸体を包む、赤いエプロン。そう、裸エプロンである。

「グハアツ!?!」

「千冬姉!?!」

のたうち回る姉を見るに見かねて制止を無視して駆け寄る一夏。姉の苦しみの元凶が自分だという事に彼は気づかない。もつとも、気づけと言っても無理な話だが。

「おれ保健室の先生呼んでくるから!! 待ってろよ千冬姉!!」

「!?!」

シミ一つない白い背中と尻を千冬に向けて玄関から外に出ていこうとする一夏。その背中をダツシユで追う千冬。

「ま、待て一夏!!」

「なんだよ!?!」

「服を着ろ一夏ア!!」

「はア!?! 着てるだろ!?!」

「良いから着ろ一夏ア!!」

「意味わかんねーこと言ってるんじゃねえよ千冬姉!!」

姉弟の不毛な言い争いはその後しばらく続いた。

故に一夏の耳には届かない、今なお部屋への侵入を計ろうとする者たちの声が。

幼児退行したラウラがドアの表面を爪で引つ掻く音も。高圧電流で古いギャグ漫画みたいに黒コゲになる箒の断末魔めいた叫びも。渾身の力を振り絞り拳で壁を破壊せんするセシリアの雄叫びも。壁にライトセーバーを突き立て溶断を試みる鈴の呼吸音も。聴こえない方が幸せだろう。

「雑誌の取材かあ」

部屋の外の魍魎魍魎たちの阿鼻叫喚の事など露知らず、一夏は先日千冬から知らされた雑誌取材の依頼を思い出していた。

「え、取材？俺に？」

「そうだ」

一夏との共同生活以来、なんだかやつれた様子の千冬が話を持ちかけたのは先日の放課後の事だった。

何でも一夏が I S を動かせると発覚した日以来この手の依頼は数多寄せられていたらしい。I S 学園に保護という形で一夏を入学させてからは千冬を筆頭とした学園の教師陣達が一夏の知らないところで水面下で処理していたそうだ。

今回はI S委員会からの信頼も厚いメディアからの依頼との事で学園側も一回限りという条件付きで取材の許可を了承し、一夏本人にも了承を得るために話が回ってきたという事だ。

「まあ、なんだ、うん。たまには、気分転換も兼ねて良いだろう。こういうのは」

いつもと違う歯切れの悪い姉の様子に怪訝な表情の一夏。あの共同生活から千冬の様子は少しおかしい、何故か一夏と顔を合わせようとしないのだ。普段の泰然とした姿は何処へやら、挙動不審で一夏は少し気味の悪さを覚えた。

一夏は知らない、千冬の視界には今なお『幻視』が解除されずに残ってしまったている事を。そして今、千冬の目には一夏が黒ビキニと黒長手袋とサイハイソックスと白いミニフリルエプロンを纏った格好で映っているという事を。

自らの『幻視』が生み出した弟のけしからん媚体を直視出来ない千冬はせめて1日くらい弟を視界から外したいと願い、半ば独断で今回の取材の話を受けたのだった。

「まあ千冬姉が言うなら」

「ああ…頼んだぞ……」

素直で良い子な一夏は千冬の猥雑な魂胆を見抜けず、その愛らしい顔を綻ばせる。かわい。全くなんて素直でかわいいんだ一夏は。

そして一夏は知らない、自分にまたしても苦難が降りかかる事を。今はまだ知らない。

「ここが千冬姉の言ってた…」

翌日、千冬に渡された地図に指示された場所に向かうとそこには一件の大きな商業ビルが建っていた。ビルに入っているテナントを示す看板に一夏は目をやると今日取材を受ける雑誌『インファイニット・ストライプス』の編集部がそこにはあった。ビルを見上げているとその中から一人の女性が一夏に声をかけてきた。

「キミが織斑一夏くん？」

「あ、はい」

「時間通りの到着ね、感心感心！」

「貴女は…？」

「私？私…」

女性は首から下げていた顔写真付きの社員証を一夏に見せる、社員証には『インファイニット・ストライプス副編集長：黛渚子』と書かれていた。

「黛……」

一夏はその苗字には聞き覚えがあった、あの口喧しいマシンガントークと、偏見、捏造。上等の方向性のジャーナリズムを掲げたあのIS学園新聞部の部長と同じ苗字だ。最後に彼女を見かけたのはいつ頃だろう。あの忌まわしきアリーナでの乱癡気騒ぎで聴いた断末魔以来、彼女の姿を一夏は学園内で見かけたことはなかった。

「薰子から貴方の話は良く聞いてるわ〜」

まあ生きてはいるんだろう、五体満足かは分からないが。顔を見れば薰子とよく似ている。ジャーナリストの家系なのかなと一夏は呑気な事を考えていた。

「はい…取材は以上です！ありがとうございます！ございました」

「は、はい！こちらこそ」

取材はスムーズに進み1時間足らずでインタビューは終了した。緊張の糸が解けた一夏は思わず脱力しながらソファに背を預けた。

「んー、イケメンは何しても絵になるねえ」

「あはは……」

渚子の適当極まる言葉に苦笑いで答える一夏、それに釣られてその場に居るスタッフも思わず笑みを零した。和やかな光景である。一夏の周囲から暫く失われていた淫欲抜きの平和な日常がそこにはあった。

「あ、そうそう」

「はい？」

「この後グラビアの撮影があるから織斑くん準備お願いね」

日常はなんの前触れもなく瞬く間に崩れ去ったのだった。

「いいわあ…少年の、この、若い…:スベスベの…お肌…」

「あの！これホントに雑誌の撮影なんですか!？」

態度を豹変させたスタッフたちが目の色を変えて一夏の躰に群がっていく。一夏は決死の抵抗を試みるも圧倒的な数の暴力は個人の抵抗を易々と鎮圧する。AVの冒頭シーンみたいな光景に渚子はその顔を悦に歪めた。

「ほらあ織斑くん暴れないでえ」

「ちよつとホントにやめっ…」

「他の人は脱いだよお!?! グラビア撮影なんて取材じゃ当たり前なんだから!」

「いや、けど…!」

「織斑くんのお姉さんも現役の頃は脱いだんだよお!!」

渚子のその言葉を聞いて押し黙ってしまう一夏。渚子は嘘は言っていない。まだ千冬が現役だった頃、マスメディアに彼女は引つ張りだこであった。

テレビや雑誌の取材はもちろんのこと、バラエティ番組に出演したり、ドラ○もんといった子供向け番組に本人役で声優としてゲスト出演したり。その中にはこういったグラビア撮影も存在した。

再度言うが渚子は別に嘘は言っていない。確かに千冬は過去にグラビアを出している、まあ健全なものだったが。少なくとも今一夏が撮らされようとしているような内容ではないのだが。

「ち、千冬姉も…」

「そうだよお…ISパイロットはみーんな脱いできたんだよお…!」

「だから織斑くんも脱がなきゃ!」

「そうそう…」

「これから将来ISに関わっていくのならココで脱いだ方が後々、色々、得だよお…」

？」

言葉巧みに一夏本人から自主的に脱ぐ方向にもっていく記者たち。報道の最前線にその身を置く百戦錬磨の彼女らマスコミにとって、世間知らずの男子高校生を脱がすなぞ朝飯前である。

「……そ、そういうことなら……ちよつとだけ」

一夏のその言葉を聞いて記者たちは、ゲスい笑みを浮かべる、妙齡の女たちが歳若い少年を囲んでほくそ笑むその光景はまさにアフリカのサバンナの真ん中で親元からはぐれた小鹿を襲うハイエナの群れようであつた。

「織斑先生本当によかつたんですか？」

「……何がだ？」

一夏を学園から送り出した千冬は真耶から呼び止められていた。神妙な面持ちの真耶と千冬。でもおっぱいはぶるんと揺れる、なんて凄まじい乳なのだ。

「今回の一夏くんの取材の件、相手は ” あ の ” インフィニット・ストライプスですよ？」

「大丈夫だ、それに今編集部にいる人材の大半はウチの学園のOGたちだ。心配はい

らないさ」

「……」

「……」

心配はいらないと千冬も断言したとはいえ二人の間になんとも言えない微妙な空気が漂う。あの頃のインフィニット・ストライプスを知る二人であるが故の心配だった。

IS専門情報誌『インフィニット・ストライプス』は今でこそ健全な情報誌ではあるが嘗て創刊したばかりの頃は情報誌とは名ばかりのゲスい3流ゴシップ誌であった。あの実話ナツ〇ルズや実装タ〇ー辺りと同列に扱われていた程である。

そしてその手の雑誌において一際読者の関心を集めるのは紙面を彩る麗しい容姿と魅惑のスタイルを持つ若い女性のグラビアである。嘗て現役時代の二人も当時の編集部の方々に言葉巧みに誘導させられ脱がされた。血走ったカメラマンと記者のあの下卑た視線は二人にとつて今でも忘れられない悪夢の光景だった。

千冬と真耶、二人のグラビアが載った号は雑誌が売れないとされるこの現代に於いて記録的な売上を飛ばし、特に真耶はその他者を圧倒するそのデカいおっぱい故か編集部から再度単独でのグラビア撮影のオファーがあつたが真耶本人が全力でそれを拒否し、何より当時IS関連事業健全化を推し進めていた政治家やら役員やら官僚やらその他大手メディアの所謂『偉い人』たちの怒りを買ったことにより『インフィニット・スト

ライブス』一度廃刊され、当時の編集部全員を総解雇の上再度創刊した。

I S 業界黎明期の恥部として、今なお密かに語り継がれる当時の悪行の数々。しかしそれは既に清算された過去の出来事だ。そんなこともあつたねと酒の席で精々話される程度の昔話だ。

そんな忌まわしき過去が今まさに織斑一夏という起爆剤を得て甦ろうといることを彼女は知る由もなかった。

「わんわんっ！織斑くんあそぼお！」

「くっ…」

ソファの上で一夏はその成熟しきる前の若く美しい、しなやかな裸体をカメラに晒していた。着ていた上着とシャツと靴下を脱がされ黒いストラックスのみの状態で一夏は背後から回り込んだ記者に胸を揉まれながら撮影をされていた。第三者から見られでもしたらもう言い逃れの出来ないアレな光景だった。

記者たちは何をとち狂ったか知らないが突然懐から犬の耳がくっ付いたカチューシャを取り出すとそれを自身の頭に付けて撮影をし始めた。

「わんわん！」

「ちよつと……なんで、犬」

犬どもは一夏の躰にまとわりつく様に手を這わせる、揉み、なぞり、撫でる。その光景を少し離れた所で渚子がカメラを回す。

「ご主人様あ…遊んでくださいだワン」

「えつと、なんのキャラですかそれ」

「キャラじゃないワン！ご主人様あ…」

記者たちのあまりの変化についていけない一夏は躰をよじらせ健気な抵抗を続ける。しかし記者、もとい犬の手はそんな抵抗など無意味とばかりに一夏の抵抗を掻い潜り、懐に潜り込んで来る。

一夏が躰をよじらせるのも反応していると犬たちは思い込み、その興奮を更に煽り立てる。

「わんわん！ご主人タマあ…」

「きつしよ」

一夏の口から思わず本音が漏れる、実際気持ち悪い。作者だって内心自分がこんなキ

モい文書を書けるのかとスマホを持つ手に鳥肌を立てている。

「ご主人様きしよいだなんて言っちゃダメだワン、傷つくワン」

「えーんえーんだワン」

「……………」

言葉とは真逆に全く傷ついたような素振りではない犬たち。一夏もいくら鈍感とはいえ流石に今自分が犬たちから受けているこの行為が取材の範疇を逸脱している事に気が付き始めた。まったくなんて鈍感で可愛いんだ一夏は。鈍感でえつちなボディの持ち主なんて、無知シチュが捗りそうな男である。

「あの、ホントに帰りま……」

一夏が本気で群がる犬どもを振りほどこうとしたその時だった、一夏のジャケットのポケットからスマホの着信音がスタジオに響いたのは。

「織斑くんダメだよー、スマホは電源を切るかマナーモードにしないと」

「あ、ハイ」

スマホの着信音が記者たちを現実に戻したのかは定かではないが、突然素に戻った元犬こと記者。キャラの振れ幅に一夏は困惑しながらスマホを手取る、画面には『千冬姉』の文字が。

内心弟の事が心配で仕方なかった千冬は居ても経っても居られずに思わず電話をし

たのだった。

「お姉さんから？」

「は…はい」

「いいよいいよ出ても、私たち何もしないからさ」

一夏は乱れた着衣を整えながらスマホの液晶画面に指を滑らせ千冬からの電話に出る。

『もしもし？私だ。一夏、今電話大丈夫か？取材は終わったか？』

「千冬姉、うん。今取材中。記者の人達と今撮影をしているところで……」

一夏が通話越しに姉へと現状を報告しようとしたその時だった。一夏の胸の双蕾に記者の指が添えられたのは。

「あんツ!？」

予想できなかった所への突然の刺激に艶やかな喘ぎを零す一夏。してやったりといった記者は一夏の躰の予想以上の感度の良さに、再度舌なめずりをする。

快楽のスイッチを強制的にONにされた一夏の媚躰に、再び盛る犬たちの腕が伸びる。

『お、おい!?!どうした一夏!?!』

スマホ越しに突如響いた、弟の艶めいた媚声に驚く千冬。遂に『幻視』が視覚だけで

ル的な何か写真を撮影していると思ひ込んでしまい、弟の危機を見過ごしてしまふ形となつた。

「ふふっ……犬かあ……」

可愛らしい犬たちと戯れる我が弟の写真が載つた雑誌はきつと良く売れるはず、増版もされる筈だ。プレミアも付いて高値で取引されるに違ひない。そんな呑気な事を考えながら千冬は学園の窓の手すりに肘をつき、慣れない取材と撮影に奮闘する弟の姿を夢想した。

「ハア……ハア……ツあ、はア……ッ」

一夏の手から、通話を終えたスマホが滑り落ちる。腕を伝う様に落ちたそれはソファの表面に軽くバウンドするとそのままスタジオの床へと堕ちていった。

「よおく我慢できたワン」主人様あ……」

ソファ越しに一夏の背後に回り込んだ記者、もとい犬が一夏の首筋から頬、耳元まで

を舐め回す。鼻先を当てながらやるその様は本当に犬のそれだ。胸の蕾を刺激するの
も忘れない。乳首をまるで指先でほじる様な愛撫に身を振らせて耐える一夏。

「あ……!?!」

ふと、一夏の胸先をほじる指が不意に離れた。突然の淫撫の中断に困惑の声を上げる
一夏。それまで犬の指先にほじられ、温められた胸先が程よく空調の効いた外気に触
れ、一夏の乳首は不覚にもその身を起立させる。

「ワンワンつご主人様あ……おやつの時間だワン!」

「おや、え……………は?」

一夏が淫撫に悶える躰を気だるく揺らし、スタジオの壁に取り付けられた時計に目を
やると、時計の針は3時を指していた。

おやつ、デザート。その類のものはスタジオには置かれてはいない。犬たちに向き直
る一夏、眼前には犬耳を頭に付けた頭のおかしな女が二匹。涎を垂らしなが迫るそれは
ゾンビさながらの姿だ。

「いただきますだワァン!!!」

そんな二匹が声高らかに吠える。いただきますと。何を食らうというのか。迫る、
犬。顔を前面に突き出し、一夏に迫る。口を開き、舌をまるで馬上槍の様に突き出し、狙
う。

一夏の乳首を。

それから先の事を一夏はよく覚えてない。どうやって帰路についたか、学園で待つクラスメイトや千冬姉にどんな顔をしておかえりと言ったか。はつきりと言えるのはただ一つ。

一夏の学園生活は更なる混沌へと向かうという事だ。